新古今和歌集　上

A 00
6326

Avv 6326

新古今和歌集序

夫和歌者群徳之祖百福之宗也玄象天成五際六
情之義未著素鵞地静三十一字之詠甫興爾来
源流寔繁長短雖異或抒下情而達聞或宣上
徳而致化或属遊宴而書懐或採艶色而寄言誠
是理世撫民之鴻徽賞心楽事之亀鑑者也是以
聖代明時集而録之各窮精微何以漏脱然猶崑嶺
之玉採之有餘鄧林之材伐之無盡物既如此歌亦宜
然仍詔参議右衛門督源朝臣通具大蔵卿藤原朝
臣有家左近衛権中将藤原朝臣定家前上総介藤
原朝臣家隆左近衛権少将藤原朝臣雅経等不択
貴賤高下令摭錦句玉章神明之詞佛陀之作為表
希夷雖而同録始於最昔迄于當時彼此惣編各俾
呈進毎至玄圃花芳之朝璞園風涼之夕斟難波津之
遺流尋浅香山之芳躅或吟或詠抜犀象之牙角
與鳳與鶴抹翡翠之羽毛裁成而得二千首類聚而為
二十巻名曰新古今和歌集矣時令節物之篇属四序而星
羅衆作雑詠之什並群品而雲布綜緝之致蓋云備矣
伏惟朕因代邪而践天子之位謝於漢宮而遁汾陽之蹤
今上陛下之厳親也雖無隙帝道之諮詢日域朝廷
之本主也争不賞我国之習俗方今荃宰合轄花夷
詠仁風化之楽萬春々日野之草芳飛月宴之聲千
秋々津洲之塵惟静誠纔與為有截之時可顧深恵
採簇之志故撰斯一集永欲傳百王彼上古之万葉集

者蓋是和歌之源也編次之起図准之儀星序惟邈煙
驚難披延喜有古今集四人含綸命而成之天暦有後
撰集五人奉　言而成之其後有拾遺後拾遺金葉詞
花千載等集雖出於　聖王數代之勅殊恨為撰者一
身之寂因茲訪延喜天暦二朝之遺美定清河歩虚五
輩之英豪挪神仙之居展刋備之席而已斯集之為
躰也先抽萬葉集之中更拾七代集之外深索而巌長
無遺廣求而片善必挙但雖張網於山野巌舎自逃
雖運筌於江湖小鮮偸漏誠當視聽之不違定有篇章
之猶遺今只随採得且所勒終也抑於古今者不載當代之
御製自後撰而初加其時之天章各考一部不滿十篇
而今所入之自詠已餘三十首六義若相兼一字雖可足
依無風骨之絶妙還有露詞之多加偏以耽道之思不
顧多情之眼乞厥取捨者家尚餘時運冲梯伏惟
豊皇徳而四十萬年異域自雖観　聖道之書史乎
神武開帝功而八十二代當朝未聽勅撰之揺集矣
定知天下之都人士女謳哥斯道之遇達矣不獨記仙
洞無何之郷有嘲風弄月之興亦欲呈　皇家元久之
歳有温故知新之心修撰之趣不在茲乎聖暦乙丑王春
三月云介

やまとうたハむかしあめつちひらけはじめて
人のしわざいまださだまらざりし時葦原
の中國のことの葉として稲田姫素鵞の里よ
りぞつたハれりけるしかありしよりこのかた
その道さかりにおこりその流れいまにた
ゆることなくして色にふけり心をのぶる
なかだちとし世をおさめ民をやはらぐる
道とせりかかりければ代々のみかどもこれ
をすてたまはずえらびおかれたる集ども家
々のもてあそび物として詞の花ののこれる
木のもとかたく思ひの露もれたる草がくれも
あるべからずしかハあれども伊勢の海
きよきなぎさの玉ハひろふともつくる事なく
いづみの杣しげき宮木ハひくともたゆべから
ず物みなかくのごとしうたの道又おなじかる
べしこれによりて右衛門督源朝臣通具
大蔵卿藤原朝臣有家左近中将藤原朝臣定
家前上総介藤原朝臣家隆左近少将藤原朝臣
雅経らにおほせてむかしいまの時をわかたず
たかきいやしき人をきらはず目に見えぬ神仏
の言の葉もうばたまの夢につたへたる事
までひろくもとめあまねくあつめしむおの
おのえらびたてまつれる所夏引のいとの
ひとすぢならず夕の雲のおもひ定めがたき

めづらしがりつゝみならのはし花かうてくしきあり
にすゑのうたに風はしきがゆゑに心ある詠者は
のうたにもしかしとて歌の心はさまで浅きよ
のおもふ人のうたはいかにもおしはかりつゝ
万葉集より後の哥は古今より
このかた七代の集まての哥さへうたとのなか
ふる事なりまとしてよき葉のかたちおほくあれ
のうたとくにことそうち鳥のおもひなし也
まもしうとのうたとの詠むうたもいひたりけ
なすこふおきて今はうきしたるとしてあり
あはれあはれてうたのたえにたえしおはるる
て新古今和歌集にいたりてもさかりなり

ある花とそのふしもとは夏まさりていはらすゝき
のかはしは秋は風よりあらそふてまさりける
冬はしろきえのふりしはゆきに雪にかへりし
のくもしもれしはこりにおもひかよふてしりし
そのこゝろ ばたゝさきにそひて世の中を見
この時をしかきは露の身にしてまた世に
て人の世となりし玉ほこのみちのゆくすゑ
さていはおのづから心のふかきにやあらむ
すさの山の雲井にまたなかりしかいかに
ならしのかはへくらべる花をしのびてもへ
まうしひかしかうつのわれならひて
待つしやま住吉の神はこゝろさきにはまん葉との

一 傳教大師に、仏を色のあいさとの給ひ
ほくのいきことをしもしい人の心とおもひ
ゆへしこゝろいのかの事とおもふ事に所
からしきもくしいつくしい作りしか
しはかくおもはいつはのく井まそれて
色作りやまとのこの君とうにからしく事
しはく[illegible]のかのうちの歌とも[illegible]おこ
さもの[illegible]かのく井にはかりて
とこもをさき地をうとをもを撰ひ一しおなれ
色若をさと[illegible]のやの歌[illegible]
[illegible]かりのこのとの歌の師のやの[illegible]
いつのくにかしとの[illegible]律令の[illegible]

ふるきうたのおほえぬを給ひて給
のみちをもちあそひけるこの集に[illegible]
我世にかへるをありける万葉集の歌
をわかりける時代にあらずして作者の人の名
事として延喜の御門の御時四人に勅
して古今集を撰せらる天暦の御時
[illegible]人にありて後撰集とあり[illegible]
又その後拾遺後拾遺金葉詞花千載の
集をえらはれつゝ歌の[illegible]
[illegible]もの[illegible]をあつめ[illegible]
古今後撰のわかの歌人の[illegible]
[illegible]せうしもしそ[illegible]しる[illegible]

それうへ式部らにしもおほくはへりつゝみつからきこえい
はしくらぬさしのあとをみるにたちにしたる中にて
らしりおとりけりいひしよろしくかやうのものおほく
の筆をしまりてのちくましたるよりはふみの
さましらむしけりけるにかゝるえほくの事
とのをそうる事あるきとまくらいはしに十首はかり
られ侍る道しるへ道とて（？）えらるゝ
ところ三十首よあり稽古（？）にこれ人のみちへ
き給しらぬにもしき者もちおはしきゆへ
りきりていつまてかきいれいかりつくま
哥をほかりみきこくのちく衆さしも侍らす
めちもこはえちか歌きわるかくもしのら

ゆふのおほきなるよるうこはやかなる哥しは老人の
二年三月廿日（？）あなたしきをかたりし給は
やよみてとそしらは我ねわれ侍れの道を
ある者あいとて何に侍てしかれとも
みふとかとそれりてまる人のそれは
そともみらとおもひつゝ何はゆしはおもふた
まつもし松のくひ風のちらて世法真妹（？）はかく俗
ごとそうひゆく月のくまくもして木のゆき
あまりし柳はうち根よろこひきめくちそをおもふ
いかにもしはいきを心ある心をもうとに

新古今和歌集巻第一

春哥上

はるたつといふ心をよみ侍りける

摂政太政大臣

みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり

春のはしめのうた

太上天皇

ほの〳〵と春こそ空にきにけらし天のかく山霞たなひく

百首哥奉りし時春の哥

式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ〴〵かゝる雪の玉水

五十首哥奉りし時

宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそ見えね春はきにけり

入道前関白太政大臣右大臣に侍りける時百首哥よませ侍りけるに
よみ侍りける立春の心を

皇太后宮大夫俊成

けふといへはもろこしまてもゆく春を都にのみと思ひけるかな

題しらす

俊恵法師

春といへは霞みにけりなきのふまて波まに見えし淡路島山

西行法師

岩まとちし氷もけさはとけそめて苔の下水みちもとむらん

読人不知

風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たなひき春はきにけり

時はいまは春になりぬとみ雪ふる遠き山へに霞たなひく

B S0461

堀河院御時百首歌たてまつりける時のこりの
雪乃心をよみ侍る　権中納言国信
春日野のしたもえわたる草のうへにつれなくみゆる春のあは雪
題不知　山辺赤人
あすよりはわかなつまむとしめし野にきのふもけふも雪はふりつゝ
天暦御時屏風哥　壬生忠見
春日野の草はみとりになりにけりわかなつまむとたれかしめけん
崇徳院に百首哥たてまつりける時春哥
前参議教長
若菜つむ袖とそみゆる春日野のとふひの野へのゆきのむらきえ
延喜御時の屏風に　紀貫之
行てみぬ人もしのへと春の野のかたみにつめるわかななりけり
述懐百首哥よみ侍りける若菜
皇太后宮大夫俊成
沢におふるわかなならねといたつらにとしをつむにも袖はぬれけり
日吉社によみてたてまつりける子日の哥
さゝなみやしかの濱松ふりにけりたか世にひけるねの日なるらん
百首哥たてまつりし時
藤原家隆朝臣
谷川のうち出る浪もこゑたてつうくひすさそへ春の山風
和哥所にて関路鶯といふ事を
太上天皇
鶯のなけともいまたふる雪に杉の葉しろき逢坂の山
堀河院に百首哥たてまつりける時のこりの

霞のうたよみ侍りける

藤原仲實朝臣

春きてハ花とも見よとかた岡の松のうハ葉にあわ雪そふる

中納言家持

まきもくのひはらのいまたくもらねハ小松か原にあは雪そふる

讀人不知

今更に雪ふらめやもかけろふのもゆる春日と成にしものを

凡河内躬恒

降つもる花とハ見えし春の青柳のえたにかゝれる白雪

家百首哥合に餘寒の心を

攝政太政大臣

空ハ猶かすミもやらす風さえて雪けにくもる春の夜の月

和哥所にて春山月の心をよみ侍ける

越前

山ふかミなほかけさむし春の月空かきくもり雪ハふりつゝ

詩をつくらせて哥にあはせ侍りしに水郷春望と

いふ事を

左衛門督通光

みしまえや霜もまたひぬあしの葉につのくむ程の春風そふく

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわかはをこゆるしら浪

春の哥とて

西行法師

降つミし高ねのミ雪とけにけり清瀧川の水の白浪

源重之

梅かえに物うきほとにちる雪を花ともいはし春の名たてに

一　山邊赤人

[illegible]

梅の枝になきてうつろふ鶯のはねしろたへにあは雪そふる

百首哥よみてたてまつりし時

惟明親王

うくひすの涙のつらゝうちとけてふるすなからやはるをしるらん

題しらす

志貴皇子

岩そゝくたるみのうへのさわらひのもえいつる春になりにけるかも

百首歌たてまつりし時

前大僧正慈円

あまの原ふしの煙の春の色のかすみになひくあけほのゝそら

崇徳院に百首哥たてまつりける時

藤原清輔朝臣

あさかすみふかくみゆるやけふりたつむろのやしまのわたりなるらん

晩霞といふ事をよめる

後徳大寺左大臣

なこの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふおきつしら浪

をのこともゝ詩をつくりて哥にあはせ侍しに

水郷春望といふ事を

太上天皇

見わたせは山もとかすむ水無瀬川ゆふへは秋となに思ひけん

摂政太政大臣家百首哥合に春曙といふ心を

よみ侍ける

藤原家隆朝臣

霞たつすゑの松山ほの〳〵と浪にはなるゝよこ雲のそら

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに

春の夜の夢のうき橋とたえしてみねにわかるゝ横雲の空

きさらきまて梅花さき侍らさりける年よみ侍りける

中務

しるらめや霞の空をなかめつゝ花もにほはぬ春をなけくと

守覚法親王家五十首哥に

藤原定家朝臣

おほそらハ梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

題しらす

宇治前関白太政大臣

をられけり紅にほふ梅の花けさ白妙に雪はふれれと

かきねの梅をよみ侍りける

藤原敦家朝臣

あるしをハたれともわかす春ハたゝかきねの梅をたつねてそみる

梅花遠薫といふ心を

源俊頼朝臣

心あらはとはましものを梅か香にたか里よりかにほひきつらん

百首哥たてまつりし時

藤原定家朝臣

梅花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影そあらそふ

藤原家隆朝臣

梅か香にむかしをとへハ春の月こたへぬ影そ袖にうつれる

千五百番哥合に

右衛門督通具

むめの花たか袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとはゝや

皇太后宮大夫俊成女

梅花あかぬ色香もむかしにておなしかたみの春の夜の月

むめの花にそへて大貳三位につかはしける

権中納言定頼

こぬ人によそへてみつる梅の花ちりなん後のなくさめそなき

返し

大貳三位

春ことに心をしむる花の枝にたかなほさりの袖かふれつる

二月雪落衣といふ事をよみ侍ける

康資王母

梅ちらす風もこえてや吹つらんかほれる雪の袖にみたるゝ

題しらす

西行法師

とめこかし梅さかりなるわか宿をうときも人はおりにこそよれ

百首哥たてまつりし時春歌

式子内親王

なかめつる今日はむかしに成ぬとも軒はの梅は我をわするな

土御門内大臣家にて梅香留袖といふ事をよみ侍けるに

藤原有家朝臣

ちりぬれはにほひはかりを梅の花ありとや袖に春風のふく

題しらす

八条院高倉

ひとりのみなかめてちりぬ梅の花しるはかりなる人はとひこす

文集嘉陵春夜詩不明不暗朧々月といへる事をよみ侍ける

大江千里

てりもせすくもりもはてぬ春の夜のおほろ月夜にしく物そなき

祐子内親王ふちつほにすみ侍けるに女房うへ人なとさるへきかきり物語して春秋のあはれいつれにか心ひくなとあらそひ侍けるに人

人おほく秋に心よせ侍けれは

藤原孝標朝臣女

あさみとり花もひとつにかすみつゝおほろに見ゆる春の夜の月

百首歌奉りし時　源具親

なにはかたかすまぬ浪もかすみけりうつるもくもるおほろ月夜に

摂政太政大臣家百首歌合に

寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわひぬおほろ月夜の明ほのゝ空

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

聞人ぞ涙はおつる帰る雁なきてゆくなる明ほのゝ空

題しらす　讀人しらす

ふる里にかへる雁かねさよふけて雲ちにまよふこゑきこゆなり

帰雁を　摂政太政大臣

忘るなよたのむの澤を立雁も稲葉の風の秋の夕暮

百首歌たてまつりし時

帰雁今はの心ありあけに月と花との名こそおしけれ

守覚法親王の五十首歌に

藤原定家朝臣

霜まよふ空にしをれし雁かねの帰るつはさに春雨そふる

閑中春雨といふ事を　大僧正行慶

つくゝゝと春のなかめのさひしきはしのふにつたふ軒の玉水

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

伊勢

水の面にあやおりみたる春雨や山のみとりをなへてそむらん

百首歌たてまつりし時　攝政太政大臣

ときはなる山の岩ねにむす苔のそめぬ緑に春雨そふる

清輔朝臣の家にて雨中苗代といふ事をよみ侍る　勝命法師

雨ふれは小田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて

延喜御時の屏風に　凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳のいとのみとりそ色まさりける

題しらす　太宰大貳高遠

うちなひき春はきにけり青柳のかけふむみちに人のやすらふ

輔仁親王

みよしのゝおほかはのへのふる柳かけこそみえね春めきにけり

百首歌よみ侍ける　崇徳院御哥

嵐ふく岸の柳のいなむしろおりしく浪にまかせてそみる

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹といふ事を　権中納言公経

たかせさすむつたのよとの柳原みとりもふかくかすむ春かな

百首歌よみ侍ける時春の哥とてよめる　殷富門院大輔

春風のかすみふきとくたえまよりみたれてなひく青柳のいと

千五百番歌合に春哥　藤原雅經

白雲のたえまになひく青柳の葛城山に春風そふく

藤原有家朝臣

青柳のいとに玉ぬくしら露のしらすいくよの春かへぬらん

宮内卿

うすくこき野への緑の若草にあとまてみゆる雪のむらきえ

曽祢好忠

あらを田のこその古あとのふるよもき今は春へとひこはえにけり

壬生忠見

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日にまかせたらなん

西行法師

よしの山さくらかえたに雪ちりて花おそけなる年にもあるかな

白河院鳥羽におはしましける時人々山家待花といへる心をよみ侍りける

藤原隆時朝臣

さくら花さかはまつ見んとおもふまに日かすへにけり春の山さと

亭子院歌合歌

紀貫之

我心春の山へにあくかれてなかなかし日をけふもくらしつ

摂政太政大臣家哥合に野遊の心を

藤原家隆朝臣

おもふとちそこともしらす行くれぬ花の宿かせ野への鴬

百首哥奉りし時

式子内親王

今さくらさきぬとみえてうすくもり春にかすめる世のけしきかな

題不知

よみ人しらす

ふしておもひおきてなかむる春雨に花のしたひもいかにとくらん

中納言家持

ゆく人もとまるもおしむ春霞たつたの山の初さくら花

花の哥とてよみ侍る

西行法師

よし野山こそのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ

和歌所にて哥よみ侍りけるに春の哥とて

よみ侍る

寂蓮法師

かづらきや高間の桜咲にけりたつたのおくにかゝる白雲

題しらず

讀人しらず

侍臣の歌あはせ[illegible]花のうた

源公忠朝臣

春の日の年はあ[illegible]花の盛[illegible]

[illegible]

道命法師

白雲のたえぬ山の峯はいつも咲花とぞ見えける

百首歌奉りし時

藤原定家朝臣

しら雲の春はかさねて立田山小倉の峯に花匂ふらし

題しらず

藤原家衡朝臣

よし野山花やさかりに匂ふらんふるさとさらぬ峯の白雲

和歌所哥合に羇旅花といふ事を

藤原雅経

岩根ふみかさなる山をわけすてゝ花もいくへのあとの白雲

千首哥よませ給ひし時

さきにけり花よくちれば木のもとの[illegible]山の[illegible]

[illegible]

前大僧正慈円

ちりちらす人もたつねぬ故郷の露けき花に春風そふく

千五百番歌合に　右衛門督通具

礒のかみふる野の桜たれうへて春はわすれぬかた見なりけん

正三位季能

花そみる道のしは草ふみわけて吉野ゝ宮の春のあけほの

藤原有家朝臣

あさ日影にほへる山の桜花つれなくきえぬ雪かとそみる

新古今和歌集巻第二

春哥下

釋阿和哥所にて九十賀し侍りし折屏
風に山に桜さきたる所を
太上天皇

桜さく遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな

千五百番歌合に春哥
皇太后宮大夫俊成

いくとせの春に心をつくしきぬあはれとおもへみよしのの花

百首哥に
式子内親王

はかなくて過にしかたをかぞふれば花に物思ふ春ぞへにける

内大臣に侍りける時望山花といへる心をよみ侍りける
京極摂政前太政大臣

白雲のたなびく山の山桜いづれを花と行て折らまし

祐子内親王家にて人々花哥よみ侍りけるに
権大納言長家

花の色にあまぎる霞たちまよひ空さへにほふ山桜かな

題不知
山邊赤人

ももしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ

在原業平朝臣

花にあかぬなげきはいつもせしかども今日の今宵ににる時はなし

凡河内躬恒

いもやすくねられざりけり春の夜は花のちるのみ夢に見えつつ

伊勢

山さくらちりてみ雪にまかひなはいつれか花と春にとはなむ

紀貫之

我宿の物なりけらし桜花ちるをはえこそいとはさりけれ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

讀人しらず

霞たつ春の山辺の桜花あかすちるとや鶯のなく

題しらず

よみ人

春雨のふるはなみたか桜花ちるをおしまぬ人しなけれは

題しらず

ものことに散はかく成ぬる木のもとに陰の風のまにまに

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

風かよふねさめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

守覚法親王五十首歌よませ侍りける時

藤原家隆朝臣

このほとはしるもしらぬも玉桙のゆきかふ袖は花の香そする

摂政太政大臣家五十首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

又やみむかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちる春のあけほの

花の哥とてよみ侍りける

祝部成仲

ちりちらすおほつかなきは春霞たなひくやまの桜なりけり

山寺にまかりてよみ侍りける

能因法師

山さとの春の夕暮きてみれは入あひのかねに花そちりける

題しらず　恵慶法師

桜ちる春の山へハうかりけり世をのかれにとこしかひもなく

花見侍ける人にさそはれてよみ侍ける　康資王母

山桜をしむ心のいくたひかちる木のもとに行てかへらん

題しらず　源重之

春雨のそほふる空のをやみせすおつる涙に花そちりける

かりかねの帰る羽風やさそふらん過行峯の花ものこらぬ

百首哥めしける時春哥　源具親

時しもあれたのむの雁の別さへ花ちるころのみよしのゝ里

見山花といへる心を　大納言経信

山ふかみ杉のむらたちみえぬまて尾上の風に花のちるかな

堀河院御時百首歌たてまつりけるに花の哥　大納言師頼

木のもとの苔のみとりもみえぬまてやへちりしける山桜かな

花十首哥よみ侍けるに　左京大夫顕輔

麓まて尾上のさくらちりこすハたなひく雲とみてや過まし

花落客稀といふ事を　刑部卿範兼

花ちれハとふ人まれに成はてゝいとひし風の音のみそする

題しらず　西行法師

うしとて花すてゝくるゝまゝにちるは桜をおしみ[illegible]けれ

越前

山里の庭よりほかの道もかな花ちりぬやと人もこそとへ

五十首歌よませ侍りし中に湖上花を

宮内卿

花さそふひらの山風吹にけりこき行舟のあとみゆるまて

関路花を

逢坂や木すゑの花を吹からにあらしそかすむ関の杉むら

百首歌よませ侍りし時春歌

二条院讃岐

山たかみ峯のあらしにちる花の月にあまきるあけかたの空

百首歌めしける時春歌

崇徳院御歌

やまたかみ岩ねの桜ちる時はあまのは衣なつるとそみる

春日社歌合とて人々歌よみ侍りしに

刑部卿頼輔

ちりまかふ花のよそめはよしの山あらしにさはく峯のしら雲

最勝四天王院障子によしの山かきたる所

太上天皇

みよしのゝ高ねの桜ちりにけりあらしもしろき春のあけほの

千五百番歌合に

藤原定家朝臣

桜色の庭の春風あともなしとははそ人の雪とたにみむ

ひとゝせ忍ひて大内の花見にまかりて侍
しに庭にちりて侍りし花をすゝりのふたに入て

おなしく摂政のもとへつかはし侍し

太上天皇

けふたにも庭をさかりとうつる花きえすはありとも雪かともみよ

摂政太政大臣

さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花の白雪

家のやへさくらをおらせて惟明親王のもとにつかはしける

式子内親王

やへにほふ軒はの桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もかな

惟明親王

やへさくらおりしる人のなかりせは見し世の春にいかてあはまし

五十首哥たてまつりし時

藤原家隆朝臣

さくら花ゆめかうつゝか白雲のたえてつねなき峯の春風

題しらす

皇太后宮大夫俊成女

うらみすやうき世を花のいとひつゝさそふ風あらはと思ひけるをは

後徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはし桜花さきてはちりぬあはれ世中

入道前関白太政大臣家に百首哥よませ侍

ける時

俊恵法師

なかむへきのこりの春をかそふれは花とともにもちる涙かな

花哥とてよめる

殷富門院大輔

花もまたわかれん春はおもひいてよさきちるたひの心つくしを

千五百番哥合に

左近中将良平

ちる花のわすれかたみの峯の雲そをたにのこせ春の山かせ

落花といふ事を　藤原雅経
花さそふ名残を雲に吹とめてしはしはにほへ春の山かせ
題不知　後白河院御哥
おしめともちりはてぬれは桜花今は木すゑをなかむはかりそ
残春の心を　摂政太政大臣
吉野山花のふる里あとたえてむなしき枝に春風そ吹
題しらす　大納言経信
ふる里の花のさかりはすきぬれとおもかけさらぬ春の空かな
百首歌の中に　式子内親王
花はちりその色となくなかむれはむなしき空に春雨そふる
小野宮のおほきおほいまうちきみ月輪寺にて花見侍りける日よめる　清原元輔
たかためかあすはのこさむ山桜こほれてにほへけふのかたみに
曲水宴をよめる　中納言家持
から人の舟をうかへてあそふてふけふそわかせこ花かつらせよ
紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふことをよみ侍りける　坂上是則
花なかす瀬をもみるへき三日月のわれて入ぬる山のをちかた
雲林院の桜見にまかりけるにみなちりはててわつかに片枝にのこりて侍りけれは
尋ねつる花も我身もおとろへて後の春ともえこそちきらね
千五百番哥合に　寂蓮法師
おもひたつ鳥はふるすもたのむらんなれぬる花のあとのゆふくれ
ちりにけりあはれうらみのたれなれは花のあとゝふ春の山かせ

権中納言公経

春ふかくたつねいるさの山の端にほの見し雲の色そ残れる

百首歌よませ給ける時

摂政太政大臣

しら川まて山ゝをふ花よ吉くはゆの雲にまつのかけ

藤原家隆朝臣

吉野の岸の山吹さきにけり峯のさくらはちりはてぬらん

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなを水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川

堀河院御時百首哥奉りける

権中納言国信

岩根こす清滝川のはやけれは波をりかくる岸の山吹

題しらす

厚見王

かはつなく神なひ川に影みえて今かさくらん山ふきの花

延喜十三年亭子院哥合哥

藤原興風

あしひきの山ふきの花ちりにけり井手のかはつは今やなくらん

花宴会ありて藤花宴作らせ給ひ

延喜御哥

かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてにほへる藤なみの花

天暦四年三月十四日藤壺にわたりて花をしませ給けるに

天暦御哥

まとゐして見れともあかぬ藤なみのたゝまくおしき今日にも有かな

清慎公の家屏風に書ける

暮ぬとハおもふ物から藤の花さける宿にハ春そひさしき

家乃松にかゝれる藤を見て

緑なる松にかゝれる藤なれとおのかころとそ花ハさきける

春乃暮つかた實方朝臣のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

ちりのこる花もやあるとうちむれてみ山かくれをたつねてしかな

修行し侍りける春のくれに

大僧正行尊

木のもとのすみかも今ハあれぬへし春しくれなハ誰かとひこむ

五十首哥よませ侍りし時

寂蓮法師

暮てゆく春のみなとハしらねとも霞におつる宇治の柴舟

山家三月盡といふ事を侍ける

藤原伊綱

こぬまても花ゆへ人のまたれつる春もくれぬるみ山への里

題しらす

皇太后宮大夫俊成女

儀よあはれいつもさこそはいひしかと移ろひはつる春の暮

寛平御時きさいの宮の哥合歌

讀人しらす

まてといふにとまらぬ物としりなからしひてそおしき春のわかれハ

山家暮春といふ心を

宮内卿

柴の戸をさすや日かけのなこりなく春くれかゝる山の端の雲

百首哥たてまつりし時

攝政太政大臣

まとゐせしこゝの花をいさしくはふるさとの積はとしけの峯雲

新古今和歌集巻第三

夏哥

題不知　　　　持統天皇御哥

春すきて夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山

素性法師

おしめともとまらぬ春もある物をいはぬにきたる夏衣かな

更衣をよみ侍ける

前大僧正慈円

ちりはてゝ花のかけなき木のもとにたつ事やすき夏衣かな

源道済

夏衣きていくかにかなりぬらんのこれる花はけふもちりつゝ

更衣の心をよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成女

おりふしもうつれはかへつ世中の人の心の花そめの袖

卯花如月といふ事をよませ給ける

白河院御哥

卯の花のむらむらさける垣ねをは雲まの月のかけかとそみる

題しらす

太宰大弐重家

卯の花のさきぬる時は白妙の波もてゆへる垣ねとそみる

斎院に侍ける時神館にて

式子内親王

わすれめやあふひを草にひきむすひかりねの野への露のあけほの

小侍従

待つ人はその山のおくもいまはとてほとゝきすにこゑもなきなん

最勝四天王院の障子にあさかのぬまかきたる所

藤原雅經

野邊はまたあさかの沼にかる草のかつみるまゝにしけるころかな

崇德院に百首歌たてまつりける時夏哥

待賢門院安藝

ゆくあさきおかのしけみ草しけてわけてゆく袖の露

題しらす

曾祢好忠

花ちりし庭の木の葉もしけりあひてあまてる月の影そまれなる

らいくく根人のこえふしと草葉にまて見えける

藤原元真

夏草はしけりにけりなたまほこの道行人もむすふはかりに

延喜御時哥

夏草はしけりにけれと郭公なと我やとに一こゑもせぬ

柿本人麿

なく聲をえやは忍はぬ郭公初うの花のかけにかくれて

賀茂に詣て侍けるに人の郭公なかなんと申ける曙かた岡の梢おかしく見え

侍けれは

紫式部

時鳥聲まつほとはかた岡のもりのしつくにたちやぬれまし

かもにこもりたりける暁郭公のなきけれは

弁乳母

郭公み山いつなる初聲をいつれの里のたれかきくらん

題しらす

讀人しらす

又月やよひの花は秋のもみぢにはさけしもあかぬ心へなにし若

えぬ春もはるくやさ月やまのやまかくきぬ

何鳥いくらのあそびいわろ秋の侍てのへのはぶ

中納言家持

大中臣能宣朝臣

大納言経信

待客関歌と云人ちらゝを

白河院御歌

題不知

花園左大臣

ちる花の

前中納言匡房

卯の花のさかりに

入道前関白右大臣に侍ける時百首歌よみ

せ侍りける時よみ侍る

皇太后宮大夫俊成

しらつゆ

相模

題しらず

紫式部

も寒しといひやくやく時鳥出てものゝ[illegible]

寛治八年前太政大臣高陽院哥合によめる

周防内侍

夜をかさね待かね山の郭公雲井のよそに一声そきく

海邊郭公といふ心をよみ侍りける

按察使公通

ゆふこなきよせは出し郭公[illegible]

百首歌奉りし時夏哥中に

民部卿範光

郭公猶一こゑはおもひいてよおいその杜の夜半のむかしを

郭公をよみ侍りける

八條院高倉

一声は思ひそあへぬ郭公たそかれ時の雲のまよひに

千五百番歌合に　摂政太政大臣

[illegible]

後徳大寺左大臣家に十首歌よみ侍りける

よみてつかはしける　皇太后宮大夫俊成

我心いかにせよとて郭公雲まの月の影に鳴らん

郭公の歌とてよみ侍りける

前太政大臣

郭公なきてそ入日の山の梢は月もしらうちける

権中納言親宗

有明の月は待ぬに出ぬれと猶山ふかき郭公かな

杜間郭公といふ心を

藤原保季朝臣

[illegible]の松の[illegible]

題しらす　藤原家隆朝臣

いかにせむこぬよあまたの郭公またしとおもへはむらさめの空

百首歌奉りし時

式子内親王

声はして雲ちにむせふ郭公なみたやそゝくよゐのむらさめ

千五百番歌合に　権中納言公経

ほとゝきすなほうとまれぬ心かなながなく里のよその夕暮

西行法師

きかすともこゝをせにせむ郭公山田の原の杉のむらたち

時鳥あまた[illegible]

[illegible]

後徳大寺左大臣

[illegible]

五首歌人々によませ侍りける時夏歌とてよみ侍りける

摂政太政大臣

うちしめりあやめそかほる郭公なくやさ月の雨の夕暮

述懐によせて百首歌よみ侍りける時

皇太后宮大夫俊成

けふは又あやめのねさへかけそへて乱そまさる袖の白玉

五月五日くすたまつかはして侍りける人に

大納言経信

あかなくにちりにし花のいろいろはのこりにけりな君かたもとに

[illegible]

ろともになかめあかしてあしたになかきねを
つゝみて紫式部につかはしける

上東門院小将

なへて世のうきになかるゝあやめ草けふまてかゝるねはいかゝみる

返し

紫式部

なに事とあやめはわかてけふもなほたもとにあまるねこそたえせね

山畦早苗といふ事を

大納言経信

早苗とる山田のかけひもりにけりひくしめ縄に露そこほれて

釋阿九十賀給ける時屛風に五月雨

攝政太政大臣

を山田にひくしめなはのうちはへてくちやしぬらむ五月雨のころ

題しらす

伊勢大輔

いかはかり田子のもすそもそほつらん雲まもみえぬころの五月雨

大納言経信

みしま江の入江のまこも雨ふれはいとゝしほれてかる人もなし

前中納言匡房

まこもかるよとの澤水ふかけれとそこまて月のかけはすみけり

雨中木繁といふ事を

藤原基俊

玉かしはしけりにけりな五月雨に葉もりの神のしめはふるまて

百首歌よませ侍りける時

入道前関白太政大臣

五月雨はたくものけふりうちしめりてやすまのあまもくらしつゝ

藤原定家朝臣

たまほこの道ゆき人のことつてもたえてほとふる五月雨のそら

荒木田氏良

五月雨の雲のたえまをなかめつゝ窓より西に月をまつかな

百首哥奉りし時

大納言忠良

あふちさく外面の木かけ露おちて五月雨はるゝ風わたるなり

五十首哥奉りしに

藤原定家朝臣

五月雨の月はつれなきみ山よりひとりも出る郭公かな

太神宮へ奉りし夏の哥の中に

太上天皇

郭公雲ゐのよそにすきぬなりはれぬおもひの五月雨のころ

建仁元年三月哥合に雨後郭公といふ心を

二條院讃岐

さみたれの雲まの月のはれゆくをしはしまちける郭公かな

皇太后宮大夫俊成

たれかまた花橘におもひ出む我もむかしの人となりなは

右衛門督通具

行すゑを誰しのへとて夕風にちきりかおかむ宿のたち花

百首歌奉りし時夏哥

式子内親王

かへりこぬ昔を今とおもひねの夢の枕にゝほふ橘

前大納言忠良

橘の花ちる軒のしのふ草むかしをかけて露そこほるゝ

五十首歌たてまつりし時
前大僧正慈円
五月やみみしかき夜はのうたゝねに花たちはなの袖にすゝしき
題しらす
読人しらす
ことしより花さきそむるたちはなのいかてむかしの香ににほふらむ
時鳥花たちはなの香をとめてなくはむかしの人や恋しき
皇太后宮大夫俊成女
たち花のにほふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖の香そする
藤原家隆朝臣
ひとりして花たちはなにしのふ梅のそてしのふの香やむかしの人
守覚法親王五十首歌よませ侍りける時
藤原定家朝臣
夕暮はいつれの雲のなこりとて花たちはなに風の吹らん
堀河院御時きさいの宮にて閑中月といふ心を
なのともゝつうつゝ物はほかにきゝつゝ
権中納言国信
郭公月のかけしるきさ袖へやとしもあかておもはん
白河院御哥
庭の面は月もらぬまて成にけり梢に夏の影しけりつゝ
恵慶法師
我やとのそともにたてるならの葉のしけみにすゝむ夏はきにけり
摂政太政大臣家百首哥合に鵜河といふ事を
前大僧正慈円
うかひ舟あはれとそみるものゝふのやそうち川の夕やみの空

寂蓮法師

うかひ舟たかせさしこすほとなれやむすほゝれゆくかゝり火のかけ

皇太后宮大夫俊成

大井河かゝりさしゆくうかひ舟いくせに夏の夜をあかすらん

藤原定家朝臣

久方の中なる河のうかひ舟いかに契りてやみを待らん

百首歌奉りし時　摂政太政大臣

いさり火の昔の光ほのみえてあしやの里にとふほたるかな

式子内親王

窓ちかき竹の葉すさふ風のをとにいとゝみしかきうたゝねの夢

鳥羽にて竹風夜涼といふ事を人々つかうまつりしとき

春宮権大夫公継

窓ちかきいさゝむら竹風ふけは秋におとろく夏の夜の夢

五十首歌奉りし時

前大僧正慈円

むすふ手にかけみたれゆく山の井のあかても月のかたふきにける

最勝四天王院の障子にきよみかせきかきたる所

左衛門督通光

清見かた月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪のうへかな

家百首歌合に

摂政太政大臣

かさねてもすゝしかりけり夏衣うすき袂にやとる月影

摂政太政大臣家にて詩歌をあはせけるに

水辺自秋涼といふ事をよみ侍りし

有家朝臣

すゝしさは秋やかへりてはつせ河ふる河のへの杉の下陰

題しらす　西行法師

道のへに清水なかるゝ柳陰しはしとてこそ立とまりつれ

よられつる野もせの草のかけろひて涼しくくもる夕立の空

崇徳院に百首哥たてまつりける時

藤原清輔朝臣

をのつから涼しくもあるか夏衣ひもゆふくれの雨のなこりに

千五百番哥合に　権中納言公経

露すかる庭の玉篠打なひきひとむら過ぬ夕立の雲

雲隔遠望といふ心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

とをちには夕立すらし久堅の天の香具山雲かくれ行

夏月をよめる　従三位頼政

庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月かな

百首哥中に　式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたふく山にひくらしの声

千五百番哥合に　前大納言忠良

夕付日さすや庵の柴の戸にさひしくもあるかひくらしの声

百首哥よみ侍りける時

摂政太政大臣

秋ちかきけしきの森に鳴蝉の涙の露や下葉そむらん

二条院讃岐

鳴蝉の声も涼しき夕暮に秋をかけたる森の下露

壬生忠見

仲ほらといふはほのかなしもつさしもすゝ夜の螢かな

五十首哥奉りし時　摂政太政大臣

螢とふ野澤にしけるあしの根のよなよなしたにかよふ秋風

刑部卿頼輔哥合し侍けるに納涼をよめる　俊恵法師

楸おふるかた山陰にしのひつゝ吹ける物を秋の夕風

瞿麦露滋といふ事を　高倉院御哥

志ら露のたまもてゆへるませのうちに光さへそふとこ夏の花

夕かほをよめる　前太政大臣

白露のなさけおきけることのはやほのほの見えし夕かほの花

百首哥よみ侍ける中に　式子内親王

たそかれの軒はの荻にともすれはほにいてぬ秋そ志たにこととふ

夏哥とてよみ侍ける　前大僧正慈円

雲まよふ夕に秋をこめなから風もほにいてぬ荻の上かな

太神宮へたてまつりし夏哥の中に　太上天皇

山里の峯のあま雲とたえして夕すゝしき槇の下露

文治六年女御入内屏風に　入道前関白太政大臣

岩井くむあたりのをさゝ玉こえてかつかつむすふ秋の夕露

千五百番哥合に　宮内卿

そくこゑはをかふのうへに初秋とおもへは涼し風そ身にしむ

百首哥奉し時　前大僧正慈円

夏衣かたへすゝしくなりぬなり夜やふけぬらむゆきあひのそら

延喜御時月次屏風に　壬生忠岑

夏はつるあふきと秋乃白露といつれかまつはおかむとすらん

貫之

みそきする河のせみれはから衣ひもゆふくれになみそたちける

新古今和歌集巻第四

秋哥上

題不知　　中納言家持

神なひのみむろの山の葛かつらうら吹かへす秋は来にけり

百首歌たてまつりし時　　崇徳院御哥

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とそ風もきこゆる

藤原季通朝臣

この寝ぬる夜のまに秋は来にけらし朝けの風のきのふにもにぬ

文治六年女御入内屏風に　　後徳大寺左大臣

いつもきく麓の里とおもへともきのふにかはる山おろしの風

百首歌よみ侍りける中に　　藤原家隆朝臣

きのふたにとはむと思ひし津の国の生田の杜に秋は来にけり

最勝四天王院の障子に高砂かきたる所　　藤原秀能

吹風の色こそみえね高砂の尾上の松に秋は来にけり

百首歌たてまつりし時　　皇太后宮大夫俊成

ふしみ山松のかけより見わたせはあくる田面に秋風そ吹

守覚法親王五十首哥よませ侍りける時　　家隆朝臣

あけぬるか衣手さむしすかはらやふしみの里の秋のはつ風

十五首歌合に　　摂政太政大臣

ふか草の露のよすかをちきりにて里をはかれす秋は来にけり

右衛門督通具

あはれ又いかにしのはむ袖の露野原の風に秋は来にけり

源具親

しきたへの枕のうへに過ぬなり露をたつぬる秋の初風

顕昭法師

水茎の岡のくす葉もいろつきてけさうらかなし秋の初風

越前

秋はたゝ心よりをく夕露を袖のほかともおもひけるかな

五十首哥たてまつりし時秋哥

藤原雅経

昨日まてよそにしのひし下荻の末葉の露に秋風そふく

題しらす　　西行法師

おしなへて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋の初風

あはれいかに草葉の露のこほるらむ秋風たちぬ宮城野の原

崇徳院に百首哥たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

みしふつきうゑし山田にひたはへて又袖ぬらす秋はきにけり

中納言中将に侍りける時家に山家早秋といへる心をよませ侍りける

法性寺入道前関白太政大臣

あさ霧や立田の山の里ならて秋きにけりとたれかしらまし

題しらす　　中務卿具平親王

夕暮はおきふく風のおとまさるいまはたいかにねさめせられん

後徳大寺左大臣
又やまん八萩の葉しのぎ吹風にあらそひかねて波かかるらん

崇徳院に百首歌奉りける時　皇太后宮大夫俊成
萩の葉もちらさりけりや秋風の立そめしより色はかはれど

題しらず　七條院権大夫
秋きぬと松吹風もしらせけりかならず萩のうはゝならねど
野辺に行て見ればさらに宮城野の萩のしたはにとまる秋かな

風をよめる　菅原經衡
日数へてとよりにまでしるべなき風のいろにぞ秋はしらるゝ

百首歌に　式子内親王
うたゝねの朝けの袖にかはるなりならす扇の秋のはつかぜ

題しらず　相模
手もたゆくならす扇のおきどころわするばかりに秋風ぞふく

大貳三位
秋風は吹むすべども白露のみだれてをかぬ草の葉ぞなき

曾禰好忠
朝ぼらけ荻の上葉の露見ればやゝはださむし秋の初風

小野小町
吹むすぶ風は昔の秋ながらありしにもにぬ袖の露かな

延喜御時月次屏風に　紀貫之
おほしらで萩がはなちるこゝかしこ妻まつ虫の声ぞかなしき

題しらず　赤人

いかはかり〔…〕のうへのほし

宇治前関白太政大臣家に七夕の心をよませ侍ける

権大納言長家

としをへてすむへき宿の池水はほしあひのかけもおもなれやせむ

花山院御時七夕歌つかうまつりける

藤原長能

袖ひちて我手にむすふ水のおもに天津ほしあひのかけをみるかな

七月七日七夕〔…〕よみ侍る

祭主輔親

雲ゐにておもひかはすと〔…〕あまの川浪

七夕の〔…〕見え侍る

太宰大弐高遠

織女の〔…〕

小弁

〔…〕の夜のつ〔…〕秋のはつかせ

皇太后宮大夫俊成

七夕のとわたる舟のかちの葉にいく秋かきつ露のたまつさ

百首歌の中に

式子内親王

なかむれは衣手すゝしひさかたのあまのかはらの秋の夕くれ

家に百首歌よませ侍ける時

入道前関白太政大臣

いかはかり身にしみぬらん織女のつままつよひの天の川風

七夕の歌

権中納言公経

ほしあひの夕へすゝしきあまの河もみちのはしをわたる秋風

待賢門院堀河

たなはたの逢せたえせぬあまの川いかなる秋かわたりそめけん

女御徽子女王

わくらはに天のかは浪よるなからあくるそらにはまかせすもかな

大中臣能宣朝臣

いとゝしくおもひけぬへしたなはたの別の袖にをける白露

中納言兼輔家屏風に　貫之

たなはたは今や別るゝ天川ゝ霧たちて千鳥なくなり

堀河院御時百首歌の中に萩をよみ侍りける

前中納言匡房

河水に鹿のしからみかけてけりうきてなかれぬ秋萩の花

題しらす

従三位頼政

かり衣われとはすらし露しけき野はらの萩の花にまかせて

権僧正永縁

あき萩をおらてはすきし月草の花すり衣露にぬるとも

守覚法親王五十首哥によみ侍りける

顕昭法師

萩か花まそてにかけてたかまとの尾上の宮にひれふるや誰

題しらす

祐子内親王家紀伊

をく露もしつ心なくあき風にみたれてさけるまのゝ萩原

人麿

秋萩のさきちる野辺の夕露にぬれつゝ来ませ夜はふけぬとも

中納言家持

さをしかの朝たつ小野の秋萩に玉とみるまてをける白露

凡河内躬恒

妹かとこをいく露まてにかへる我衣手はほしもあへぬ露

小野小町

誰をかもまつちの山のをみなへし秋とちきれる人そあるらし

藤原元真

女郎花野への里おもしろく折ける所もしらすやとまる

千五百番歌合に　左近中将良平

枝はをれ露は我人の女郎花よそにのみしも秋そ暮ぬる

蘭をよめる　公猷法師

あらぬ夜もおほしは誰かしのふ露の下葉そ香に匂ふ野の秋風

崇徳院に百首歌たてまつりける時　清輔朝臣

うす霧の籬の花の朝しめり秋は夕とたれかいひけん

入道前関白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りける　皇太后宮大夫俊成

いとかくや袖はしほれし野へに出て昔も秋の花はみしかと

蔵人に侍ける時秋の野を見てよみ侍ける　大納言経信

花みにと人やりならぬ野へにきて心のかきりつくしつるかな

題しらす　曽祢好忠

おきてみむと思ひしほとに枯にけり露よりけなる朝かほの花

題しらす　坂上是則

山かつのかきほにはひるあさかほはしのゝめならてあふよしもなし

うらかれの浅茅かはらのかるかやのみたれて物をおもふころかな

人麿

さをしかの入野のすゝき初尾花いつしかいもか手枕にせむ

讀人不知

小倉山ふもとの野への花すゝきほのかにみゆる秋の夕暮

女御徽子女王

ほのかにも風はふかなむ花すゝきむすほゝれつゝ露にぬるとも

百首哥に

式子内親王

花すゝきまた露ふかしほにいてはなかめしとおもふ秋のさかりを

攝政太政大臣百首哥よませ侍りける

八條院六條

野邊の色もかれ行つゆの秋風にあかすもなひく花すゝきかな

和歌所哥合に朝草花といふ事を

左衛門督通光

あけぬとて野邊より山に入鹿のあとふきおくる萩の下風

題しらす

前大僧正慈円

身にとまる思ひを荻のうは葉にてこのころかなし夕暮のそら

崇徳院御時百首哥めしけるに荻を

大蔵卿行宗

身のほとをおもひつゝくる夕暮の荻のうは葉に風わたるなり

秋哥とてよみ侍りける

源重之女

秋はたゝ物をこそおもへ露かゝる荻のうへ吹風につけても

堀河院に百首哥たてまつりける時

藤原基俊

秋はなほやさしくかゝるに萩の下葉の色かはるらむ

百首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

萩の葉にあまきおくしの秋をみるさらむ本の梢の

たえてふ本のとくふかく縁なかるわかのしら露

をしら浪

葉をおしむしきさえ秋はてそおほえなかる袖の露かな

家に百首哥合し侍けるに

物おもはてかゝる露やは袖におくなかめてけりな秋の夕暮

そのことゝ詩はなくて哥よませ侍しに

山路秋行といふ事を　前大僧正慈円

み山路やいつより秋の色ならむ見さりし雲の夕くれのそら

題しらす　寂蓮法師

さひしさはその色としもなかりけりまきたつ山の秋の夕暮

西行法師

心なき身にもあはれはしられけり鴫たつ沢の秋の夕暮

西行法師すゝめて百首哥よませ侍けるに

藤原定家朝臣

見わたせは花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕くれ

五十首哥奉りし時　藤原雅経

たへてやは思ひありともいかにせむ葎の宿の秋の夕くれ

秋哥とてよみ侍ける　(宮)内卿

おもふ事さしてそれとはなき物を秋の夕を心にそとふ

鴨長明

秋風のいたるいたらぬ袖はあらしたゝ我からの露の夕くれ

西行法師

おほかたの秋はいつとも物ことにあはれをしらぬ人のなきかな

式子内親王

ゐ様しもせてあはぬ秋風に侍りける人のもとにつかはしける

頼し所と

藤原長能

日くらしのなくなるそらにうかりはおもひしらるゝなみたなりけり

和泉式部

あきくれハ秀ハつ山の松かせうらみてけりな秋の夕くれ

曽祢好忠

秋風の身にしむよしの山なしの草木まてみな色かはりゆく

相模

あつまの露と涙とあらそひて夕くれあはれなる袖のうへかな

法性寺入道前関白太政大臣家哥合に

藤原基俊

たかまの野ちのしの原すゑさへやまたぬ夕くれ露のみたるゝ

千五百番哥合に

右衛門督通具

あさ茅生の月の秋風たちかへりなけく心の露のみたるゝ

五十首哥よみてたてまつりし時

杜間月といふ事を

皇太后宮大夫俊成女

おほあらきの森の木のまをもりかねて人たのめなる秋の夜の月

守覚法親王五十首哥よませ侍りける

藤原家隆朝臣

なかめの月も秋の袖にやとるらんあはれはかりの人のかたみに

摂政太政大臣家百首歌合に

藤原有家朝臣

風ふけば浅茅がすゑの露にだにやどりもはてぬよひの稲妻

水無瀬にて十首歌たてまつりし時

左衛門督通光

むさし野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風のすゑにふくらん

百首歌たてまつりし時月歌

前大僧正慈円

いつまでか涙くもらで月は見し秋まちえても秋ぞこひしき

式子内親王

ながめわびぬ秋よりほかの宿もがな野にも山にも月やすむらん

題しらず

円融院御歌

月影の初秋風とふけゆけば心づくしに物をこそ思へ

三条院御歌

足引の山のあなたにすむ人はまたでや秋の月を見るらん

雲間微月と云ふ事を

堀河院御歌

敷嶋や高まと山の雲間より光さしそふゆみはりの月

題しらず

堀河左大臣

人よりも心のかぎりながめつる月はたれともわかじ物ゆへ

橘為仲朝臣

あやなくもくもらぬよひをいとふ哉しのぶの里の秋の夜の月

法性寺入道前関白太政大臣

風ふけば玉ちる萩のした露にはかなくやどる野辺の月かな

従三位頼政

こよひ誰すゝふく風を身にしめてよしのゝたけの月をみるらん

法性寺入道前関白太政大臣家に月哥あまたよみ侍けるに

太宰大貳重家

月影ハおくいてあ雲ゐさやけきをやとのこゝろにすみわたるらん

和哥所にて会に湖邊月に

藤原家隆朝臣

にほの海や月の光のうつろへは浪の花にも秋ハみえけり

百首哥奉りしとき秋のうたの中に

前大僧正慈円

ゆきもりハそらにしもあらしまつのうへにすむらん秋の夜の月

瀬ゝつ所と

皇太后宮大夫俊成女

なかめ侍ハわつかなる波の月かけをこよひもいかに

家隆朝臣

なかめつゝいくたひ袖にくもるらん時雨にふくる有明の月

五十首哥たてまつりし時月前草花

摂政太政大臣

ふるさとの本あらの小萩さきしより夜ゝ庭の月そうつろふ

建仁元年三月哥合に山家秋月といふ事を

侍し

時しもあれふるさと人ハおともせて深山の月に秋風そふく

八月十五夜和哥所哥合に深山月といふ事を

ふかゝらぬ外山のいほのねさめたにさそな木の間の月ハさひしき

月前松風

寂蓮法師

月[illegible]木のしたにみちの松を[illegible]風そふく

鴨長明

なかむれはちゝに物おもふ月に又我身ひとつの峯の松かせ

山月といふ事をよみ侍りける

藤原秀能

あしひきの山ちの苔の露のうへにねさめよふかき月をみるかな

八月十五夜和歌所歌合に海辺秋月といふ
ことを

宮内卿

心あるをしまのあまのたもとかな月やとれとはぬれぬものから

宜秋門院丹後

わすれしな難波の秋のよはの空こと浦にすむ月はみるとも

鴨長明

松しまやしほくむあまの秋の袖月は物おもふならひのみかは

題しらす

七條院大納言

こととはむ野嶋かさきのあま衣浪と月とにいかゝしほるゝ

和歌所歌合に海辺月を

藤原家隆朝臣

秋の夜の月やをしまのあまのはら明かたちかきおきのつり舟

題しらす

前大僧正慈円

うき身にはなかむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月

大江千里

いつくにかこよひの月のくもるへきをくらの山も名をやかふらん

源道済

心こそあくかれにけれ秋の夜のよふかき月をひとりみしまに

上東門院小少将

かはらしと思ひしものを妹の山月よなれにしかけもこひしき

和泉式部

こゝろから人をうらみて秋の夜の月をそれともなかめわひぬる

月をみてはれぬ心の

藤原範永朝臣

たれ人の袖をかりてか妹の山月にうつろふ秋のあはれを

相模

身ひとつの秋の都とみえねとも妹の月袖にうつらぬ折しなけれは

永承四年内裏哥合に

大納言經信

月影のさやかにみゆる妹の山まつのしつえにかゝるなみかな

秋しら浪

左衛門督通光

新田山あふかぬもみちすてゝ妹背山ならふ月のかけ

崇徳院に百首歌たてまつりけるに

左京大夫顕輔

妹とせのなかにひとつの雲もなくやまのはいつる月のさやけき

題不知

道因法師

山の端にかゝるかひなき月かけもひとりあかしのうらみなるかな

殷富門院大輔

妹背山あはれなるかなかはらぬはいつもおなし月のかけ

式子内親王

しらぬ山のほとゝきすあはれとも山の葉にやとる物かな

あくかれし月のしたにゆふくれのあけもしらすや秋の夜の月

五十首哥たてまつりしに

摂政太政大臣

雲ハみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

家に月五十首哥よませ侍りける時

定家朝臣

月すみはさらくにいもてゝ秋の夜は桜のさかりかな

さむしろや待夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

題しらず

右大将忠経

秋の夜のながきもいそぎありけれ嶺にかゝれる有明の月

五十首歌たてまつりしに　雅経朝臣

摂政太政大臣

行末ハ空もひとつのむさし野の草の原より出る月影

雨後月

宮内卿

月をなを待らん物かむらさめの晴行雲の末の里人

題しらず

右衛門督通具

わきて秋ハ庵もる月の露すゝ袖に吹まよふ秋のゆふ風

源家長

秋の月しのにやとかる影たけて小篠か原に露ふけにけり

元久元年八月十五夜和哥所にて田家見月

といふ事を　前太政大臣

風わたる山田の庵をもる月や穂なみにむすぶ氷なるらん

和哥所哥合に田家月といふ事を

前大僧正慈円

かりのくるふし見の小田に夢さめてねぬ夜の庵に月をみるかな

皇太后宮大夫俊成女

いなはふく風にまかせて住庵は月そまことにもりあかしける

題しらす

わくらはに秋の夜しものほかにも月をみるらん床のさむしろ

大中臣定雅

秋の田のかりほの床のいなむしろ月やとれともしける露かな

崇徳院御時百首歌よめる

左京大夫顕輔

秋の田に庵さす志つのとまをあらみ月とともにやもりあかすらん

百首歌たてまつりし秋のうたに

式子内親王

わきてなと庵もる袖のしほるらん稲葉にかきる秋の風かは

秋歌の中に

太上天皇

秋乃露や袂にいたく結ふらん長き夜あかすやとる月かな

千五百番歌合に

左衛門督通光

さらに又暮をたのめとあけにけり月はつれなき秋の夜の空

経房卿家歌合に暁月の心を

二條院讃岐

おほかたの秋の寝覚の露けくは又たか袖に有明の月

五十首歌たてまつりし時

藤原雅経

はらひかねさこそは露のしけからめやとるか月の袖のせまきに

新古今和歌集巻第五

秋歌下

和哥所にてをのこども哥よみ侍りしに夕鹿と
いふ心を　藤原家隆朝臣

したもみぢかつ散る山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん

百首哥奉りし時

入道左大臣

山おろしに鹿の音たかくきこゆなり尾上の月にさ夜やふけぬる

寂蓮法師

題不知

野分せし小野の草ぶしあれはてゝみ山にふかきさをしかの声

俊恵法師

あらし吹まくずが原になく鹿はうらみてのみや妻をこふらん

前中納言匡房

妻こふる鹿のたちどをたづぬればさ山がすそに秋風ぞ吹

惟明親王

暁聞鹿といふ事を

み山辺の松のこずゑをわたるなりあらしにやどすさをしかの声

土御門内大臣

百首哥よみ侍りける

我ならぬ人もあはれやまさるらん鹿なく山の秋の夕暮

摂政太政大臣

たぐへくる松のあらしやたゆむらん尾上にかへるさをしかの声

千五百番哥合に　前大僧正慈円

なく鹿の声にめざめてしのぶかな見はてぬ夢の秋のおもひを

家に哥合し侍けるに鹿をよめる

権中納言俊忠

夜もすから妻とふ鹿のなくなへに小萩か原の露そこほるゝ

題しらす

源道済

ね覚してひさしく成ぬ秋の夜は明やしぬらん鹿そ鳴なる

西行法師

小山田のいほちかく鳴鹿の音におとろかされておとろかす哉

白河院鳥羽におはしましける時田家秋興と侍

る題を人々つかうまつりけるに

中納言師忠

山里のいな葉の風にね覚して夜ふかく鹿の声をきくかな

郁芳門院の前栽合によみ侍ける

藤原顕綱朝臣

ひとり寝やいとゝさひしきさをしかの朝ふす小野の葛のうら風

俊恵法師

たつた山木すゑまはらに成まゝにふかくも鹿のそよくなるかな

祐子内親王家哥合のゝち鹿の哥よみ侍ける

権大納言長家

すきてゆく秋のかたみにさをしかのおのかなくねもおしくやあるらん

摂政太政大臣家の百首哥合に

前大僧正慈円

わきてなと庵もる袖のしほるらん稲葉にかきる秋の風かは

題しらす

讀人しらす

秋田もるかりいほつくり我をれは衣手さむし露そおきける

前中納言匡房

わかせこか衣はわさけの風にてなつかしき山のいへをたちかへりきて

善滋為政朝臣

時はいまは秋そと思へは衣手にふきくる風のしるくもあるかな

中納言家持

今よりは秋風さむく成ぬへしいかてかひとり長き夜をねん

人麿

秋されは雁のはかせに霜ふりてさむきよな／＼しくれさへふる

さを鹿の妻とふ山のをかへなるわさ田はからし霜はおくとも

貫之

かりてほす山田のいねは袖ひちてうへし早苗とみえすもあるかな

菅贈太政大臣

草葉には玉とみえつゝわひ人の袖のなみたの秋の白露

中納言家持

我宿の尾花かうへの白露をけたすて玉にぬく物にもか

恵慶法師

秋といへはちきりおきてやむすふらん浅茅か原の今朝の白露

人麿

あきされはおく白露に我宿の浅茅かうは葉色つきにけり

天暦御哥

おほつかな野にも山にも白露の何事をかは思ひおくらん

後冷泉院のみこの宮と申ける時尋野花と
いふ心を

堀河右大臣

露しけき野へをわけつゝ衣ぬれてそかへる花のしつくに

閑庭露滋と伝ふ事を　　一

基俊

庭のおもはしきりにかはる秋のしもそのこゝろにしけき露かな

白河院にて野草露繁といふことを
つかうまつりける　　贈左大臣長實

秋の野の草葉もわけぬ袖にまてやとれる露のかけのよさん

百首歌奉りし時　　寂蓮法師

物おもふ袖より露やならひけん秋風吹はたえぬものとは

秋の歌の中に　　太上天皇

露は袖に物おもふころはさそなおくかならす秋のならひならねと

野原より露のゆかりをたつねきて我衣手に秋風そ吹

題しらす　　西行法師

きり〳〵す夜寒に秋のなるまゝによはるか声の遠さかりゆく

守覚法親王五十首歌よませ侍ける時　　家隆朝臣

むしの音もなかき夜あかぬふるさとになを思ひそふ松風そ吹

百首歌の中に　　式子内親王

あともなき庭のあさちにむすほゝれ露のそこなる松むしの声

題しらす　　藤原輔尹朝臣

秋風は身にしむはかり吹にけり今やうつらん妹かさころも

前大僧正慈円

衣うつをとはまくらにすかはらやふしみの夢をいく夜残しつ

千五百番歌合に秋歌

權中納言公經

ーー山のいほのしはしはもしらぬ夢ちにむすふ手枕

和哥所の歌合に月のもとに衣うつといふ事を

攝政太政大臣

里ハあれて月やあらぬとうらみてもたれ浅茅生に衣うつらん

宮内卿

衣うつおとは枕にすかはらやふしみの夢をいく夜のこしつ

千五百番哥合に

定家朝臣

秋とたにわすれんと思ふ月影をさもあやにくにうつ衣かな

擣衣のこゝろを

大納言經信

ふるさとに衣うつとはゆく雁やたひのそらにもなきてつくらん

中納言兼輔家屏風哥

貫之

かりなきて吹風さむみから衣君まちかてにうたぬ夜そなき

擣衣の心を

藤原雅經

見よしのゝ山の秋風さよふけてふるさとさむく衣うつなり

式子内親王

ちたひうつきぬたのをとに夢さめて物おもふ袖の露そくたくる

百首哥たてまつりし時

ふけにけり山のはちかく月さえてとをちの里に衣うつこゑ

九月十三夜月くまなく侍りけるをなかめて

侍りける

道信朝臣

秋はつるさよふけかたの月みれは袖ものこらす露そおきける

百首哥たてまつりしとき

藤原定家朝臣

ひとりぬる山とりのおのしたりをに霜おきまよふとこの月かけ

摂政太政大臣大将に侍ける時月哥五十首よませ侍けるに　寂蓮法師

ひとめみし野への(の)けしきはうらかれて露のよすかにやとる月かな

月哥とてよみ侍る　大納言経信

秋の夜ハ衣さむしろかさねても月の光にしくものそなき

九月はかりになりにける　花山院御哥

あきの夜ハはや長月になりにけりことはりなりやねさめせらるゝ

五十首歌たてまつりし　寂蓮法師

むらさめの露もまたひぬまきの葉に霧たちのほる秋の夕暮

秋哥とて　太上天皇

さひしさハみ山の秋のあさくもり霧にしほるゝまきの下露

河霧といふ事を　左衛門督通光

あけほのや川瀬の浪のたかせ舟くたすか人の袖の秋霧

堀河院御時百首哥とてよみ侍る　権大納言公実

麓をハ宇治の川霧たちこめて雲井にみゆる朝日山かな

題しらす　曽祢好忠

山さとに霧のまかきのへたてすハをちかた人の袖もみてまし

清原深養父

川霧のふもとをこめて立ぬれは空にそ秋の山はみえける

人麿

糸かけて萩の葉末にまきさる秋風の吹ふるからにまつふれかくなる

秋をまつやとにいつしかゆふくれの桜葉やちりて雲かくれけん

凡河内躬恒

初雁の羽風涼しくなるなへに誰か旅寝の衣かへさぬ

読人不知

雁かねは風にきほひて過れとも我まつ人のことつてもなし

西行法師

よこ雲の風にわかるゝしのゝめに山とひこえて初雁のこゑ

白雲をつはさにかけて行雁の門田のおもの友したふなり

五十首歌たてまつりし時月前聞雁といふを

前大僧正慈円

大江山かたふく月の影さえて鳥羽田のおもにおつるかりかね

題しらす　朝恵法師

むら雲や雁の羽風にはれぬらん声きく空にすめる月影

皇太后宮大夫俊成女

吹まよふ雲井をわたる初雁のつはさにならす四方の秋風

詩にあはせし哥の中に山路秋行といふ事を

家隆朝臣

秋風の袖にふきまく峯の雲をつはさにかけてかりもなく也

五十首歌たてまつりし時菊籬月といふ事を

宮内卿

霜をまつ籬の菊のよひの間におきまよふ色は山の端の月

鳥羽院御時内裏より菊をめしけるにたてまつるとて

むすひつけ侍る　花園左大臣室

なにとなく(?)しのぶ萩が花ずりの袖をおもひしにけり(?)

野し(?)萩を

権中納言定頼

今朝見れば花なき物とおもひしをいつくもまてぬ(?)秋の野の露(?)

中務卿具平親王

あき風は吹きてすぐなる野辺の花みても宿の秋ぞなりける(?)

題しらず

大江嘉言

秋はなほ袖ぞさびしく秋の夜の風すさみゆく(?)ねざめの(?)床

千五百番歌合に

前大僧正慈円

秋ふかくあれゆく霧も深草のさとゝふ物はうつらなりけり(?)

左衛門督通光

入日さすふもとのお花うちなびきたが秋風にうづら鳴らん

皇太后宮大夫俊成女

あだにちる露の枕にふしわびてうづら鳴なりとこの山かぜ

千五百番歌合に

とふ人もあらし吹きそふ秋はきて木の葉にうづむ宿の道しば

秋歌とて

太上天皇

秋ふけぬなけや霜夜のきりぎりすやゝかげさむしよもぎふの月

百首歌たてまつりし時

摂政太政大臣

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん

五百首歌合に

春宮権大夫公継

ねざめする長月の夜の床さむみけさ吹く風に霜やおくらん

和哥所にて六首哥たてまつりし時秋
哥　　前大僧正慈円
秋ふかきあはちのしまのありあけにかたふく月をおくる浦風
暮秋の心を
長月もいくありあけに成ぬらん浅茅か月のいとゝさひゆく
摂政太政大臣大将に侍りける時百首哥よませ侍るに
けるに
寂蓮法師
かさゝきの雲のかけ橋秋くれてよはには霜やさえわたるらん
ほくゝのもみちかゝるをみて
中務卿具平親王
侍れいのふかきみちふかくして横きはふの花のちるか
紅葉遊覧と云事を
高倉院御哥
薄霧のたちまふ山のもみちはさやかならねとそれとみえけり
秋乃哥とて
八條院高倉
神なひのみむろの木すゑいかならんなへての山も時雨するころ
最勝四天王院乃障子にたつた河かきたる所
太上天皇
たつた河嵐や木の葉に日数へて山田の里の時雨そふる
入道前関白太政大臣家に百首哥よませ侍りける
に紅葉を
皇太后宮大夫俊成
こゝろにやもみちはそむるしくれつゝ松にしくれぬ輪なき
大井河さよりてもみちこそちるらん
藤原輔朝臣

おりにふれくれなゐふかき紅葉はおもしろきいろもかはらぬ色そ

題しらす　　曾祢好忠

今日しもあらしの世にくもる木の葉ちるらん

百首哥よみ侍りし　　前内大臣

龍田河おしや峯におろしてなかれてなみもにしきなり

左大将に侍りける時家に百首哥合し侍りけるに

紅葉をよみ侍る　　摂政太政大臣

さそはれし松もやかつらし森の下草色にいてけり

定家朝臣

時わかぬ浪さへ色にいつみ川ははその森に嵐ふくらし

障子の絵に網代あるやまふかくもみちちりたる所

よめる　　俊頼朝臣

ゆふくれはみねの紅葉のちりかゝるあしろのひをは秋風そふく

百首哥たてまつりし時　　式子内親王

桐の葉もふみわけかたく成にけりかならす人をまつとなけれと

題しらす　　曾祢好忠

人こそしらね風の木葉はちりはててよな〳〵山にいはほなりけり

守覚法親王五十首哥よみ侍りけるに

春宮大夫公継

もみち葉の色にまかせてときはきも風にうつろふ秋の山かな

千五百番哥合に　　家隆朝臣

露しくれもる山かけの下紅葉ぬるともおらし秋のかたみに

西行法師

題しらす

松にはふまさきのかつらちりにけりとやまの秋は風すさふらん

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に

前参議親隆

うつらなくかた野にたてるはし紅葉ちりぬはかりに秋かせそふく

百首歌奉りし時

二條院讃岐

ちりかゝる紅葉の色はふかけれとわたれはにこる山川の水

題しらす

柿本人麿

あすか川もみち葉なかるかつらきの山の秋風ふきそしくらし

権中納言長方

あすか川瀬々に浪よるくれなゐやかつらき山のこからしの風

[illegible]

紅葉[illegible]

権中納言公経

紅葉はをさこそあらしのはらふらめこの山もとも雨とふるなり

家に百首歌合し侍りける時

攝政太政大臣

たつた姫今はのころの秋風にしくれをいそく人の袖かな

千五百番歌合に

権中納言兼宗

行秋のかたみなるへきもみち葉もあすはしくれとふりやまかへん

紅葉[illegible]見侍る

前大納言公任

おちつもる紅葉を見れは大井河ゐせきに秋もとまるなりけり

津の国に侍りける比道済かもとにつかはしける

能因法師

夏草のかりそめにとてこしかと難波の浦に秋そ暮ぬる

くれぬる秋ありし事猶まさりける

見くしわか暮ゆく秋をおしむまてしのふは物そかなしき

五十首哥に暮秋を猶まつる

守覚法親王

身にかへていかて秋をおしみなましてしらぬ我身の命と

同九月盡のこゝろを

前太政大臣

秋はてゝ世のおもしろよそてくれしな秋の後の哀のかなしさよ

新古今和歌集巻第六
冬哥

千五百番哥合に初冬の心をよみ侍ける
皇太后宮大夫俊成
おきあかす秋の別の袖の露霜こそむすへ冬や来ぬらん

天暦御時神無月といふことをかみにをきて
哥つかうまつりけるに
藤原高光
神無月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物そかなしき

源重之
なとり河やなせの浪そさはくなる紅葉やいとゝよりてせくらん

後冷泉院御時上のをのこと大井河にまかりて
紅葉浮水といへる心をよみ侍ける
藤原資宗朝臣
筏しよまて事とはん水上はいかはかりふく山のあらしそ

大納言経信
ちりかゝる紅葉なかれぬ大井川いつれゐせきの水のしからみ

大井河にまかりて落葉満水といへる心をよみ侍る
藤原家経朝臣
たかせ舟しふくはかりに紅葉々のなかれてくたる大井河哉

深山落葉といへる心を
俊頼朝臣
日くるれはあふ人もなしまさきちる峯の嵐のをとはかりして

題しらす
清輔朝臣

みなのかはにとしもなき物は夜のまの木の葉にまかく嵐なりけり

春日社歌合に落葉といふ事をよませ給ひける

前大僧正慈円

木の葉ちる宿にふりにし神のみ名をあらはしてゆく嵐

右衛門督通具

木の葉ちる時雨やまかふ我袖にもろき涙の色とみるまて

藤原雅経

うつりゆく雲にあらしの声すなりちるかまさきのかつらきの山

七条院大納言

初時雨しのふの山のもみち葉をあらしふけとはそめすやありけん

信濃

時雨つゝ袖もほしあへすあし引の山の木の葉に嵐ふく比

藤原秀能

山里の風すさましき夕くれに木の葉みたれて物そかなしき

祝部成茂

冬の来て山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ峯にさひしき

五十首歌奉りし時　宮内卿

からにしき秋のかたみや竜田山ちりあへぬ枝に嵐ふくなり

頼輔卿家歌合に落葉の心を

若狭資隆朝臣

時雨かときけは木の葉のふる物をそれにもぬるゝ我袂かな

題しらす

法眼慶算

時しもあれ冬は葉守の神な月まはらになりぬ杜の柏木

津守国基

信州にて冬のはしめにしくれしける時の哥

西行法師

月をまつ高根の雲ハはれにけり心あるへき初しくれかな

前大僧正覚忠

神無月木々の木の葉ハちりはてゝ庭にそ風の音ハきこゆる

清輔朝臣

柴の戸に入日の影ハさしなからいかにしくるゝ山へなるらん

山家時雨といへることを

藤原隆信朝臣

雲はれて後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松の下露

寛平御時きさいの宮の哥合に

読人しらす

神無月しくれふりにし佐保山のまさきのかつら色まさりゆく

題しらす

中務卿具平親王

木のはちる宿ハ時雨と聞まかへて紅葉になけく袖そかなしき

中納言兼輔

時雨ふる音ハすれとも呉竹のなとよとゝもに色もかはらぬ

十月許ときはの森をすくとて

能因法師

時雨の雨そめかねてけり山城のときはの森の槙の下葉ハ

題しらす

清原元輔

冬をあさみまたき時雨と思ひしをたへさりけりな老の涙も

鳥羽殿にて旅宿時雨といふ事を

後白河院御哥

ゆふしかりき木の葉に積もりて時雨に[illegible]

時雨

前大僧正慈円

やよ時雨もの思ふ袖のなかりせは木の葉の後に何をそめまし

冬哥の中に　　太上天皇

ふかみとりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杦

題しらす　　人麿

時雨の雨まなくしふれはまきの葉もあらそひかねて色付にけり

和泉式部

世中になほもふるかな時雨つゝ雲まの月のいてやとおもへと

百首哥よみて侍りける　　二條院讃岐

おしなへて[illegible]神[illegible]

題しらす　　西行法師

あきしのや外山の里や時雨らん伊駒のたけに雲のかゝれる

道因法師

晴くもり時雨はさためなき物をふりはてぬるは我身なりけり

千五百番哥合に冬哥　　源具親

今はまたちらても庭にまかふ時雨かなひとりふりゆく庭の松かせ

題しらす　　俊恵法師

みよし野の山かきくもり雪ふれは麓の里はうちしくれつゝ

百首哥よませ侍りし時　　入道左大臣

まきの屋に時雨の音のかはるかな紅葉やふかくちりつもるらん

千五百番哥合之名哥

二條院讃岐

世にふるハくるしき物をまきの屋にやすくもすくる初時雨かな

題しらす　源信明朝臣

ほのほのと有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしの風

中務卿具平親王

もみち葉を何おしみけん木の間よりもりくる月ハ今宵こそ見れ

宜秋門院丹後

吹はらふ嵐の後の高根より木の葉くもらて月やいつらん

春日社哥合に暁月と云事を

右衛門督通具

霜こほる袖にも影ハのこりけり露よりなれし有明の月

和哥所にて六首哥たてまつりしに冬哥

藤原家隆朝臣

なかめつゝいくたひ袖にくもるらん時雨にふくる有明の月

題しらす　源泰光

さためなくしくるゝ空のむら雲にいくたひおなし月まつらん

千五百番哥合に　源具親

今よりハ木葉かくれもなけれとも時雨にのこるむら雲の月

題しらす

晴くもる影を都にさきたてゝしくるとつくる山の端の月

五十首哥たてまつりしに

寂蓮法師

たえたえに里わく月の光かな時雨をおくる夜半のむら雲

雨後冬月といふ事をよみ侍ける

良暹法師

今はとてねなまし物をしくれつる空ともみえすすめる月かな

曽祢好忠

露霜の夜半におきゐて冬の夜の月みるほとに袖は氷ぬ

前大僧正慈円

紅葉はゝおのか染たる色そかしよそけにをける今朝の霜かな

西行法師

小倉山麓の里に木葉ちれは梢にはれて月をみるかな

五十首哥奉りし時

藤原雅経

秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらにこからしの風

題しらす

式子内親王

風さむみ木の葉はれゆくよな〳〵に残るくまなき庭の月影

殷富門院大輔

我門のかり田のねやにふす鴫のとこあらはなる冬の夜の月

清輔朝臣

冬枯の森のくち葉の霜の上におちたる月の影のさむけさ

千五百番哥合に

皇太后宮大夫俊成女

さえわひてさむる枕に影みれは霜ふかき夜のありあけの月

右衛門督通具

霜むすふ袖のかたしきうちとけてねぬ夜の月の影そさむけき

五十首哥奉りし時

雅経

新しき霧の内より思ひ出て影もわかるゝ浅茅生の霜

橋上霜といへる事をよみ侍りける

法印幸清

かたしきの袖をや霜にかさぬらん月に夜かるゝ宇治の橋姫

源重之

夏かりの荻のふるえはかれにけりむれゐし鳥は空にやあるらん

道信朝臣

さ夜ふけて声さへさむきあしたつはいくへの霜かおきまよふらん

冬歌の中に　太上天皇

冬の夜のなかきをおくる袖ぬれぬあかつきかたのよものあらしに

百首歌たてまつりし時　摂政太政大臣

かさゝきのわたすやいつこ夕霜の雲ゐにしろき峯のかけはし

崇徳院御時百首歌めしけるに　清輔朝臣

君こすはひとりやねなんさゝの葉のみ山もそよにさやく霜夜を

皇太后宮大夫俊成女

霜かれはそこともみえぬ草の原たれにとはまし秋のなこりを

百首歌の中に　前大僧正慈円

霜さゆる山田のくろのむらすゝきかる人なしにのこるころかな

好忠

草かれの冬まてみよと露霜のおきてのこせるしらきくの花

中納言家持

かさゝきのわたせる橋におく霜のしろきをみれは夜そふけにける

うへのをのこゝも菊あはせし侍りけるついてに

延喜御哥

時雨つゝかれゆく野への花なれは霜のまかきにゝほふ色かな

延喜十四年尚侍藤原満子に菊の宴たまはせける
時

中納言兼輔

菊の花たおりては見し初霜のおきなからこそ色まさりけれ

同御時大井河に行幸侍ける日

坂上是則

影さへに今はと菊のうつろふは浪のそこにも霜やおくらん

題しらす

和泉式部

野辺見れは尾花かもとのおもひ草かれゆく冬になりそしにける

西行法師

津の国のなにはの春は夢なれやあしのかれ葉に風わたるなり

崇徳院に十首哥たてまつりける時

大納言成通

冬ふかく成にけらしな難波江のあをはましらぬあしのむらたち

題しらす

西行法師

さひしさにたへたる人のまたもあれないほりならへん冬の山里

あつまにゐ侍りける時やこの冬はけりける

康資王母

東路のみちの冬草しけりあひてあとたにみえぬわすれ水かな

冬哥とてよみ侍ける

守覚法親王

むかしおもふさ夜のねさめの床さえて涙もこほる袖のうへかな

百首歌よませ給ひしとき

さらぬだに山のしたくも落て桜のしら雲たなびきけり

題しらず

皇太后宮大夫俊成

うきくもりかくるる山川の岩浪もしるふあらしのこゑ

摂政太政大臣

消人の岩に浪よせ[illegible]

松やさ袖に浪よせ[illegible]

五十首歌たてまつりしとき

ゆふやみ[illegible]白浪

百首歌たてまつりし時

[illegible]袖の[illegible]

殷富門院大輔

[illegible]

太上天皇

[illegible]

前大僧正慈円

あじろ木にいさよふ浪のおと深て独やねぬる宇治の橋姫

百首歌の中に

式子内親王

見るままに冬は来にけり鴨のゐる入江のみぎはうすごほりつつ

摂政太政大臣家歌合に湖上冬月を

藤原家隆朝臣

志賀の浦やとほざかりゆく浪まよりこほりていづる有明の月

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

ひとりみる池の氷にすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

題しらず　　　　赤人

うば玉の夜のふけゆけは楸おふるきよき河原に千鳥しば鳴
　ほかのかうらにみゆる乃かたみえらん

　　　　　伊勢大輔

ゆふされハ衣手寒し千鳥なくさへのかぬるハ
　みちのくの浦にや見え行なり

　　　　　能因法師

夕されハ潮風こしてみちのくの野田の玉河千鳥鳴なり

題しらず　　　　重之

しら浪に羽うちかハし濱千鳥かなしき物ハ夜のひとこゑ

　　　　　後徳大寺左大臣

夕なきにとわたる千鳥浪まより見ゆる小島の雲にきえぬる

堀河院に百首哥たてまつりける時

　　　　　祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の濱のはま千鳥浪たちくらし夜半になくなり

五十首哥たてまつりし時

　　　　　摂政太政大臣

月そすむたれかハこゝにきの国や吹上の千鳥ひとりなくなり

千五百番哥合に　　　　正三位季能

さ夜千鳥こゑこそちかくなるみかたかたふく月にしほやみつらん

最勝四天王院障子になるみの浦かきたる所

　　　　　藤原秀能

風ふけハよそになるみのかたおもひおもハぬ浪になく千鳥哉

おなしところ　　　　左衛門督通光

浦人の日も夕暮になるみかたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入内屏風に

正三位季経

風さゆるとしまか磯のむら千鳥立ゐは浪の心なりけり

五十首哥よみてたてまつりし時

藤原雅経

たつちとりやはそてしく衣手にねやまさるよはのさむしろ

堀河院に百首歌よみてたてまつりける

河内

水鳥のかものうきねのうきなから浪のまくらにいく夜ねぬらん

題しらす

湯原王

よしのなる夏実の河の川よとに鴨そ鳴なる山かけにして

能因法師

閨のうへにかたえさしおほひそともなる葉ひろかしはにあられふるなり

法性寺入道前関白太政大臣

さゝ浪や志賀のから崎風さえてひらのたかねにあられふるなり

人麿

やたの野にあさちいろつくあらち山みねのあは雪さむくそあるらし

雪のあしたに基俊かもとへ申つかはしける

瞻西上人

つねよりもしのやの軒そうつもるゝけふは都にはつ雪やふる

基俊

あら雪ふれはとしのやにいかにすむらん都たにおもひやらるゝ

冬哥あまたよみ侍りけるに

権中納言長方

初音のまつの神杉うつまほしく忍ふゆふへは冬こもりせす
なりふ事侍らんこゝろは音のよりも待らる日

紫式部

あはれつくうちのこゝろ世ともてありてゆる庭にはりの白雪

百首哥よ

式子内親王

ほとゝきすその神山の旅枕ほのかたらひし空そわすれぬ

入道前関白右大臣に百首哥よませ侍りける時

寂蓮法師

ありそうきなをしのもとりけり山の端のうへくれ
かた露のあはしさへ後徳大寺左大臣のりしふけゆくらん

皇太后宮大夫俊成

過ぬるか夜半のねさめのほとゝきすこゑはまくらにある心ちして

後法性寺太大臣

今はきくのはあととふりしき音のうきまけくありくやまとまと

題しらす

前大納言公任

ほとゝきす山ほとゝきすしはしなくよはのよりてもなきそふるかり

夜深関音といふ事を

刑部卿範兼

あまさかる稲葉の山のまさことありの難の行人音やきかれ

うちのこもるの暁も山音にあまたなけるらん

高倉院御哥

たゝ山はやまゝに過ゆ音を明ぬとけふりしらの心なし

紀氏のちかくて初音の成りつけて侍る

とよみて上東門院に侍りける女房につかはしける

菅原家経朝臣

山里はうらやみもせて成ぬらし都はしるく雪のふりゆける

野亭雪といふを侍ける

菅原国房

はかなしや我世をせよとて思ひける[illegible]の葉のしら露なるらん

百首歌とてよみけるとそ

藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふ陰もなしさのゝわたりの雪の夕暮

摂政太政大臣大納言に侍りける時山家雪といふことを

よませ侍りけるに

待人のふもとの道やたえぬらん軒はの杉に雪おもるなり

摂政家にて冬の歌よみ侍りしに

伏見里の雪を　藤原有家朝臣

夢かよふ道さへたえぬくれ竹の伏見の里の雪の下折れ

家に百首歌よませ侍りけるに

入道前関白太政大臣

ふる雪にたくもの煙かきたえてさひしくもあるか塩竈の浦

題しらす

赤人

たこの浦にうち出てみれは白妙の富士の高ねに雪はふりつゝ

延喜御時哥たてまつらせ給ひけれは

貫之

雪ふりてやまとりぬるは山里に我もおもはくのかよひちたえて

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

雪ふれは峯のまさかきうつもれて月にみかける天のかく山

小侍従

かきくもりあまきる雪のふるさとをつもらぬさきにとふ人もかな

前大僧正慈円

庭の雪に我あとつけて出つるをとはれにけりと人やみるらん

なかめつゝ我山のはの雪ふかみ[illegible]

曽祢好忠

冬草のかれにし人の今さらに雪ふみわけて見えん物かは

雪のあしたに[illegible]侍りける

寂蓮法師

[illegible]

百首歌よませ給けるに

太上天皇

このころは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松の白雪

千五百番歌合に

右衛門督通具

草も木もふりまかへたる雪もよに春まつ梅の花の香そする

百首歌奉りし時

崇徳院御歌

みかりするかたのゝ野のにふるあられあなかままたき鳥もこそたて

関白右大臣家の歌合に

法性寺入道前関白太政大臣

[illegible]

京極関白前太政大臣高陽院歌合に

前中納言匡房

[illegible]

鷹狩のこゝろをよみ侍りける

左近中将公衛

かりくらし交野のましはおりしきて淀の川せの月をみるかな

埋火をよみ侍りける

権僧正永縁

中々にきえはきえなてうつみ火のいきてかひなき世にもある哉

百首歌奉りし時

式子内親王

日数ふる雪けにまさる炭竈の煙もさひしおほはらの里

歳暮に人のもとへ遣しける

西行法師

おのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふほとに年の暮ぬる

返し　此暮によと侍りける上西門院兵衛

かへりてハ身にそふ物としりなから暮行年をなにしたふらん

皇太后宮大夫俊成

あらそひてゆくとしのをしき暮かなあかりはてぬる此暮哉

大納言隆季

あはれ我年や我身をとかくむかへつゝ行年を惜せて

俊恵法師

俊成の家にて十首歌よみ侍りける歳暮の心を

なけきつゝ今年も暮ぬ露の命いけるはかりを思ひ出にて

小侍従

百首歌奉りし時

おもひやれ八十の年の暮なれはいかはかりかは物はかなしき

西行法師

題しらす

むかし思ふ庭にうき木をつみ置て見し世にもにぬ年の暮哉

摂政太政大臣

磯乃こまつもさしくるに乗くらふのかとしれ

前大僧正慈円

としあけてうき世の夢のさむへくはくるともけふはいとはさらまし

権律師隆聖

朝ことのあか井の水に年くれて我よのほとのくまれぬるかな

百首哥よませ侍りし時

入道左大臣

住その浪よしの葦そあしかなしもしいはなきてしるかは

としの暮と月のおしまるる事をかきそしまねる

和泉式部

かそふれは年のこりもなかりけり老ぬるはかり悲しきはなし

入道前関白太政大臣百首哥よませ侍りける時

夢の葉のつはしまそてはかは心

後徳大寺左大臣

石はしるはつせの川の浪まくらはやくも年の暮にけるかな

土御門内大臣家にて海辺歳暮といふ心をよめる

藤原有家朝臣

わしらし我かをし海のあまは此暮もてわれて袖にや浪やかくらん

寂蓮法師

老のなみこえける身こそあはれなれ今年も今は末の松山

千五百番哥合に

皇太后宮大夫俊成

けふことにけふやかきりとおしめともまたもことしにあひにけるかな

新古今和歌集巻第七

賀歌

みつき物ゆるされて国とめるを御覧して

仁徳天皇御歌

高き屋にのほりて見れは煙立民のかまとはにきはひにけり

題しらす

讀人不知

初春の初子のけふの玉はゝきてにとるからにゆらく玉のを

子日よみ侍ける

藤原清正

ねのひしてしめつる野辺の姫小松ひかてや千代のかけをまたまし

題しらす

興風

君か世のとしのかすをは白妙の浜のまさこと誰かしきけむ

亭子院六十御賀屏風によみてたてまつりける

貫之

わかなおふる野辺といふ野辺を君かため万代しめてつまむとそ思ふ

延喜御時屏風歌

ゆふたすき千とせをかけてあしひきの山ゐの色はかはらさりけり

社父内親王家にてさくらを

中御門内大臣

君か代にあふへき春のおほけれはちるともさくらあくまてそみん

七條のきさいの宮の五十賀屏風に

伊勢

すみのえのはまのまさこをふむたつはひさしきあとをとむるなりけり

延喜御時屏風歌

貫之

年ことにおひそふ竹のよゝをへてかはらぬ色をたれとかはみむ

題しらす　躬恒

ちとせふるをのへの松は秋風のこゑこそかはれ色はかはらす

興風

山河の菊のした水いかなれはなかれて人の老をせくらん

延喜御時屏風歌　貫之

住のえの松か月のきて花の色の妹らてらん

文治六年女御入内屏風に

皇太后宮大夫俊成

山人のおる袖にほふ菊の露うちはらふにも千代はへぬへし

貞信公家屏風に　清原元輔

神無月もみちもしらぬときは木によろつ代かゝれ峯の白雲

題しらす　伊勢

山風はふけとふかねと白浪のよする岩ねはひさしかりけり

後一条院むまれさせ給て七夜に

前大二条関白中将に侍けるに

さかつきいたして池の舟にのせて中島の松のかけ

さしまはる程をかしく見えけれは

紫式部

くもりなく千とせにすめる水のおもにやとれる月のかけものとけし

永承四年内裏哥合に池水といふこゝろを

伊勢大輔

池水のよゝに久しくすみぬれは底のたまもも光みえけり

堀河院大嘗会御禊に日比雨ふりてその日晴

てり侍けれは紀伊典侍によみ侍る

六條右大臣

君か代のちとせのかすもかくれなくくもらぬ空のひかりにそみる

天喜四年皇后宮の哥合に祝の心をよめる

前大納言隆国

もろ人のえよおひそふ松の枝ことに君か千代のかすそこもれる

寛治八年関白前太政大臣高陽院哥合に祝の心を

康資王母

よろつ代を松の尾山のかけしけみ君をそいのるときはかきはに

後冷泉院おさなくおはしましける時卯杖の松を人の子にたまはせけるによめる

大弐三位

あひおひのをしほの山の小松原今より千代のかけをまたなん

承保四年内裏子日

大納言經信

子の日するみかきのうちの小松原千代をはほかの物とやは見る

権中納言通俊

子日する野への小松をうつしうゑて年のをなかく君そひくへき

承暦二年内裏の哥合に祝の心をよめる

前中納言匡房

君か代はひさしかるへしわたらひや五十鈴の川のなかれたえせて

題しらす

讀人不知

常盤なる松にかゝれることの葉は年のをなかき[illegible]

二條院御時花有喜色といふ心を人々つかうまつりけるによめる

刑部卿範兼

君か代ハ今いく[illegible]花ハ咲てそ[illegible]

或御時萬殿の花のさかりに歌よませ給ける

時に読侍ける　参河内侍

身はよしやくちなはくちね君か代に[illegible]

百首歌よみ侍りし時

式子内親王

あはれとも[illegible]

京極殿にて[illegible]歌よみ侍りける

松有春色といふ事をよみ侍し

摂政太政大臣

[illegible]

百首歌よみ侍りし時

[illegible]

五百番歌合

[illegible]

君か世は千代も[illegible]

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

我道をまもらは君をまもるらん[illegible]松

八月十五夜和歌所歌合に月多秋友といふ事

をよみ侍ける　寂蓮法師

[illegible]

和歌所の開闔になりてはしめてまいりし日奏し

侍し　源家長

ときはなるときはにみえて君か代のためしにまかせ千とせをもいはふ
建久七年入道前関白太政大臣宇治にて人々に
歌よませ侍りけるに　　前大納言隆房
うちはしやつよく神しらん年ふりたる宇治の橋柱
嘉応元年入道前関白太政大臣宇治にて河水
久澄といふ事を人々によませ侍りけるに　　　　
清輔朝臣
年経たる宇治の橋守こととはむいく世になりぬ水のみなかみ
日吉禰宜成仲七十賀し侍りけるにつかはしける
かそふれは津の浜松いくとせの千世の残りはなほそはるけき
尚歯会を侍りけるに　　後徳大寺左大臣
やそちゆく瀧の白糸くりかへしいく千世ふとも絶えしとそ思ふ
…歌合し侍りけるに春祝の心をよみ侍りける
摂政太政大臣
春日山みやこの南しかそ思ふ北の藤なみ春にあへとは
天暦御時大嘗会主基方備中国中山
読人しらず
ときはなるきひの中山おしなへて千とせをまつのふかき色かな
長和五年大嘗会悠紀方風俗歌近江国朝
日郷　　　祭主輔親
あかねさしてあさ日のさとのひかけ草とよのあかりのかさしなるへし
永承元年大嘗会悠紀方屏風近江国鏡
山をよめる　　式部大輔資業
くもりなき鏡の山の月をみてあきらけき代をそらにしるかな

寛治二年大嘗會屏風にたかの尾山をよめる

前中納言匡房

とやかへるたかのを山のたまつはきしもをはふともいろはかはらし

久壽二年大嘗會悠紀方風俗にかゝみの山をよめる

宮内卿永範

くもりなきかゝみの山の月をみてあきらけき世をそらにしるかな

平治元年大嘗會主基方辰日參入音聲生野をよめる

刑部卿範兼

おほえ山こえていく野のすゑとをみみちある世にもあひにけるかな

仁安元年大嘗會悠紀歌奉りしに稲舂歌

皇太后宮大夫俊成

あふみのやさかたのいねをかけつみてみちあるみよのはしめにそつく

元暦元年大嘗會主基歌青羽山

式部大輔光範

たちよれはすゝしかりけり水とりのあをはの山の松のゆふかせ

壽永元年大嘗會主基方稲舂歌丹波國長田村をよめる

権中納言兼光

神代よりけふのためとや八つかほになかたのいねのしなひそめけむ

建久九年大嘗會主基屏風に六月松井

権中納言資實

常盤なる松井の水をむすふてのしつくことにそちよはみえける

新古今和歌集巻第八

哀傷哥

題不知　僧正遍昭

すゑの露もとのしつくや世中のをくれさきたつためしなるらん

小野小町

あはれなり我身のはてやあさみとりつゐには野へのかすみとおもへは

醍醐のみかとかくれ給て後やよひのつこもりに三条右大臣につかはしける　中納言兼輔

さくらちる春のすゑにはなりにけりあまゝもしらぬなかめせしまに

正暦二年諒闇の春桜の枝につけて道信朝臣につかはしける　實方朝臣

すみ染のころもうき世の花さかりおりわすれてもおりてける哉

返し　道信朝臣

あかさりし花や春もこひつらむありしむかしをおもひいてつゝ

やよひのころ人におくれてなけきける人のもとへつかはしける　成尋法師

花さくらまたさかりにてちりにけむなけきのもとをおもひこそやれ

人の桜はうへおきてその年の四月になくなりにけるまたのとしはしめて花さきたるを見て　大江嘉言

花見むとうゑけん人もなきやとの桜はこその春そさかまし

年ころすみ侍りける女の身まかりにける四十九日はてゝなを山さとにこもりゐてよみ侍りける

左京大夫顕輔

誰これ花の心よりもちりてひらきて内へ秋の山に
右守朝臣母身内らて後の心は金剛院の花
とこて

後徳大寺左大臣

花こそ八侍しく家らそとそ候ふ給ひしぞ人しなき後て
定家朝臣母の思ひは侍るこの く候はぬりしなる

摂政太政大臣

春霞しとみ見え名所にへ宮ふをつゝりのよる候なりけり
前大納言光頼こる身内らときるとくる中なり
てとくしてくる侍るは

前右兵衛督惟方

うつのかり煙とたなびきつゝ実は家は御子給のありきは
六條摂政ほくまゐ給て後うへと給ひ給ける御册
のたまひし給ふなれおりて繁房かとし給ひし
て侍る候て

太宰大弐重家

ほくらさて候はゆきまこ給ひ草かふなりくの給ふ
おくかなきこみのうせよなりらうへかなしからける
菖蒲とこてしかん給ける

高陽院木綿四手

菖蒲草なきぞのそうらへかなてよりさるとも家き
かゝく事給きらしか月ある人のゆえなかりし

上西門院兵衛

ふくまてあやめさそぬかりもむしとこそ給ひとて
近衛院く候給ひはそひむしきて後世

同日皇嘉門院へたてまつりける

九條院

あやめ草ひきゝへける袂にはむかしをこふるねそかゝりける

なし

皇嘉門院

うきねには袂のかはくまもなくて袂そぬれてはかなかりける

おなしころ女かくれける所にて萩原為頼朝臣

妻身まかりてのちによみ侍りける

小野宮太政大臣

しをれても[illegible]の[illegible]そなきみしはなけかれ

なし

藤原頼輔朝臣

こひわひてはかなき[illegible]のかたみにはのこるものなし[illegible]

小式部内侍露をきたる萩おりたる唐きぬをきて侍りけるを身まかりてのち上東門院よりたつねさせ給ひけるにたてまつるとて

和泉式部

をくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにゝたとへん

上東門院

思ひきやはかなくをきし袖のうへの露をかたみにかけん物とは

白河院御時中宮おはしまさで後その御方は草のみしけりて七月七日わらはの露とり侍けるを見て

周防内侍

浅茅原はかなくおきし草のうへの露をかたみと思ひかけきや

一品資子内親王にあひてむかしの事とも申出してよみ侍りける

女御徽子女王

袖にふれし梅の花をば昔より君に見せばやと思ひしに
まいらせ給ふ事ありて御くしおろさせ給ひける
日上東門院中宮と申ける時に
一條院御哥
あき風の露の宿りに君をおきて塵を出ぬる事ぞ悲しき
昧のしるしもなきをりくに
大貳三位
見る程も人名残の袖にうつるやうくつれ梅の香の露
かし
讀人不知
たれ為と露まくらに涙にむすぶ夜半はうきにぞある
虚義子の母なく成て後に思ひ出て
清慎公
なき跡のみかは思ひ出て侍らぬ時の秋の空に夢
保忠寺為尊親王を俟まで露に忍ぶころ
和泉式部
袮覚する身を吹とをす風の音をむかしは袖のよそにきゝけん
従一位源師子宇治より新枕にて
かくれ侍りける
知足院入道前関白太政大臣
袖ふるゝ萩の下葉の露ばかりむかしのあとや思ひいづらむ
清輔うせて後その跡に大納言忠家住
侍りけるをみて侍り
権中納言俊忠
なにとなく露のあきさへむかしの秋ぞ思しけるかな
成時卿母身まかりて大納言忠實

同とふしにはへりける
後徳大寺左大臣
かなしさハ秋のさか野のきり〳〵す猶ふるさとに音をやなくらん
母の身まかりにけるを嵯峨のへんにをさめ侍りける夜
よみ侍る　　皇太后宮大夫俊成女
今ハさハうき世のさかの野辺をこそ露きえはてし跡としのはめ
母身まかりにける秋野分しける日もとすみ侍りける所に
まかりて　　定家朝臣
玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふる宿の秋風
父秀宗朝臣身まかりての秋寄風懐旧といふ事を
よみ侍る　　藤原秀能
露をたに今ハかたみの藤衣あたにも袖をふく嵐哉

久我内大臣春ころうせて侍りける年の秋土御門
内大臣中将にて侍りける時つかはしける
殷富門院大輔
秋ふかき寝覚にいかゝ思ひ出るはかなく見えし春の夜の夢
返し　　土御門内大臣
見し夢にやかてまきれぬ我身こそとはるゝけふもまつかなしけれ
ゆゑありて物思ひける女身まかりて後その家に
とまりてよみ侍る　　大納言実家
なきて秋のゆふくれはこゝにをかくしへのそこの夢そのかし哉
見ゆるのくさはへまかりける時野中にかすかにつかのありけるを
とひ侍れはこれなん中将のはか
とし侍るへ尋ねとハいへとはかなの人

侍りけれは實方朝臣の事となむ申しけるに冬のことにて
霜かれのすゝきほの〳〵見えわたりて折ふし
物かなしうおほえ侍りけれは

西行法師

くちもせぬその名はかりをとゝめおきて枯野のすゝきかたみにそ見る

同行に侍りける人へらせしきてなく成にけれは
てよめる

前大僧正慈円

わか思をこそ後やこゝろゆくなかむ山のたらちし鏡

母のおもひに侍りける秋法輪寺にこもりてあらし
のいたく吹けれは　皇太后宮大夫俊成

うき世には今はあらしの山風にこれやなれゆくはしめなるらん

定家朝臣母身まかりてのち秋ころ墓所
ちかき堂にとまりてよみ侍りける

まれにくる夜はもかなしき松風をたえすや苔の下にきくらん

堀河院かくれさせ給ひて後神無月風のおとあはれに
きこえけれは　久我太政大臣雅實

物おもへは色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに

藤原定通身まかりて後月あかき夜人の夢
に殿上になむ侍るとてよみける哥

あかはくを別し秋をかそふれは八とせになりぬありあけの月

源為善朝臣身まかりにける又の年月を見て

能因法師

命あれはことしの秋も月はみつ別し人にあふよなきかな

世中はかなく人々おほくなくなり侍りける時

定家朝臣身まかりて十月許白河の家に
まかりけるに紅葉のひとはのこれるを見て

前大納言公任

けふこすハみてやゝまゝし山里のもみちも人もつねならぬよに

十月ころ水無瀬に侍りし比前大僧正慈円の
もとへぬれて時雨のなと申つかはして次のと
しの神無月に無常の哥あまたよみてつかはし
侍りける中に

太上天皇

おもひ出るおりたく柴の夕けふりむせふもうれしわすれかたみに

前大僧正慈円

おもひ出るおりたく柴ときくからにたくひしられぬ夕けふりかな

雨中無常といふ事を

太上天皇

なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色はみえねと

枇杷皇太后宮かくれて後十月はかり彼家の
人々の中にたれともなくてさしおかせける

相模

神無月しくるゝころもいかなれや空にすきにし秋の宮人

右大将通房身まかりて後手ならひすさひて
侍りける扇を見出して

土御門右大臣女

てすさひのはかなきあとゝみしかともなかきかたみになりにけるかな

高文女御の辞あつく先帝おほせ給ひけるに

馬内侍

うきなから給く

すゝ神くしわきてゝてわかれゆくみちもしらぬかな
よし
女御徽子女王
ゆめ（の）なきふたりの中の思ひかなまたもあふせのありとこそきけ

恒徳公家にて後女房とふ月のあかきに夜ふけて帰りてよみ侍る　道信朝臣

かへるさの空にまよへる月影は涙にくもる名にこそありけれ

入道摂政万燈会おこなはれ侍ける
東三条院

みなそこの光はつきしかとのち（の）ためとぞ思ひける

公忠朝臣身まかりにけるを見て侍ける
源信明朝臣

物をのみ思ひねざめのまくらには涙かからぬあかつきぞなき

一条院うせさせ給て後なでしこのはなに（御）覧じ
きこえて夢にほのかにみえ給ければ
上東門院

わか事は今はなき我孫のうへに見てこそ人はしのばめ

後朱雀院うせ給て上東門院白河にわたり給
まゐりてきこえて
女御藤原生子

うきことはけふをかぎりと思ひしにかはらぬものは涙なりけり
おなじ心こそ（いつ）かはる
源道済

たつ（ね）しく侍ひ（し）に（も）夜のまつ（の）この世にかはるなみだなりけり

後一条院中宮うせ給て後人の夢に

ゆくへなくふりにしひとのとふかたはやどにのこれるしるしなりけり

小野宮右大臣身まかりぬとききてよめる

権大納言長家

玉のをのなかきためしにひく人もきゆれは露にことならぬかな

小式部内侍なくなりて後つねにとらせて侍りける
てこを誦経にせさせ侍るとてよみ侍りける

和泉式部

恋しふときゝにたにきけかねのをとにうちわすらるゝときのまそなき

上東門院小少将身まかりて後つねにうちとけ
てかきかはしけるふみの物の中に侍るを見出て
加賀少納言かもとにつかはしける

紫式部

くれぬまの身をはおもはて人の世のあはれをしるそかつははかなき

なき人をしのふることもいつまてそけふのあはれはあすのわか身を

加賀少納言

僧正明尊かくれて後久しく房にまかりて見侍るに
いとゝあれて草おひしけりて侍りけれは
よみ侍りける

律師慶暹

なき人のあとをたにとてきてみれはあらぬさまにもなりにけるかな

世のはかなき事をなけくころみちのくに名ある
所々かいたる絵を見て

紫式部

みし人のけふりとなりしゆふへより名そむつましきしほかまの浦

後朱雀院かくれさせ給ひて源三位かもとにつかはしける

弁乳母

あはれ君いかなる野への煙にてむなしき空の雲となりけん

源三位

[illegible]

大納言[illegible]

[illegible]

能因法師

[illegible]

大江近衛朝臣

[illegible]

後頼朝臣[illegible]

[illegible]新少将

[illegible]

桜巻僧正遍

[illegible]

中院大大臣

[illegible]

権中納言道家母[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

攝政太政大臣

述懐

今日までやそてもぬらさぬ我身こそとしふるまゝにつもるなれ

母のおもひに侍りけるころ文おくりける人のかへし

[illegible]

清輔朝臣

世はみしときにもあらぬおくてしも昔のかげつ成らら

無常の心を

西行法師

何事もかはりのみゆく世の中にきてこそ今もとらん

前大僧正慈円

みな人のしりかほにしてしらぬかな かならずしぬるならひありとは

あはれみし人はかならずとおもふかな [illegible]

[illegible]

前参議教長

[illegible] 成ける頼輔 [illegible]

[illegible]

寂蓮法師

[illegible] 山の夕雲

[illegible]

西行法師

なき跡のおもかげをのみ身にそへて [illegible] 人の恋しかるらめ

[illegible] 侍りける

[illegible]

無常の心を

入道左大臣

はかなしなおもへハわしハ涙そゝくのあはれとも云まきて（？）
左近中将通宗か墓所に侍りて見侍る
土御門内大臣
をくれゐてみるそかなしきはかなさをうき身のあとゝなにたのみけん
覚快法親王かくれ侍りて周忌のはてに墓所にま
かりてよみ侍る
前大僧正慈円
そこはかとおもひつゝけてきてみれはことしのけふも袖はぬれけり
母のおもひに侍ける秋法輪にこもりて佛供養し侍
りけるにあらしのいたくふき侍りけるに
はまとのいはなりおもひあまりてよみ侍
る（？）
右大将忠経
うき世にはいまはあらしの山風にこれやなれゆくはしめなるらん
なくさむる人のことはもそれそかなしき
又人はきえてなき世のとこにのこりてや袖そぬれ
子の名のこりてはかなきのこるは家に
のこりたる花とてもの人のなかはれ
法橋行遍
祝部成仲
あはれなる後のわさや袖の色花すゝきらしとやきるらん
能円法師身まかりて後よみ侍る
藤原為房朝臣
あまの世にとまらてハかなしきわかれとなりにけるかな
妻身まかりて又のとしの秋周防内侍まかりて

はらしける　権中納言通俊

こゝろふくしく夜の床の波のうゐあきの秋(?)寛を

堀河院くれ給て後よめる

権中納言国信

見わたしてしろくてなかき青柳のいとゝ〳〵世をかへる河

ひらいろ女山にしたくるかくあひけれは

はるゝくさのし待て侍るあはれは

京へまかりて暁のつゐ鳥なきけれはへつる

し侍るに　左京大夫顕輔

伊勢のさふ館山のとなりても京の代ゐなふかまん

かくのなこおくさえてよしくかゝるを

なくるみもよしに火今(?)はまれ(?)てきえてしかへ

称しき侍　小野小町

あつはなくなかさいずそふ世の中のわれなるの日もそかし

　業平朝臣

たちまちふそこ人のこゝろにふさ侍とてくく見てたまひ

更衣の時そてさしいまはりたるを給く

　喜撰法師

年あ程ハ久しくあひきたるを深のちハおまふてまなれあれなか

あひかて人のそやとれりたるをその家はにた

草のおほく侍るれハあかしはてしきる

　中納言兼輔

なきしへをその心かそてハ見か草おほけるをかしやとをとひて

やよひはかりてのちしくたよりなくて侍る
ころほひしけしふりてつらまさりて
公忠朝臣に侍りけるにあひて又あさてなりけれは
いかつきまうして侍りけるまにまうて
とりくはへてまうりに侍りけれは公忠朝臣のもと
につかはしける
藤原孝經
くやしくそあひ見て契りけるとたのみしに
母乃女御かくれ侍りて七月十四日によみ侍りける
中務卿具平親王
もろ人の袖はそよまてはらふ露けきかな
はちすはの物の露かかるを見ておもてる
くもゐのみやしのみなかそくの世かわれとのみそとさへなかれ

新古今和歌集巻第九

離別哥

みちのくにゝくたり侍る人にはなむけし

てつかはし侍る　　紀貫之

玉ほこのみちの山風さむからはかたみかてらにきなむとそおもふ

題しらす　　伊勢

わすれなむ世にもこしちのかへる山いつはた人にあはむとすらん

あさからぬちきりたる人のゆきけるにつかはしける

紫式部

きたへゆくかりのつはさにことつてよ雲のうはかきかきたえすして

おなしくへまかりける人にかつけもの給ふとて

大中臣能宣朝臣

秋霧のたつ旅衣おきてみよつゆはかりなるかたみなりとも

つくしの國へくたり侍りけるに

貫之

ゑてこふるおのか心はいかならんおもへとも人のゆくらん

あふ坂の関ちかきにはゆふつけのなくなくまてに

きのふはゆかりけるにも餞し侍く

中納言兼輔

逢坂のせきはけふやかへるせはまてとも人はさみゆかまし

寂昭上人入唐し侍りけるに装そくをくるとて

そうらうをもてそへてまかりける

読人しらす

きみかせをおもひし物をもろこしのなかきわかれとなりにける哉

もし
康昭法師
山桜やさくは雲のたえまより[illegible]
題不知
源重之
白河は春の[illegible]ゆく花の浪は[illegible]
かすみのうちのもにして[illegible]花氷[illegible]
の浮はさらし[illegible]
高階経重朝臣
[illegible]
返し
藤原範永朝臣
[illegible]
太宰帥資家[illegible]
枇杷皇太后宮
さくら[illegible]
[illegible]院御時[illegible]
[illegible]法師[illegible]
行春の[illegible]てやまし[illegible]
かしこまり侍ける
一条右大臣
神無月[illegible]
題しらず
大江千里
[illegible]
成尋法師入唐し侍りける時母のよみ侍る
もろこしも[illegible]
[illegible]
道命法師

別ちは花やまちらかへいふもけふにいつくなきまそかなしき

老ぬるおやの七月はかり清水へくたりまうてける所
ふるさと事と思ひて八月のあかつきによひて
舟よりのほり侍りける

加賀左衛門

あまれのそくに歳はし再ひは我そゆきて今朝はるき

實方朝臣みちのくにへくたり侍りけるに餞すとて

中納言隆家

別ちはいつも歎の絶せぬにいとゝかなしき秋の夕暮

藤原實方朝臣

とゝまらむ事は心にまかせても雲井のそらをいかにかはせむ

月そみるへきそらくもりても我そ雲ゐのなみたに

前中納言匡房

家をたにいてさることものあらそらに心ひとつ君にそなれて

東宮と申しける時太宰大貳實政學士にて
て侍りける甲斐守にてくたり侍りけるに餞たまふ
とて

後三條院御哥

思ひ出はおなし空とは月をみよほとは雲井にめくりあふまて

實政の朝臣の基頼の朝臣にくたりけるにつかはし
ける

基俊

くもゐにはまたもかへらむ我身こそわかれてまたもあひみむ

修行にまかりけるにつかはしける大僧正行尊

君をおもひてゆく人のなかの世の命かはゆくゑもしらぬ

我こひはさこそおもへとなけくかなよものこゝろは
題しらす　讀人不知
ちきりおきし事こそいまはうらみしかなきさへおもひはてぬあはれ
別乃後恋　俊恵法師
ありそめのまつほとにふるまよひしを侍るやかてそれと
登蓮法師
わすれしの[illegible]ときつきて[illegible]のかけの[illegible]我身[illegible]
守覚法親王五十首歌よませ侍りける時
藤原隆信朝臣
あはれにも別のなかの[illegible]の[illegible]てはなる人
登蓮法師　後朝恋の心をよみ侍りける
俊恵法師
[illegible]やしやしく[illegible]
かちぬれにまつしもかなくやしき侍るかな
題しらす
西行法師
おもかけのわすらるましき別かな名残を人の月にとゝめて
遠きに[illegible]へてそなたにそむき侍るかな
別をしみて人の侍りける
あはれとも君やかきしくたれかはなくなく
[illegible]とおもふ事をたのむそのほかのきはみ別に
[illegible]なからん法師光嚴のいひ侍りける
かへし
道因法師
かへしおもひあふたのむまての[illegible]
おもへはあきる[illegible]
皇太后宮大夫俊成

みるまゝのいろをし秋としむけて老は浪をこえてよるらむ

祝部成仲

あき秋はしくへゆきやみよしの山もかすみてはなれるかたもや

定家朝臣

けふはまたやよひの秋はいてゝも春をいはふ秋の風

都のかへまかりける人にしみてよろしき

惟明親王

名残おほき秋よりほかの秋くれてこゝろもとめぬ霧のもみち葉

はてしなくゆくかたもなき月くもりはてぬる霧をはれて

さしのほく

讀人しらす

あはれよに秋そらはてゝねさめしくらしのひとよにとよ

しはしまつ秋かへるへくもしやかすみへわかれゆくかな

大蔵卿行家

あき秋に山吹の花さく成ぬるをもあけて風のみたるに

きのふまてへ涙をしらぬ人のふるさとはてゝ

ながめてしあら

藤原顕綱朝臣

夕ふかく涙をとゝめて衣の色しみてのこるまて見よ

新古今和歌集巻第十

羇旅哥

和銅三年三月ふちはらの宮よりならの宮にうつり給ける時　元明天皇御哥

とふとりのあすかの里をおきていなは君かあたりはみえすかもあらん

天平十二年十月伊勢国にみゆきし給ける時　聖武天皇御哥

いもにこひわかの松はらみわたせはしほひのかたにたつなきわたる

もろこしにて　山上憶良

いさこともはや日のもとへおほともの御津の浜松まちこひぬらん

題しらす　人丸

あまさかるひなのなかちをこひくれはあかしのとより大和しまみゆ

さゝの葉はみ山もさやにみたるなり我はいもおもふわかれきぬれは

帥の任にてつくしに侍けるに　大納言旅人

こゝにありてつくしやいつこ白雲のたなひく山の西にあるらし

題しらす　読人しらす

あさ霧にぬれにし衣ほさすして獨や君か山ちこゆらん

わたつみのてにまかしたる玉ゆへに磯のうらわにかつきするかも

業平朝臣

しなのなるあさまのたけにたつけふりをちこち人のみやはとかめぬ

題しらず

[illegible]津の山の[illegible]人よ[illegible]

延喜御時屏風の哥　貫之

草枕ゆふ風さむく成にけり衣うつなる宿やからまし

読しらず

しら雲の[illegible]山の[illegible]

壬生忠岑

あつまちのさやの中山さやかにも見えぬ雲ゐに世をやつくさん

伊勢より人につかはしける

女御徽子女王

人と[illegible]や[illegible]

題しらず

藤原輔相

[illegible]我[illegible]

讃岐

[illegible]

神風や伊勢の濱荻折ふせて旅ねやすらんあらき濱辺に

亭子院おりゐ給て山寺修行し給ける時

御供にて和泉國日根といふ所にて人〻哥よみ侍けるに

橘良利

ふるさとの旅ねの夢にみえつるは[illegible]

[illegible]

藤原輔相

[illegible]

歌よみ侍とて　　　御形宣旨

あこくしらのをとこうちかへてまかりいひかはしけるに

入唐し侍ける時いつかかへるへきと人のいひ侍けれは

　　　　　　　　　　法橋奝然

旅衣たちかへるとは成れは侍らむ

しき津のうらにまかりてあそひけるに舟にとまりて侍るに

　　　　　　　　　　藤原實方朝臣

舟なからこよひはかりは旅ねせむしき津の浪に夢はさむとも

侍そのついてに随身なとしてまかりけるに

いひつかはしける

まへに侍りける

とをせよとて

　　　　　　　　　　大僧正

旅かくれは

あきくもりふるなみのおと

　　　　　　　　　　式部

天王寺にまゐりけるに難波の浦にとまりてよみ侍る

　　　　　　　　　　肥後

さ夜ふけてあしのすゑこす浦風にあはれうちそふ浪のをとかな

旅ねとてよみ侍る

　　　　　　　　　　大納言經信

旅ねして暁かたのしかのねにいなはをしなみあき風吹

　　　　　　　　　　道慶法師

思ふこと旅ねのとこに

後冷泉院御時うへのをのこども桜哥よみ侍りける

左近中将隆綱

おしなべて[illegible]

なのミ侍りける人まかりて後に人を偲て

しのびもしけり[illegible]

[illegible]

赤染衛門

なかき世のうきは桜に[illegible]

堀河院百首歌に

権中納言国信

山ちかき[illegible]白露のあるかなきかの[illegible]

大納言師頼

[illegible]桜の人[illegible]

水辺桜といふ事をよみ侍る

源師賢朝臣

[illegible]桜咲くひらの山かぜ[illegible]浪

[illegible]

大納言経信

桜さくやまのかけ[illegible]

題しらず

[illegible]

桜宿といふ事をよみ侍る

修理大夫顕季

[illegible]

[illegible]八月十五夜に寝覚を思

おなし家の女房にあはれしける

橘為仲朝臣

みなとよふの浦世着をあしはたちくとゝる秋の露の月

きのふの院と云所にて羇中見月といふ心を

大江嘉言

草枕ほとそへにける宮こ出ていく夜か旅の月にねぬらん

守覚法親王家に五十首哥よませ侍りける

皇太后宮大夫俊成

夏かりのあしのかりねもあはれなり玉江の月の明かたのそら

たちかへりまたもきてみん松島やをしまのとまや浪にあらすな

藤原定家朝臣

こととへよ思ひおきつの浜千鳥なく〳〵出しあとの月かけ

藤原家隆朝臣

野辺の露うらはの浪をかこちても行ゑもしらぬ袖の月かけ

旅哥とてよめる

摂政太政大臣

もろともに出し空こそわすられね宮この山のありあけの月

題しらず

西行法師

宮こにて月をあはれと思ひしはかすにもあらぬすさひなりけり

月みはと契りおきてしふるさとの人もやこよひ袖ぬらすらん

五十首哥たてまつりし時

家隆朝臣

あけは又こゆへき山の峯なれやそらゆく月の末のしら雲

藤原雅経

旅人の袖ふきかへす秋かせに夕日さひしき山のかけはし

和哥所月十首哥合のついてに月前擣衣
といふ心をよみ侍りし
摂政太政大臣
ひとり寝さめて衣うつねはたへす物おもふ宿の
擣衣の心をよみ侍りける　前大僧正慈円
わかせこの衣のうちいてて山より月を
海濱重夜といへる事をよみ侍し
越前
伊勢のあまの月をおもてにたちかさね浪よりしく浪の濱荻
百首哥よみ侍りける時
宜秋門院丹後
あけゆくやまての浦風たちかへりいくへの浪の濱荻
影ならし　前中納言通房
なかしを世の濱をしけきふたゝひもえはなる
権中納言定頼
破れなてしあるそを寝てあくるをかなくもしなれ
百首哥中に
式子内親王
ちたひうつきぬたの音にゆめさめてもの思ふ袖の露そくたくる
千五百番哥合に　皇太后宮大夫俊成女
ふけにけり衣うつなる音すなり里のひかりの秋の霜
摂政家百首よみ侍りける
権僧正永縁
まちこひし夜はのねさめもいつはりにわかことはりの月の夜かへり

薄暮行客といへる心を
大納言経信
ゆふ日さす浅茅か原のたひ人はあはれいつくにやとをかるらん
摂政太政大臣家哥合に羇中晩風といふ事を
よめる　定家朝臣
いつくにかこよひはやとをかりころもひもゆふくれのみねのあらしに
旅哥とてよめる
旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし
家隆朝臣
あけはまたこゆへき山のみねなれやそらゆく月のすゑのしら雲
藤原雅経
しら雲のいくへの峯をこえぬらんなれぬあらしに袖をまかせて
源家長
けふは又しらぬ野原に行くれぬいつれの山か月は出らん
和哥所哥合に羇中暮といふ事を
皇太后宮大夫俊成女
ふる里も秋はゆふへをかたみにて風のみおくる小野のしの原
雅経
いたつらにたつやあさまの夕けふり里とひかぬるをちこちの山
宜秋門院丹後
忘れしな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月はみるとも
藤原秀能
草枕ゆふへの空を人とはゝなきてもつけよはつかりの声
旅のこゝろを
有家朝臣

[illegible]
石清水の哥合に旅宿嵐といふ事を
岩か根の床にあらしをかたしきてひとりやねなんさよの中山
旅哥とて　藤原業清
誰となき宿の夕をちきりにてかはるあるしをいくよとふらん
羇中夕といふ心を　鴨長明
枕とていつれの草にちきるらんゆくをかきりの野への夕暮
東のかたへまかりける道にてよみ侍りける
民部卿成範
道のへの草の青葉に駒とめてなほ故郷をかへりみるかな
[illegible]国へまかりて侍りける
に侍ける　禅性法師
[illegible]
旅の哥とてよめる　藤原秀能
さらぬたに秋の旅ねはかなしきに松にふくなりとこの山風
摂政太政大臣家哥合に秋旅といふ事を
定家朝臣
わすれなん待とな告そ中々にいなはの山の峰の秋風
百首哥たてまつりし時旅哥　家隆朝臣
ちきらねと一夜はすきぬ清見かた浪にわかるゝあかつきの雲
千五百番哥合
[illegible]
哥合し侍りける時旅の心をよめる
入道前関白太政大臣

日ともいはゝえこそ思はめの浦にいさよひ浪よりかゝるかな

堀河院御時百首哥よませ給うける時たひの哥

藤原顕仲朝臣

わすらるゝ我身ひとつはなけきつゝ人の思ひにおもはるゝかな

入道前関白家百首哥に旅のこゝろを

皇太后宮大夫俊成

難波人あしひたくやにやとかりてすゝろに袖のしほたるゝかな

僧正雅縁

又こえん人もとまらはあはれしれ我おりしける峰のしゐ柴

前右大将頼朝

みちのくのいはてしのふはえそしらぬかきつくしてよつほのいしふみ

述懐百首哥よみ侍りける中に

皇太后宮大夫俊成

世中はうきふししけししの原や旅にしあれはいも夢にみゆ

千五百番哥合に

宜秋門院丹後

おのつからさこそは旅寝するよはのやとりをしらぬ夢もみえけれ

天王寺にまうてけるに俄に雨のふりけれは江口に宿をかりけるにかし侍らさりけれはよみ侍りける

西行法師

世中をいとふまてこそかたからめかりのやとりをおしむ君かな

返し

遊女妙

世をいとふ人としきけはかりの宿に心とむなとおもふはかりそ

和哥所にて羇旅の哥つかうまつりしに

定家朝臣

袖にあきたつ山風のふきしく袖のしつくをはらふかな

家隆朝臣

旅ねする夢ちはゆるせうつの山関とはきかすもる人もなし

詩を哥にあはせ侍りしに山路秋行といふ事を

定家朝臣

都にも今や衣をうつの山夕霜はらふつたのした道

鴨長明

袖にしも月かゝれとはちきりおかす涙はしるやうつの山こえ

前大僧正慈円

さえつゝ山ふかくゆく人の袖にはてもあつくてたえぬなからむ

百首哥よみ侍りし時羇旅哥

ゆくゆくもおもひはなれぬ[illegible]

[illegible]

やとりてなかめし秋よりも侍りける

素覚法師

あつまへかへりし事ありけるに

わすれのみそらにあらはれよみ侍りける

西行法師

年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけりさやの中山

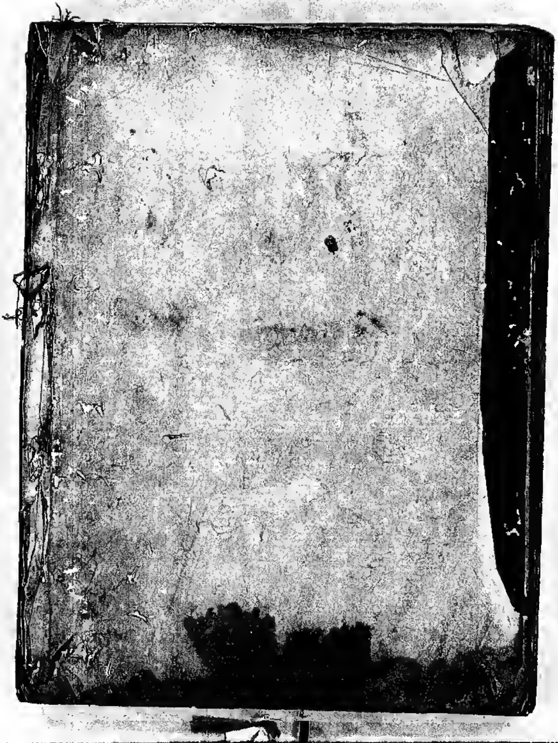
羇旅にて

おりしもくのつまとくきくとまくさ袖のこゑかね

熊野へまいり侍りしに旅の心を

太上天皇

見るまゝに山風あらくしくるめり都も今は夜さむなるらん



A 00
6326

新古今和歌集巻第十一

戀哥一

題しらす　　　　読人しらす

よそにのみ見てややみなむかつらきや高間の山の峯の白雲

なにはのをおりしゆかこて三吉野乃滝はなくそれ袖に露けき

人丸

足引の山田もるいほにおくかひのしたこかれつゝ我恋ふらくは

いそのかみふるのわさ田のほにはいてす心のうちにこひやわたらん

女につかはしける　　　　在原業平朝臣

春日野のわかむらさきのすり衣しのふのみたれかきりしられす

中将更衣につかはしける

延喜御哥

B 80461

しら[illegible]ぬれ[illegible]くそ[illegible]とおもひのちるらん

読しらず

みかの原わきてなかるゝ伊つミ川いつミきとてか恋しかるらん

中納言兼輔

平定文家哥合に

秋の野やを花にそよぐ[illegible]あはれとはかぜにもをしかなくらん

坂上是則

人の心を津かし偽ある世にはたのまれぬかな

藤原高光

年をへておもふ心のしるしにや[illegible]

九條右大臣女すけ[illegible]

西宮前左大臣

月は我身[illegible]

大納言[illegible]

よしさらば[illegible]人[illegible]我の[illegible]

天暦御時哥合

人[illegible]

中納言朝忠

袖くちて[illegible]

大宰大貳高遠

みこもりの岩の[illegible]

讃岐云

唐衣袖は人め[illegible]

左大将兼光五節舞姫[illegible]

[illegible]

前大納言公任

わかつまにあはぬ人のかねおもひしかくこそ
はかなくなりぬるものゆへに
しらくもの
謙徳公
我ためにいかてかくれぬ我をこひ
堀川関白忠かよはしけるに
いかなれは
中院侍従
我庵はこしにたなひく煙こそ
ものおもへは
忠義公
ともかくもその煙と成ましものを
題しらす
貫之
しかの浦の青柳と雲ゐにたなひく
源信明
つらきをもおもひしれとて
藤原輔成
風吹けはの煙の
文
藤原義孝
白雲の
和泉式部
わきもこや
源重之
大中臣能宣朝臣

我ならぬ[illegible]ふかくやおもふ[illegible]

[illegible]女にかはりてよみ侍りける

大江匡衡朝臣

[illegible]花をおしむ[illegible]のよもやあらしと

女をまたのかはりてよみ侍りける

清原元輔

思ふこと[illegible]花おりて[illegible]

年を経て[illegible]女の[illegible]

[illegible]よみ侍りける春のよをはなれし

大中臣能宣朝臣

いつ[illegible]

躬恒

[illegible]

亭子院歌合

[illegible]山の花をもひとりゆくらん[illegible]

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらん

正月雨ふり風吹ける日女にかはりてよみ侍りける

謙徳公

春風のふくにもまさる涙かな我みなかみも氷とくらし

[illegible]せうそこせぬ女に

水のおもの[illegible]

題しらず

曽祢好忠

[illegible]

[illegible]せぬ女のもとにつかはしける人のよ

[illegible]二月ばかりに[illegible]

和泉式部

逢事は[illegible]
[illegible]としらしと

興風

霜のうへに[illegible]浜[illegible]ねをのみそなく

中納言家持

秋の夜の[illegible]露の[illegible]哉

藤原高光

秋[illegible]萩の[illegible]
その[illegible]の紅葉[illegible]

花園左大臣

我[illegible]の紅葉[illegible]
[illegible]

摂政太政大臣

[illegible]の[illegible]
小野宮[illegible]の[illegible]

太上天皇

我恋は[illegible]の[illegible]神の[illegible]や

百首[illegible]

前大僧正慈円

よの中は松[illegible]の[illegible]
家[illegible]百首[illegible]

摂政太政大臣

[illegible]桜の[illegible]の[illegible]神[illegible]の[illegible]

寂蓮法師

一 おもひわびぬハ袖ニ苦しきことハいふやうなる人の涙
一 この歌ハあはれなるこゝろを作りまうけ給
もの

太上天皇

一 百敷やふるき軒端のしのぶにもなほあまりある昔の色
百敷乃中ニ思ふと

式子内親王

一 玉乃をよたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする
こもれる人ハ[illegible]我の[illegible]
我恋ハ[illegible]家の[illegible]
百首ノ歌ニ[illegible]恋の心

入道前関白太政大臣

あつまの[illegible]
冷泉院ノ御時ニ[illegible]
をとこか[illegible]
きよら[illegible]

顕注云

ほとゝぎす根岸[illegible]
也事
面しろ[illegible]
歌[illegible]
貫之
[illegible]
道信朝臣
[illegible]
くる[illegible]

三条院女蔵人左近

[illegible]袖にかけつゝあやめ草ひきたかへたる袖もありけり

五月五日馬内侍につかはしける

前大納言公任

[illegible]

馬内侍

[illegible]

法成寺入道前摂政太政大臣

郭公こゑをはきけと花のえにまたふみなれぬ物をこそおもへ

馬内侍

[illegible]

[illegible]

伊勢

見くまのゝ浦よりをちにこく舟の我をはよそにへたてつるかな

難波かたみしかきあしのふしのまもあはて此世をすくしてよとや

人丸

みかりするかりはのをのゝならしはのなれはまさらて恋そまされる

読人不知

[illegible]

東路のさのゝ舟はしかけてのみおもひわたるをしる人そなき

[illegible]

対面して冬の木のはゝ色に江(?)給ひて人の袖はありなき
おりにふれて……袖に涙なん
なく乃あふのうちとけぬ……袖は……
我袖は涙に……
女のもとにつかはしける
……中納言兼輔
冬の夜の涙にこほる我袖の心とけすも見ゆる君かな
返し　　藤原元真
……冬の池に夜……
涙川身もうくはかり流れても消ぬは人のおもひなりけり
女につかはしける　　安貞方朝臣(?)
伊勢の海人のつりの中……
袖……
返し
我恋は伊勢……難波なる……
伊勢
……海の底とも……
人に……　　藤原清正(?)
……の浦……
返し　　源……
おもひ……白浪の……我……
足引の山下激つ岩浪の心くたけて人そこひしき
貫之

是川の下ゆくさゝ波のはなのしら波ゆふ過ぬれは
かくし始と夏野の草根かたよりてなき名をたつる

曽禰好忠

牧守の犬さへ来ぬさとの下むら猶やかなしき
ゆふのとまりに手向かふらんはつ枝にかゝる
あら鶴も御禊川の麻ぬさの風を
まつころとしるらん

権中納言師時

遊風やさえ増る浪の波のまにゆらめく

百首哥に　　　摂政太政大臣

こゝろとは見えぬものから浪のまにまよふ舟の煙たつ

式子内親王

もろ人のおほつかなきは小舟のみさほの湊をはなれ

権中納言長方

紀の国やゆらの湊によするなみの

法性寺入道前関白太政大臣家哥合に

権中納言師俊

住吉の松の木の間のうき雲にまよふ

和哥所哥合に

摂政太政大臣

難波人いかなる江にか朽はてんあふことなみに

隠居者に侍りける時　皇太后宮大夫俊成

わかの浦にみをはすてつゝなきことの葉をのみ

相模

詠しらす

逢まてのみるめかるへき方そなきまた浪なれぬいそのあま人

業平朝臣

みるめかる方やいつくそさをさして我にをしへよあまの釣舟

新古今和歌集巻第十二

恋哥二

五十首哥たてまつりしに寄雲恋

皇太后宮大夫俊成女

したもえに思きえなん煙たにあとなき雲のはてそかなしき

摂政太政大臣家百首哥合に

藤原定家朝臣

なひかしな海士のもしほ火たきそめて煙は空にくゆりわふとも

百首哥中に忍恋

摂政太政大臣

恋をのミ須磨のうら人もしほたれほしあへぬ袖のはてをしらはや

恋の哥とてよめる 二條院讃岐

みなちしそへわらむの事にかゝる袖にはなのたえぬかな
年をへて恋といふことをよみ侍りける
俊頼朝臣
こふれとも人の心のうらみてはあはれしらすもすくる年かな
忍恋の心を
前太政大臣
あらちやま雪ふりしく笛のをとたえぬおもひのきえぬなりけり
左大将に侍りける時家に百首歌合し侍りけるに
忍恋の心を
摂政太政大臣
よそにのみ雲のはたての初時雨おもひの袖のぬれまさりつゝ
恋の歌とてよめる
後徳大寺左大臣
かくとたに思ふ心をいはせ山したゆく水の草かくれつゝ
殷富門院大輔
とふさへなれにしひとのこゝろのそらに思ひの心のうらみ
忍恋の心を
近衛院御時
あふことのいつとなきにはうきなのみたつやかひなき思ひなりけり
見えまてわかれぬ思ひに侍りける
花園左大臣
人しれぬ恋に我身はしつみつゝ涙のかはのみなかみもなし
題しらす
神祇伯顕仲
物おもふこゝろのうちはしらせはや人にはいはぬ袖のなみたを
忍恋の心を
清輔朝臣
人しれぬおもひはつらしさもあらはあれいはぬ心をしるよしもかな
和哥所の歌合に忍恋の心を

雑躰

我えよこゝて思ふのゝ山乃嵐の雲ゆかみの誠のあはれ

千五百番歌合に　左衛門督通光

かきくらしわきてこのゝの山乃峰ともしも紅葉の上乃霧そ深く

二条院讃岐

うらみつゝくるしき中にあふのこゝろのみたれ海のなかく

和歌所乃歌合に　依思増恋といふ事を

前大僧正慈鎮

そのまゝに作りつゝいのゝ笛川を瀬ゝとせてゆかれぬあはれ

歌しらぬを　信濃

人もいつとなくおほくもあはれ神とならむ

寂蓮法師

をりつゝもあはれなり物ゝ枕ゝかゝりてせめても花しそゝおもひや

かくとへんつゝみなかくもそてせてそれなくゝおもひ

水無瀬恋十五首歌合に　夏恋を

草ゆかしき夏野をしけるさかりの露はそれそれに露にぬれて

摂政太政大臣

入道前関白右大臣に侍りける時百首歌よみ侍りけるに

よみ人しらぬ思ひの恋を

大宰大弐重家

後乃世を歎く涙と侍るにてたえかやせまし墨染の袖

大納言成通

世の中のうきにつけてもなほ残るかれし花とはなりけれ

しかへてしらて

ことにつれなくかくもありけりと後の世までも称美せられ

前大納言隆房中将に侍ける時右近の馬場の
ひをりの日まかりけるに花見侍ける女車に
遣しける　読人しらず

ときわかぬ袂をかはしても人にまさる…

前大納言隆房

千五百番歌合に　右衛門督通光

侍しよりひとかたならぬ…

詠みおかれけん雲のうへ…

雨のふる日女に遣はしける　皇太后宮大夫俊成

水無瀬恋十五首歌合に

摂政太政大臣

山かつのあさのさころもをさをあらみあはて月日やすきふける庵

欲言出恋と云ふ事を

藤原忠定

おもひつつ侍る月日は杉の門…

百首歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

あふことはかたのの里のささのいほしのにつゆちるよはのとこかな

入道前関白太政大臣に侍ける時百首歌の中に忍恋

ちるなよ…

藤原元真

白玉か露かととはむ人もがな…

女に遣はしける　藤原義孝

保津ぶしの命をたへ世の中にはらきさ[illegible]
景清坊は百首ニ入てまつりし

大炊御門右大臣

我恋ハ[illegible]のしかくてのも[illegible]て年の[illegible]
逢[illegible]家は百首ニ[illegible]

藤原基輔納言

[illegible]も[illegible]の[illegible]
以恋と[illegible]

藤原義能

[illegible]の[illegible]
[illegible]海[illegible]と[illegible]

藤原定家朝臣

[illegible]の袖[illegible]
摂政太政大臣家ニ[illegible]

寂蓮法師

ありとても[illegible]
千五百番[illegible]

摂政太政大臣

[illegible]
百首[illegible]

二條院讃岐

瀬川[illegible]
摂政太政大臣家百首[illegible]

高松院右衛門佐

[illegible]
恋[illegible]

思ひきやおもひの波に袖ぬれておもふ心のあらはれぬとは

入道前関白太政大臣家歌合に

くれなゐに涙の色のなりゆくをいくしほまでと君にとはゝや

道因法師

百首歌中に

式子内親王

夢にても見ゆらんものを歎つゝうちぬるよひの袖のけしきは

つらかりける女の夢に見えて侍りければ

後徳大寺左大臣

はかなくの夢なりけりと契りてしわかれのおもくなる哉

千五百番歌合に

摂政太政大臣

身にそへるその面影もきえななむ夢なりけりとわするはかりに

題しらす

大納言實宗

哀わか身のうき名に袖ぬれて神もしるらむ

五十首歌よみし時

前大納言忠良

ことのはに紀の浅茅のいろかはりて木葉ふりしく庭の秋風

物河恋と侍りて

正三位経家

思ひあまりおもひ河なかれてもなほたえぬ思ひにあるかひなき

摂政太政大臣家百首歌合に

中宮大夫家房

わするゝは常のならひと思へとも袖のなみたはせきそかねつる

家隆朝臣

梅のかを袖にうつしてしのふかな上なきかけはとはぬ夜なから

名立恋と侍ふ

権中納言俊忠

名にたつはかへりみつゝもわかれ来て

[illegible]

百首歌の中に恋のこゝろを

惟明親王

あふ事のむなしき空のうき雲は身をしる雨のたよりなりけり

右衛門督通具

我恋はあふをかきりのたのみたにゆくへもしらぬ空のうき雲

水無瀬恋十五首歌合に春の恋の心を

皇太后宮大夫俊成女

おも影のかすめる月そ宿りける春やむかしの袖の涙に

冬恋

定家朝臣

床の霜まくらの氷きえわひぬむすひもおかぬ人の契に

摂政太政大臣家百首歌合に暁恋

有家朝臣

[illegible]

宇治にて夜恋といふ事をよみ侍りける

藤原秀能

袖のうへに誰ゆへ月は宿るそとよそになしても人のとへかし

久恋といふ事を

越前

夏引の手ひきの糸の年へても絶ぬおもひにむすほほれつゝ

家に百首歌合し侍りける時

摂政太政大臣

幾夜我浪にしをれてきふね川袖に玉ちる物思ふらん

定家朝臣

年も経ぬ祈る契は初瀬山尾上の鐘のよその夕暮

何思ひかねてよめる　皇太后宮大夫俊成

こひしなは我ゆゑとたにおもひいてよさこそつれなき心なりとも

題しらす　中納言長方

恋しなむ命はなほもをしきかなおなし世にあるかひはなけれと

殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつからあらはあふよをまつにつけても

八條院高倉

つれもなき人の心はうつせみのむなしきこひに身をやかへてん

西行法師

何となくさすかにをしき命かなありへは人やおもひしるとて

おもひしる人ありあけの世なりせはつきせす身をはうらみさらまし

新古今和歌集巻第十三

戀哥三

中関白かよひそめ侍りける比

儀同三司母

わすれしの行末まてはかたけれはけふをかきりの命ともかな

忍ひたる女をかりそめなる所にてあひ侍りて帰りてつかはしける

謙徳公

かきりなくむすひおきつる草枕いつこのたひを思ひわすれん

題しらす　業平朝臣

思ふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ

ゆくすゑはあすをもしらぬ今は命のをしくもあるかな

廣義三

百首歌に　式子内親王

あふことをけふ松かえのたむけ草いく夜しほるゝ袖とかはしる

少将に侍りける時五節の童にもの申そめて
後朝につかはしける　源正清朝臣

こひしさにけふそたつぬる奥山の日影の露に袖はぬれつゝ

題しらす　西行法師

逢までの命もかなと思ひしはくやしかりける我心かな

三條院女蔵人左近

人心うす花そめのかり衣さてたにあらて色やかはらん

恩風

逢事はいつとなくてもむなしけれはなきかわさの夏もおもふらん

曾禰好忠

待くのまの袖打はらひそて秋ならは君かたつねん夢のみえぬらん

忍ふ人と二人ふして　伊勢

夢とても人にかたるなしるといへは手枕ならぬ枕たにせす

題しらす　和泉式部

枕たにしらねはいはし見しまゝに君かたるなよ春の夜の夢

人にかたりけるを　馬内侍

わすれても人にかたるなうたゝねの夢見てのちもなからし夜を

又しのひてつかはしける
女につかはしける　藤原範永朝臣

恨みても猶こひしさのまさるかなつらさも君かしるへなりけり

題しらす　高倉院御歌

に朝いつしか侍るに[illegible]一首の哥

初逢恋の心を　俊頼朝臣

あしの屋のしつはたおひのかたむすひ心やすくもうちとくるかな

題しらず　よみ人しらず

かりそめにふしみの野への草枕露かかりきと人にかたるな

人忘れなと思ひける事をかたらひて侍りける

[illegible]　相模

待つ人の[illegible]秋の夜の中空の[illegible]

題しらず　寂蓮法師

[illegible]の浪の袖の[illegible]まてて詠人

[illegible]　伊勢

九月はかり有明の月にさそはれて和泉式部かかとをたたかせけるに

きゝつけさりけれは朝につかはしける

大宰帥敦道親王

秋の夜の有明の月の入までにやすらひかねてかへりにしかな

題しらず　道信朝臣

心にもあらぬ我身のゆきかへり道のそらにてきえぬへきかな

近江更衣にたまはせける　延喜御哥

はかなくもあけにけるかな朝露のおきての後そきえまさりける

御返し　更衣源周子

あさ露のおきつるそらも思ほえすきえかへりつる心まとひに

題しらず　亭子院御哥

[illegible]露やいかならん[illegible]侍りぬ[illegible]我身を

謙徳公

ありはてゝいはてもまいて夜もよらまさこいはしる草葉の露

清慎公

むかしみの衣のうらにかくしつゝ物思ふ人のおきてゆく

夏の天女の許にゆかりて後まかるに人のつかはす

かくし夜ひとりねけくあかしてゆきまたいかにけふ

忠義公

みる夜の残りなくゆかりいかにもあはぬ世の空

女のもとにやりしそゆかりしあり

大納言清蔭

わくる使ひはつれなき人の衣の夏衣かよふは浅の空

やまのはにしもおきてゆきてゆかしの

けさはあはれ物をおもはすやもしかはしもふ

和泉式部

きかれしを殺さしいろに恋の一夜をふみて

赤染衛門

かくしをかへしつしまひもみの秋のかけこしもゆる

あかはかりそてぬるけしけるまのかしけ

九条入道右大臣

まいつもあつよるかなしきさ袖をゆてけるふ

小八条御息所まかりける亭子院御許

平椎しいかく袖のなきくはなをわくもけるふかり

藤原頼成

おなしく

これしもてもし衣は梅の長月の夜の月は人まちふかり

前栽乃露おきたるをなとかみすなりにしと　ある女に

おきて見ハ袖のミぬれていとゝしく草葉の玉の数やまさらん　實方朝臣

二條院御時暁かへりなんとする人に

あけぬれとまたきぬ／＼になりやらて人の袖をもぬらしつる哉　二條院讃岐

題しらず

面影のわすらるましき別かな名残を人の月にとゝめて　西行法師

後朝恋の心を

又もこむ秋をたのむの鴈たにもなきてそかへる春の曙　摂政太政大臣

女の許にまかりて侍りて人々の御許より帰り侍りて

まてはかりしに帰りて　賀茂成助

難波てきよはかなしおき芝の露のやうにて消かへりなん

女のもとにまかれりけるにいれさりけれは　むなしく帰りて朝に

消かへりあるかなきかの我身かな恨てかへる道芝の露　左大将朝光

三条関白女御入内のあしたにつかはしける

朝ほらけおきつる霜の消かへりくれまつ程の袖をみせはや　花山院御製

法性寺入道前関白太政大臣家歌合

庭におふる夕かけ草の下露や暮をまつまの涙なるらん　藤原通經

題しらず

待よひにふけ行鐘の声きけはあかぬ別の鳥ハものかハ　小侍従

藤原知家

宮こハ又なつかしき別ともなきかな人にも縁し命なりけれ

西行法師

在明ハおもひいてあれや横雲のたゝよはれつるしのゝめの空

清原元輔

おほゐ河井せきの水のわくらはにけふハたのめし暮にやハあらぬ

なかく契りし人のあふかりしに侍けれハ

讀人しらす

夕暮に命かけたるかけろふのありやなしやととふもはかなし

西行法師すゝめて百首哥よませ侍りけるに

定家朝臣

あちきなくつらき嵐の声もうしなと夕暮にまちならひけん

恋乃部とて

太上天皇

さためなき人をまつのかりそめに秋のゆふくれいかにあかさむ月

水無瀬にて恋十五首哥合に夕恋といふ事を

摂政太政大臣

何ゆへと思ひもいれぬ夕たにまち出しものを山のはの月

宮内卿

きくやいかにうはの空なる風たにも松にをとするならひありとは

題しらす

西行法師

人はこて風のけしきもふけぬるにあはれに雁のおとつれて行

八条院高倉

待つ夜ふけし心のうちいかならんさもあらはれむ夢の松世の声

鴨長明

さそのかるく人もなかりの山よりもきえ(?)[illegible]八杉の[illegible]

藤原秀能

侍りし人に昔の事を申し出しけれは[illegible]

侍従と申しける　式子内親王

[illegible]やて侍らぬ様のなはいつくに[illegible]

京乃寺にてよみ侍りける　西行法師

[illegible]やと給ふ人の[illegible]

定家朝臣

人(?)乃[illegible]やくのなさしんまれはよかりける[illegible]の月

題しらず　よみ人しらず

君こひし[illegible]

人丸

[illegible]小山[illegible]君きて[illegible]

左大将朝光[illegible]て　樒[illegible]

きみひく枕の[illegible]

馬内侍

あふさかもやまとの[illegible]

天暦御時[illegible]

女御徽子女王

なき人の後世[illegible]

逢て後会ひかたき女に　坂上是則

霧ふかき秋の野中の忘れ水たえまかちなるころにもあるかな

三条院御乳母の[illegible]

[illegible]それそ

安法法師女

高圓乃秋風に萩の葉[illegible]
野へ次　中納言家持

足引乃山の[illegible]もしもみちて色やけ[illegible]
延喜御時
あつま[illegible]やの乱て[illegible]色や[illegible]
権中納言敦忠

しらいそ[illegible]袖[illegible]花[illegible]
百首うたの中
源重之

秋の[illegible]のはしも[illegible]人を[illegible]
野へしらを　安法法師女

[illegible]の下[illegible]
重之

山城のよとのわたりをかりにきて袖[illegible]
貫之

[illegible]人を[illegible]女[illegible]
文[illegible]女[illegible]
[illegible]男[illegible]
[illegible]女[illegible]
平貞文

いにしへ[illegible]の森の[illegible]我[illegible]
人[illegible]
鳥羽院御製

[illegible]
摂政太政大臣家歌合に寄[illegible]
前大僧正慈円

イ

うきたゝるしへさ歌の伊勢の作をかくさへハ又うきなから
女よりも見るハいかはまてしてそ後おもハれ
しらぬおほえまゆしてかいけはしけるを

左衛門督家通

つらしとハおもふものから恋しきハ我にかなはぬ心なりけり
身の心にて侍る女のもとへ申てつかはしけるこ
さらて久我内大臣詠はつかしければ
よみ人しらす

久我内大臣

うき身をハ我たにいとふいとへたゝそをたにおなし心と思はん
是事
義かハ詞にハ露もおもハしきえのうちの我身をむね
殊勝なるか

大納言

住ならへとてしかれ我もいかにおもハゝ思ふにこそハ人とこれも我なれ

殷富門院大輔

なにかいとふよもなからへしさのみやハうきにたへたる命なるへき

刑部卿頼輔

恋しなん命ハなをもおしきかなおなし世にあるかひハなけれと

西行法師

あはれとて人の心のなさけあれな数ならぬにハよらぬ歎を
身をしれハ人のとかとハおもはぬにうらみかほにもぬるゝ袖哉
女にいはれたるにや

皇太后宮大夫俊成

よしさらハ後の世とたにたのめおけつらさにたへぬ身ともこそなれ
色也

藤原定家朝臣母

たのめおかんたゝさはかりを契りにてうき世の中の夢になしてよ

新古今和歌集巻第十四

恋歌四

中将に侍ける女につかはしける

清慎公

しらくもにきえまかひてもありしかは人はいかにて袖のなこりを

むし

いふへくらむ

君とわれ思ひあかしのいとはいはかかるかは(?)まれ

中将滋幹しのひ侍りける女

ひとりこそ命をもおもひたえぬれなかなかあふよ

うしと事侍て後ゆるしてもとのやうに

て二日ありてつかはしける

謙徳公

わすらくはいつもいかにそ今宵しもなかなか恋しきことや

むし

直子女王　勝明親王女母

ゆふくれにしのひ(?)て別し袖のこころ（?）給(?)ふ

入道摂政久しくまうてこてびんかきて

出侍けるゆするつきの水入なから侍るを見て

右大将道綱母

たえぬるか影たに見えはとふへきに形見の水はみくさゐにけり

月のあかく侍りける比あらは後朱雀院

院御消息もなくて

陽明門院

うくなからいき別てあやなくあはぬ袖やはらましいまいて

題しらず

伊勢

いもの我のうきふしは世をおもひとけていまのうらみ(?)

右大将道綱母

吹風に付てもとはむさゝかにの
かよひしみちはそらにたゆとも

天暦御哥

葛の葉にあらぬ我身も秋風の吹につけつゝ恨つるかな

延喜御哥

露ばかり頼めし程のすぎゆけば消ぬばかりの心ちこそすれ

御返事

あさからず頼めし山の紅の葉のちるばかりに

女御返事

かへさでもとりて紅葉を見ゆるかな

女御徽子女王

いとゞしく秋の夜長の月を見て

天暦御哥

紅葉ばも人もみな散りて

女御の立ゐにけしき

朱雀院御哥

玉かつらみちはかはらぬものなれど

女御煕子女王

御返し

麗景殿女御

後朱雀院御哥

御返し

春宮のかくれさせ給ひて春柳にいとまなくてなむといひて帯

御返事　　女御藤原生子

春柳のいとはみだれぬものなれやいかでかはるのこゝろしらせむ

又かへし侍る　　後朱雀院御製

あをやぎのいとはかなくもみゆるかなたえぬこゝろとおもひけるかな

御返し　　女御生子

わきみよりわくこともなし春柳はみだれてのちもかなしかりけり

あやにくに女みなちかくおもひはかるの

日ころかくれけり　　實方朝臣

伊勢のあまのまてかたいとまなみながらへにける身のかひぞなき

くるしく　　いかにしら

つねよりもなほかなしきは秋の夜の月をみるにもまさる涙か

よそにのみきくはなにぞとおもひしに

天暦御時

あさくらや木の丸殿に月をみてわれはおもひのかなしかりけり

伊勢

かつらきや高間の山のさくら花はなのさかりにけふはきにけり

中務

いにしへは秋の夜の月をおもふにはまさりぬべくぞかなしかりける

躬恒

文月の山のはにいでゝ月をまつむかしの秋をこひつゝぞぬる

見る人もなき

わかるゝ人のつきせぬ月のかげもなくなりにけるかな

かの見えし月をながめて雲路の浦にゆきてこそみれ

人よはかりしきる　紫式部

今こはやなかりける月影をこハ乃ゑふさまらしきいる
もし
讀人しらす

ゆくてゆく山の端さふきくもりへの雲清月を
影しらと
藤原經衡

其かそて別し後の月影さ夜よふけくるかたやはせし
雨新乃ハともれぬ人よ絶へ行今そそてふ秋乃最中月
肥後

うき人の月はなかめのいかそおもひうるさらぬ哉
後徳大寺左大臣

月の影やうハ乃雲形見までてもいそてらふれ
西行法師

くれをあさむ人をおもへそてもえ月影
猶おもひてなかし宮城の月の影よいつかなみおもふらん
八條院高倉

くも晴しあしかれは月よ契りし人のおもひけ
百首歌乃中に
太上天皇

ワたつ海の男山神の村雨ふりはれて山乃月はおかりり
千五百番歌合に
摂政太政大臣

見る人の心きよいは伊勢の月の影さやかなる
我後をしませし神ややよ月にてして人乃影は見えぬ
権中納言公經

ぬるよの夜やのふくるまよ光さしけり秋や乃月影を
左衛門督通光

ほがくり色もり月とおもてそれにも中は秋のうき雲

右衛門督通具

いとほしき事は変なりて見るさへあらぬ月

有家朝臣

わすれじといひしばかりのなごりとてその夜の月はめぐりきにけり

題しらず　摂政太政大臣

おもひいでてよなよな月にたづねずはまてと契りし中やたえなん

家隆朝臣

ふるさとによそにはかりしなかそらの秋の夜ゐの月

法眼宗円

そのまゝに松の嵐もかはらぬをわすれやしぬるふけし秋の月

藤原秀能

人ぞうきたのめぬ月はめぐりきて昔わすれぬよもぎふの宿

八月十五夜和歌所にて月前恋といふ事を

摂政太政大臣

わくらばに待ちつる宵もふけにけりさやは契りし山の端の月

有家朝臣

こゝろあてにつれなくて待よひの涙にうかぶ月をさそらん

定家朝臣

松山と契りし人はつれなくて袖こす浪にのこる月かげ

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

ならひこし誰がいつはりもまだしらでまつとせしまの庭のよもぎふ

経房卿家歌合に久恋を

二条院讃岐

詠えてあはれはしらるゝ窓ならん たれかしる宿の庭のむら萩
摂政太政大臣家百首歌よみ侍りける
寂蓮法師
ふる人は後ち庭の雪のしたおれて樗まつほとも
野しらと
左衛門督通光
うちそよく神よくへ葉末かたなびく露のうへに
形見とてかのこゝ命して詠てなかし八首の庭の萩かな
藤原保秀朝臣
法橋行遍
名のかは庭のむらにゝ衣まて花のみえしも〔…〕
摂政太政大臣家百首歌合に
定家朝臣
かよ〔…〕神やこゝそふ秋〔…〕の露のあはれさ遠
家隆朝臣
風吹は嶺よりいれ雲はふおり名残の形見とみよ
百首歌よみ侍り時
摂政太政大臣
便りの木のほとしその色の雲間日落てそ梢見てま
千五百番歌合に
家隆朝臣
思ひいつよ花のゝてそのとよかん明日の雲の詠の山風
二條院御時聖書の歌よしくんに
刑部卿範兼
よそにのみ人の心の代なきしよい花ぞくさそ雲しける花
殷富門院大輔
野しらた
見しれあてつきらし霞よなをいまそれてあいねくせやるかな

西行法師

うとくなる人をなにとてうらむらんしられすしらぬおりもありしに

いまそしる思ひいてよとちきりしはわすれんとてのなさけなりけり

建仁元年三月歌合に逢不会恋の心を

土御門内大臣

あひみしはむかしかたりのうつゝにてそのかねことを夢になせとや

権中納言公経

哀なる心のやみのゆかりとも見し夜の夢をたれかさためん

右衛門督通具

契りきやあかぬわかれに露おきし暁はかりかたみなれとは

寂蓮法師

うらみわひまたしいまはの身なれとも思ひなれにし夕暮の空

宜秋門院丹後

わすれしのことの葉いかになりにけんたのめしくれは秋風そふく

家に百首歌合し侍りけるに　摂政太政大臣

おもひかねうちぬるよひもありなましふきたにすさめ庭の松風

有家朝臣

かくてさは恨とおもひし衣のよそにも秋風そ吹

題しらす

よみ人しらす

心にはいつも秋なるねさめかな身にしむ風のいく夜ともなく

西行法師

哀とてとふ人のなとなかるらん物思ふ宿の荻の上風

入道前関白太政大臣家の百首歌に

俊恵法師

我恋はいまをかきりとゆふまくれ荻吹風のをとつれてゆく

題不知　式子内親王

今はたゝ心のほかにきくものをしらすかほなる荻のうはかせ

家哥合に　摂政太政大臣

いはしきてやとや人の[illegible]松[illegible]のこゑ

前大僧正慈円

心あらは吹すもあらなむよひよひに人まつ宿の庭の松風

和哥所にて哥合侍しに遇不逢恋の心を　寂蓮法師

里はあれぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そふく

水無瀬恋十五首の哥合に　太上天皇

里はあれぬ尾上の宮のおのつからまちこしよひもむかしなりけり

有家朝臣

物おもはてたゝ大方の露にたにぬるれはぬるゝ秋のたもとを

雅経

草枕むすひさためん方しらすならはぬ野への夢のかよひち

和哥所の哥合に深山恋といふことを　家隆朝臣

さてもなほとはれぬ秋の夕は山雲吹風も峰に見ゆらん

藤原秀能

おもひ入るふかき心のたよりまて見しはそれともなき山ちかな

題しらす　鴨長明

なかめてもあはれと思へ大かたの空たにかなし秋の夕くれ

千五百番哥合に　　右衛門督通具

ことの葉のうつりし秋もすきぬれは我身しくれとふる涙かな

定家朝臣

消わひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの杜の下露

摂政太政大臣家哥合に

寂蓮法師

こぬ人を秋のけしきやふけぬらんうらみによはる松虫の声

前大僧正慈円

我恋は庭のむら萩うらかれて人をも身をも秋の夕くれ

太上天皇

袖の露もあらぬ色にそきえかへるうつれはかはる歎せしまに

定家朝臣

むせふともしらしな心かはらやに我のみけたぬ下のけふりは

家隆朝臣

思ひいる身はふか草の秋の露たのめし末やこからしの風

皇太后宮大夫俊成女

露はらふねさめは秋の昔にて見はてぬ夢にのこるおもかけ

摂政太政大臣家百首哥合に[illegible]恋

前大僧正慈円

心こそ行衛もしらね三輪の山杉の木すゑの夕くれの空

百首哥の中に

式子内親王

はかなくそ[illegible]花の名にや[illegible]

いきてよもあすまて人はつらからしこの夕くれをとはゝとへかし

暁恋の心を

前大僧正慈円

暁の涙やそらにたくふらん袖におちくる鐘の音かな

千五百番歌合に

権中納言公経

つくつくとおもひあかしの浦千鳥なみの枕になくなくそきく

定家朝臣

たつねみるつらき心のおくの海よ塩干のかたのいふかひもなし

水無瀬恋十五首の歌合に

雅経

見し人のおもかけとめよ清見かた袖にせきもる浪のかよひち

皇太后宮大夫俊成女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしはかりを待とせしまに

かよひこし宿の道芝かれかれにあとなき霜のむすほゝれつゝ

新古今和歌集巻第十五

恋歌五

水無瀬恋十五首歌合に

藤原定家朝臣

白妙の袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風そふく

藤原家隆朝臣

おもひいる身はふかくさの秋の露たのめし末やこからしの風

前大僧正慈円

野への露は色もなくてやこほれつる袖よりすくる荻の上風

左近中将公衡

恋わひて野への露とは消ぬとも誰か草葉をあはれとはみん

右衛門督通具

くれなゐは花にみなしは葉末そすゝむ人の露はいらぬに

家にて十首歌よみ侍りけるに

権中納言俊忠

秋の野にすゝむる色に我袖も露にぬるゝは思ふなるらん

題しらず

藤原道信朝臣

わかなりしおもひかとこそ君かいかにおもひませ袖の露

菅原元真

おほかたは我身そ露と消えぬへし清きけしきの

そのやく任の姫のかはりて男にかはりて

和泉式部

待ちしにもしらぬ葉末の露もけに露のおきところなき

そのかはりの事ありて女に代りてよめる

よみ侍りけるに

菅原長能

おきてみる露の清きを秋の野の花にやいかにおもひけん

菅原帙成によみ侍りし　よみ人しらず

うつろふやかはらぬ色の萩のはなにかゝる露おく

題しらず

藤原惟成

萩の葉や露のけしきもうつろふとおもひしほとにかはりぬるかな

題しらず

花山院御哥

秋の野にたつ我身にも涙の露はおきそはりけり

久しうまかりたる人に

光孝天皇

君ならて我手にかゝる涙の露の袖のぬれしそこく

題しらず

読人しらず

露のおきくらん袖かはかねは涙の河の瀬にうきわたる

みちのくにゝまかりける女に九月はかり
つかはしける

源重之

おもひやるよその村雲しくれつゝあたちの原に紅葉しぬらん

おもふ事侍りける秋のゆふくれによみて遣
侍りける

六条右大臣室

身にちかく来まさる秋かせハよそにおもひしを

題しらす

相模

色かはる萩の下葉をみてもまつ人の心の秋そしらるゝ

稲荷にまうてゝ侍りけるによみてはへりける

讃岐

冬すさひ社の瀬にうきてなかるゝ東ハ雨そふる

光孝天皇御哥

涙のうきいつるみはなれは涙のおなし秋そこれそなかる

坂上是則

枕のみうくと思ひし涙川いまは我身のしつむなりけり

よみ人しらす

おほえすも袖に湊のさはくかなもろこしふねのよりしはかりに

いとゝ袖に涙白妙の衣かへつゝそめる

逢ことのなきのかなみなくれは忘れぬるねよそなかるれ

浦さむくとしかの煙たえやらて思ひくらし風ふく

きえもしてまよふれとおもふ心のうつなはあらぬものそおもへる

うき為おもひ人かはえてとりまて桜ハふかき思ひそ

命よりおもきおもひにちきらしくらはかなくそあるへし

いにしへ小野小町ハなかし世の中に君の右まだへてつくれ
しこまでしきれ都人ハしあく其のさはまく年の名やまハ
みすしかハ水も年に流れしもんさんめりていうはしそみせし
山木の根くしかむの手ふくをていぬらしひなきせのかり
見ハわくらうぬらうおほせんいふも山雲ふくし地面ハ少し
中色よ主かの雲の清しをてかのけつなくて故や給さる
雲ののりそを山名のまゐしてまりうしおのハ俺つくのり
ひのハ来よりハむう向ひ山名の敷かりけり根ハあられたり
我こしかなるそくまる見られはしてれよ都の都をもちく

人丸

夏野ゆくをしかの角のつかのまも忘れて思へや
夜のまの露のまもきてすりぬらむ秋の袖のぬれけりなき

八代女王

禊するならの小川の川風に祈りぞわたる下にたえじと

清原深養父

うたゝねの夜の袖のかはかぬはまくらにふれてやならん

中納言家持ましけれいしあれ

山口女王

葦辺より満ちくる塩のいやましにおもふか君か忘れかねつる
ありしよにまたて浮よからぬ夜のうきて思ひあわせかり
歌よし御

赤染衛門

作りわねく見てしかなんうきてねの数ら猶いぶかしき人

参議篁

うらさびてねぬ夜はおもひ満ちてこのおもひよりも時雨てあるかし

伊勢

長の秋の夢にありつと見えつるはおもひもしらぬ人をまつ哉
盛明親王

春の夜の夢にだにしばしはくるゝ見てかりふあはれなる風
女御徽子女王

めぐり逢ふ夢はうつゝにかはるゝをてあはでさめぬる袖哉

長の秋女の詩によりて詠ませ給ひける
能宣朝臣

くりかへしねてあかしつる夢の内にも見てはゆく夢ならん

題しらず
寂蓮法師

涙川身もうきぬへき寝覚かなはかなき夢の名残はかりに

百首歌の時
家隆朝臣

逢ふと見て事ぞともなくあけぬなりはかなの夢の忘れかたみや

題不知
基俊

ゆかちかしあなかま夜半のきり〴〵す夢にも人の見えもこそすれ

千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成

あはれなりうたゝねにのみ見し夢のながき思ひにむすぼほれなん

題しらず
定家朝臣

かきやりし其の黒髪のすぢごとにうちふすほどは面影ぞたつ

和歌所歌合に逢不會恋の心を
皇太后宮大夫俊成女

夢かとよ見し面影もちぎりしもわすれずながらうつゝならねば

恋の歌とて
式子内親王

はかなくぞしらぬ命を歎きこし我がかねごとのかゝりける世に

心ふかき世の奥しらねく歎のうきそはかなき
崇徳院よ百首哥たてまつりける時
恋の哥　　皇太后宮大夫俊成
おもひわひ見し面影はさておきて恋せさりけん折そ恋しき
題しらす　　相模
あはれいそし恋に思ふよしもなくあはれ袖の涙はおもひ
男のくまてまてはゝ過ゆくかたなきをいかにまちてや
と侍りけれはよめる　　馬内侍
ほとゝきす八月よりけるなきてしのふらしきとりてんかなき
むかし見し人をこひつゝ世のなかのうきのみさかりける
こらしてたちはりつゝかなしくいひつゝ待かなれは

まてまちも思ひはてゝよ人心のつれなさてゆく人をこそ清き
こしよりも忘えぬ行末に物えたし知と小物語
よりあはれにはまゝそ　　藤原伸文
花さかぬ松のこすゑに松人のかるかにはおもひ知らん
名のくるまてまつ人は　　大納言経信母
なるほとにきえしそおも程しおもふさたにはしも人のこゝろ定めなき
忠盛物言ひ侍りける後くに遠く後つかはしける
とし月の昔をとりてもやしはてゝ待きわれらん
まてとよ　　前中納言教盛母
わかおもふ人のなかをつくしてもやもしまことも袖はぬれなん
題しらす　　皇嘉門院尾張
数しれおもひて人はたのもしこの世のいけるもなかりけり

和泉式部

いかにしていかにこの世にありへはかしはしも物を思はさるへき

深養父

うれしくハわするゝ事もありなましつれなきそわすれかたかりける

素性法師

逢事はかたえともふるさとへハ中ときつかとそのまん

小野小町

我身こそあらぬかとのみたとらるれとふへき人にわすられしより

能宣朝臣

うつゝやくらくもよるとみす岩橋のなかやたえなん

祭主輔親

伊勢の海ちひろのふかさそ我か中の水のちかひの絶すもあらなん

伊勢

おもひやるこゝろも山のはの松嶋てハつとよそめす

業平朝臣

おくれゐしわれもこふいかはかりきみか旅路ハはるかなるらん

梅乃花ちるを人よくとかなくそ我かおもふ人ハ薫衣せぬ

斎宮女御はなれにしきを

天暦御哥

わすれ乃原をよしとおもふおもひつゝたえて我ゆかん

小也し

女御徽子女王

歎えんをまつかゝてふるさとのかさし霧のうちにやみえし

乾ら次

光孝天皇御哥

おいせしてわかなつむのこゝのやまのおもひつゝ春にしけりか

女のかくれまかりけるをきゝて

兵部卿致平親王

君はやらぬをとめにさそひてつらきなさけはせやなさせぬ

題しらす

躬恒

雲ゐまてとひ山鳥のおもひかねかのみそなく

年の夜の長くしくれのまよふになきあへす

延喜御哥

今はなれやかにはなさてくる秋かなとこの人の春をまてとも

斎宮女御春はまかりおそくまいりけれはよめる

天暦御哥

春ゆきて秋まてやはおもへきみかうへの涙なりけるを

題しらす

西宮前左大臣

初雁のきなくこゑをきゝてもかひてなき侍らんはとしはへりける

中務卿のよしあきらの親王のみこの見侍らんはとしへりあける

藤原惟成

ほと見えて夜にはなかるゝしかもはるの月のかけのとふ

題しらす

藤原元真

君をこひよるはなかなかになきてねをのみそ

斎宮女御

あきはてゝいかにせよとかわれもまつ

天暦御哥

水のうへのはかなき数にかきまかふへき人の

よしもかなひとのゆへに

謙徳公

なき世のなかはいきてもいなくかひあるものなれ

権中納言敦忠

ひとを南にはけりける余りにそのおもひにしけるしるらん

藤原元真

世のうきて人のはかなき思ひにもさしきみしそおもひ絶れし

思ひてこそいれしまつ女の観きてはまくつき

参議篁

わ侍なれて

数ならぬはうきもしやは世の中に住くるしきものなき数き

題しらす

藤原惟成

今ならぬはおもふともつくもやはらそ思ひのなき

よみ人しらす

我よりは我とも月は白妙の袖のなかにも思ひそおもふ

はまはかりおもふより手枕や白妙の我身につくらん

手まくらにまちてまくねまつまちて恋しき独ねれん

逢ゆくはおほくるまて思ひそ空に紀かうまて

秋の日のかくもやの風のまへしらぬ我ははるかに待たれ鳴

若葉の野をなる境をそゆかぬはおもひを鳴きみそえ

海原よりおもふにたくこいにわかなくに根くのまへの波の飛

五十渡はうらさらくとき、ろにうつくの浦の舟から也と

けていく方は湊の浪しらまくまへてつかれ

新古今和歌集巻第十六

雑哥

入道前関白太政大臣家に百首哥よませ侍りける時立春の心を　皇太后宮大夫俊成

年くれし涙のつららとけにけり苔の袖にも春や立つらん

入道前関白太政大臣家に山家残雪といふ心をよみ侍りける　藤原有家朝臣

山陰やさらでは庭に跡もなし春ぞ来にける雪の村消え

円融院位さり給ひて後舟岡に子の日し給ひけるにまゐりて又の日奉りける　一条左大臣

あはれなり昔の人を思ふにはきのふの野辺に御幸せましや

御返事　円融院御哥

引きかへて野辺のけしきは見えしかど昔をこふる松はなかりき

大僧正行尊

墨染は袖の色こそかはるらめ同じ月日の光なりけり

菅贈太政大臣

谷ふかみ春の光のおそければ雪につつめる鶯の声

梅

ふる雪に色まがへて咲ける梅の花鶯のみやわきてしのばん

枇杷左大臣の大臣に成りて侍りける時よろこび申すとて梅を折りて　貞信公

おそくとくつひに咲きける梅の花誰が植ゑおきし種にかあるらん

延長のころほひ五位蔵人に侍けるを離れ侍りて朱雀院承平八年又かへりなりて昇殿ゆるされける日梅花を折りて見侍りて

源公忠朝臣

もゝしきにかはらぬ物は梅の花おりてかさせるにほひなりけり

梅の花を見給ひて

花山院御製

色香をはおもひもいれす梅の花つねならぬ世によそへてそ見る

上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅を見侍りて

大貳三位

梅の花なに匂ふらん見る人の色をも香をも忘れぬる世に

東三條院女御におはしける時圓融院常にわたらせ給ふを聞きて
侍るをとまりて侍らく梅壺の今めの御方へはへりける

東三條入道前摂政太政大臣

春霞たなひきわたる折にこそかゝる山へはかひもありけれ

御返し

圓融院御製

紫の雲にもあらて春霞たなひく山のかひはなにそも

柳を

菅贈太政大臣

みちのへの朽木の柳春くれはあはれむかしとしのはるゝかな

題しらす

清原深養父

むかし見し春は昔の春なから我身ひとつのあらすも成哉

堀川院におはしましける比閑院左大将の家の桜ををらせにつかはすとて

圓融院御製

垣こしに見るあた人の家桜花ちるはかりゆきておらはや

けるかし

左大将朝光

折にてや折りしやみやこの人も花桜おもふ此春は[illegible]

高陽院にて花のちるを見てよみ侍る

肥後

萬代をふるにかひある宿なれやみゆきと見えて花ぞちりける

二条関白内大臣

枝しみれども[illegible]花ちるこそ[illegible]

ぬべし

近衛司にて久しく成て後うへのをのこども大内の花見にまかれりけるに

藤原定家朝臣

春をへてみゆきになるゝ花の陰ふりゆく身をもあはれとや思ふ

最勝寺のさくらは鞠のかゝりにて久しく成にけるを其木年ふりて風にたふれたるよし聞えしかばをのこどもに仰て異木をその跡にうつし植させし時まづまかりて見侍りければあまたの年々くれにし春まで立なれにける事など思ひてよみ侍りける

雅経

なれなれて見しは名残の春ぞともなど白河の花の下かげ

建久六年東大寺供養に行幸の時興福寺の八重桜盛なりけるを見て枝に結び付侍りける

よみ人しらず

ふるさとゝおもひなはてそ花桜かゝるみゆきにあふ世ありけり

このうたは後徳大寺左大臣白河

の花見にはへりける所に侍りてよめる

源師光

伊さや又月日の行をもしらぬかな花のさかりにうつりにけれ

敦道のみこの許に前大納言公任の白川の家に
まかりて又の日みこの使にてつかはしける
侍りける

和泉式部

おる人のそれなるからにあちきなく見て我宿の花の香そする

題不知

藤原高光

見てもまた又も見まくのほしけれは花の盛はすきやしぬらん

京極前太政大臣家に白河院御幸ありてまたの
ての日花のうたつかうまつりけるによみ侍る

堀川右大臣

老ぬまてかきりなき世にみゆきの所華にもさきて見てや

後冷泉院御時御前にて翫新成桜花とい
ふをのこともつかうまつりける

大納言忠家

桜花折て見しにもかはらぬにちらぬはかりそしるしなりける

大納言経信

何となく桜かもちて雲のうへにあかぬてふる花かな

無風散花といふ心を

大納言忠教

桜花ちらさぬ風のおとなきや風のちからを世にまかすらん
名のある御覧して花ちる方はいかにかくして

三條内大臣に給はせける鳥羽院御哥

初しもはいのよしのの花さかりに侍りしはみなよにふりにき

世のかれて後百首の歌よみ侍りけるに花の
うたとて

皇太后宮大夫俊成

今は我よしのの山の花をこそ宿の物とも見るへかりけれ

入道前関白太政大臣家歌合に

春くれはなほこのよこそしのはるれいつかはかかる花をみるへき

同家百首の中に

照月も雲のよそにそゆきめくる花そこのよのひかりなりける

春のころ大宮にはへりけるに

前大僧正慈円

見せはやな志賀の唐崎ふもとなる長等の山の春のけしきを

題不知

柴の戸ににほはん花はさもあらはあれ詠てけりなうらめしの身や

西行法師

世中を思へはなへてちる花の我身をさてもいつちかもせん

東山に花見に侍るとて出れと誘ひける
を指合しありて留くはへりける

安法法師

身はとめつ心はおくる山さくら風のたよりにおもひおこせよ

題しらす

俊頼朝臣

桜あさのをふの浦なみ立かへり見れともあかす山なしの花

橘為仲朝臣みちのおくに侍りける時歌あまたつかはしける
中に

加賀左衛門

白浪のこゆらん末の松山は花とや見ゆる春の夜の月

おほろなる霞のうちもくもりなき松のくまより春の夜の月

題しらす　清原章清

世はいとふふかき奥のふるさとは[illegible]かなしからん

百首歌奉りし時　前大納言忠良

わきてなほ[illegible]表地に[illegible]

千五百番歌合に　有家朝臣

春乃雨のあまねき御代を頼むかな霜にかれ行く草葉もらすな

崇徳院にて林下春雨といふことをよみ侍りける　八条前太政大臣

[illegible]木高き[illegible]春雨に[illegible]

圓融院位さり給ひて後齋宮方[illegible]馬命婦[illegible]大井の[illegible]山吹の花咲く屏風乃上に色有[illegible]給ひて後よませ給ひける

實方朝臣

八重なから色もかはらぬ山吹のなと九重に咲かすなりにし

返し　圓融院御哥

九重にあらて八重さく山吹のいはぬ色をはしる人もなし

五首哥よみし時　前大僧正慈鎮

[illegible]

世をのかれて後四月一日上東門院太皇太后宮と申しける時衣かへの御装束奉るとて

法成寺入道前摂政太政大臣

唐衣花の袂にぬきかへよ我こそ春の色はたちつれ

返し　上東門院

かくしつゝかひわか春乃菊まいらせて花乃名をしる雨にそ

四月朔乃日もえし花散残りて侍りけるをその花
を使少将乃かたへつかはすとて紙にかき侍
りける

紫式部

神代にもありやしらす人櫻花名ふ乃ちるまゝになとも霞ハ
いはぬ乃すたれなく

禖子内親王

咲るその神山乃さくらはなのちりしもいかにと思ひて咲
左衛門督家通中将よ侍りける時条乃院にひとり
てとらふかと侍りて侍りける曉斎院乃女
房乃中につかはし侍りける

そらはいかなる物のあはれのものを見てかくれぬ
返し

左衛門督家通

哉かくれしきまなくみて代にはなき物に咲て物の心を
三條院御時五月五日菖蒲乃根似たる物乃
つくりて櫻の花のえたにさしそへて人乃参り侍
けるを見て題をしていはせりけるに
よめは

三條院女蔵人左近

梅のえにむさくらの菖蒲乃あやめもして咲けるとは
五月はわか菊のちかの道よりいとしろくにな
きの花さけるをいまなきの花をたゝとい
あかいふらふ

小弁

うらにもとまちしつゝいとゝそれか五月のさか
又月雨乃色ハあらく月わかく侍りけれ

赤染衛門

みる月のこゝろにしみる月数は涙乃雨八曇らるゝらめ

述懐百首歌中に月の歌とて

皇太后宮大夫俊成

有月雨八またや乃わかれ雨そ袖ぬらしけるもあかぬ袖

題しらす

花山院御哥

みちのくの宿のとこ夏わかれし涙乃露はおほえぬきら

贈皇太后宮よりかしこく春宮にかはりていつか聞ける

義孝久しく侍らけれハおもひなくしこの

花よりもさくなりしを

恵子女王

しら玉と露の消にしあとにもて思ひみし

月なくなる秋人の笛のねはてゝかくる

なれて夜かりにこゝろを中に残りしあり

和泉式部

ありふこそ秋乃空ハしてまさみてや月乃光みゆらん

題しらす

七條院大納言

思ひあまる露ハ袖よ置ふかくて秋の初を袖よしかまし

きさいの宮より内に扇まいらせられけるによみ侍りし

中務

神の浪吹くかせに秋をみ雲のうへにてしらせなかるへき

業平朝臣装束たまはりて侍りけるに

紀有常

秋やくる露やあはれとおもふまて涙乃ふる小袖有けり

わくらはにとはれし人乃かたそ袖

ゆきあらしふくかのゝうへも七月すゝしき月かけ
きえぬまゝくもゐにかくれて

忠親

かくあれはくもゐはるかにすむ月も雲にかゝれる入月影
見しよの寄とやまもる時の細き絲理をしろ
おもはゝおもへ世の世をもすゝしき心
まふおもひ立けり幾夜をともなひて

三條院御哥

月影の山のはにけてくもり見しく瀬世の我やらん

題しらん

藤原為時

山のはの夜ふけてまつる月を秋の夜のいくよすみけん

参議正光

あかつきの月よもすから人の許に帰り
里なから夜見あかしてこそ出なん

伊勢大輔

うき雲はらはれて世をはれて見る月の光もさえぬへき

返し

参議正光

浮雲にかくれてかくれ井の神をそ月の夜すからのかゝる

三井寺にてひさしくならはむとする時に人々よみ侍りける

刑部卿範兼

月はあとはかなくもなりてはてなき山の夜そかなしき
山里の夢覚てたる夜の人のなかにて

清原静賢

あはれなる人のまたれてやまのはにいてぬ明石の月

八月十五夜和哥所にておのこともうたつかうまつりけるに

民部卿範光

和哥のうらに家の風こそなけれとも浪ふく色は月にみえけり

和哥所歌合に湖上月といふことを

宜秋門院丹後

夜もすから浦漕舟はあともなし月そのこれるしかのからさき

題しらす

藤原盛方朝臣

山の端に思ひもいらし世の中はとてもかくても有明の月

永治元年譲位ちかくなりて夜もすから月を見て

よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

わすれしよわするなとたにいひてまし雲ゐの月の心ありせは

崇徳院に百首哥たてまつりけるに

いかにして袖に光のやとるらん雲ゐの月はへたてこし身を

文治のころほひ百首哥よませ侍りけるに懐旧哥とてよめる

左近中将公衡

わかやとはこえてなかりけり見しよの昔の雲の上の月

百首哥中に秋哥

二條院讃岐

しかはかりかはらぬ秋の月侍りてよせ袖にかはれる

月前述懐といふことをよめる

藤原経通朝臣

うき身にはなかめてかひもなかりけり袖にやとれる有明の月

石山にまうてて月をみてよみ侍る

藤原長能

都にも人やまつらん石山の峰にのこれる秋の夜の月

題しらす　　　　　雅経

深みゆくあかしはらに見し月のちるをこよひハなかめつる
月のあか月まつ秋のいろくはかりの
しはのとさしハなかやしそうかれしよかな

源通済

待ちし夜ハ秋くハおもひてし月の天のこゝ秋の夜もすから
夜深けて秋まて待ちれハ月の光を詠て

増基法師

わすれ草はこふかたちとも秋の風のおよはぬか
能宣朝臣身まかりて後国まかりけるにとまりて
女の許より夜中に帰りにけるなとこそ見侍けれ
侍りけれ
よみ人しらす

たひ山にかけまつちの山風にさそはれて秋風のいつく
百首歌奉りし時　　　　摂政太政大臣
月見てもひとりのみハそ杖のたよりにねにそ侍らん
五十首歌奉りし山家月といふことを
前大僧正慈円
山のはに月ハみるやとたくひにそうき世ハ末の葉もなし
摂政太政大臣左大将に侍りし時月歌五十首よみ侍けるに
世侍りけるに
わか物の月のゆくゑを詠くそ吉野の滝ハさくら
あるし家の歌合に山月といふことをよめる
藤原景清
山のはに光ちかしと松の木のまもかへハなかめの月

和哥所の哥合に深山暁月と云ふことを
鴨長明
夜もすがらひとりみ山の槇の葉にくもるもすめる有明の月
今都に住て侍しかは思ひ出てよめる

藤原秀能
あし山乃木の葉のうつり秋さへにとへし峯の雲をわけゆく
月まちは雲井の宿を立出て深山の嵐や身にしみける
山家乃心を詠侍りける　獻園法師
詠ればいぬる夜ふけのなかの山のはちかく出る月影
題しらす
花山院御哥
めつらしの月さへしるくさし出て人にしらせよなかなかなるを
伊勢大輔
五ぬ乃月まちしそかくはなくしるの雲の光を

和泉式部
ともしあかれ人まちせぬ我宿に五ぬの月の光をそかく
家にて月照水といふ心を人々よみ侍りけるに
大納言経信
住む人もあるかなきかの宿ならし蘆まの月のもるにまかせて
秋の比はまいらせて侍りけるを
なか文乃年秋九月十余日月くまなく侍りけるによみ侍ける
皇太后宮大夫俊成
おいぬやはまたもあふへき秋の夜の月をそこの世の月影にみる
題しらす
西行法師
月はそてしのふの侍りしの秋もはかくらあかくあらん

あきといへは月そ神なから昔の影をおもひいて其八
月の名によそへてくもりなきや影そいそきか哉せ八
ことしおもふ八千世をいのる我かみの秋の夜の月
かきくもる我身の影をおもひすてゝ月のなかめ哉なり
入道親王覚性
おもひしてなかしかれはやに筆とる心に月はうきもの
按察道經
秋の夜の月にいくたひなかめてうき世を年ふりぬるかな
寄月述懐
前大僧正慈圓
秋をへて月をなかむる身となれりいそちのやみを何なけくらん
百首哥中に
藤原隆信朝臣
めくりあひてみむことかたき秋はあまりかねて山のはの月
題しらす
源光行
しらし人かくこそ秋の月をみは何よりうき身のおもひそへまし
千五百番哥合に
二条院讃岐
身のうさに月やあらぬとなかむれは昔なからの影そもりくる
寂超法師
世をそむくしるへともなれ月をみていつくにすまむ月のよをしく
まよひか
こゝの月をしのふに袖ぬれてさやかにみえしゆくへたつねき
山里にて月のよに影そそふらむかけにみえしに
何なきん
大納言
あこおもひきてる高しとしらしや月よみるらん人のみぬらん
惟明親王
長月のありあけの山里にまつ門に
くはしきもの

おもひやれ何をしのふとなけれとも都おほゆるありあけの月

返し　式子内親王

ありあけのおなしなかめは君もとへ都のほかも秋の山里

春日社歌合暁月といふことを

摂政太政大臣

あまの戸をおしあけかたの雲まより神代の月の影そのこれる

右大将忠経

雲をのみつらき物とてあかす夜の月やこすゑにをちかたの山

藤原保季朝臣

入かたよしはし山のはのやすらひてかくれはてぬる月のおしさよ

月わか参議定家朝臣

事とふも暑き月かけ

そらくもる秋のよなよな月のかけ

かしまつ

清輔朝臣

ありくそへさは月のかけやかくれ

寂蓮法師

有明月を

なかめつゝの月の事ともありあけの

遍照寺にて月をみて

平兼盛朝臣

すたきけむ昔の人ハなくなりて宿るもの人ハ在明の月

あはれそへて侍りける人の詩よ

よそれ人ハ侍りよもかへくわふわすれぬ

月の哥とてよみ侍ける　前大納言忠良
八重しくる宿には人もなしはれゆく月の影そさしくる
題しらす　神祇伯顕仲
かきくもりうちしくれぬる中つかさに秋ふけて月の影さけ
俊恵法師
難波かたしほ干にあさるあしたつも月かたふけは声のうらむる
和哥所の哥合に海辺月と云事を　前大僧正慈円
和哥の浦に月の出しほのさすまゝによるなく鶴の声そかなしき
もしほくむ袖の月影をのつからよそにあかさぬすまの浦人
藤原秀能
明石かた色なき人の袖をみよすゝろに月もやとる物かは
熊野にまうてて侍しに切目宿にて海辺
眺望といふ心をおのこともつかうまつりしに
具親
なかめよと思はてしもや帰るらん月待浪のあまのつり舟
八十にあまりて後百首哥めしゝによみてたてまつりし　皇太后宮大夫俊成
しめをきて今やと思ふ秋山のよもきかもとに松虫のなく
千五百番哥合に
あれわたる秋の庭こそ哀なれましてきえなん露の夕暮
題不知　西行法師
雲かゝる遠山はたの秋されはおもひやるたにかなしき哉
五十首哥人々によませ侍ける時述懐の心をよみ侍ける

百首歌に　　　守覚法親王

さらてしもあれ嵯峨の野の秋風に小萩が原に露ぞ落る

寄風懐旧といふことを

左衛門督通光

あさぢふや袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を吹嵐かな

皇太后宮大夫俊成

葛の葉のうらみにかへる夢の世をわすれがたみの野への秋風

題しらず

祝部成仲

白露も夜半にきえし松虫のかれわたる小萩がもとにしき世

法成寺入道前太政大臣女郎花をおりて歌よませ侍しに

紫式部

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

返し

法成寺入道前摂政太政大臣

しら露はわきてもおかじ女郎花心からにや色のそむらん

題しらず

曽祢好忠

山里に葛はひかゝる松垣のひまなく秋は物ぞかなしき

秋の暮身にもあまれる事を歎くしかなき命なるらん

安法法師

としごとの秋の風はよそにきゝつれど萱の露[illegible]

頼綱朝臣津守にて侍りけるに

つかはしける

前中納言匡房

秋のくるつゝ山のはにかゝる夜の月ながめられつゝ

九月ばかり小侍従が宿にまかりて侍りけるに

大蔵卿行宗

花もなき秋のしら露はおもひおきし事もなくておく露の歌

宮まもり給ひける頃の風をよみ給ひける

納言題長を詠ませ給ひける　後徳大寺左大臣

夜はすがらふかきあらしにさそはれて秋はながきや枕のしたき

題しらず　前中納言顕長

世の中よ秋はてぬれば…かはりゆく

清涼殿の庭に植ゑ給ひし菊をいたはり給ひ

侍ひけるに　冷泉院御製

物おもふ人の袖の秋のはれぬは…の露

長月の…の花のさかりに

源順

守のとの花の袖の…

題しらず　読人しらず

山川の岩ゆく水もこほりゐてひとりくだくる…

百首歌奉りける時　大納言…

野…汀のおもかげ…

寛勝四天王院…　藤原家隆朝臣

君が代はちよの…深きの…

元輔…

…

赤染衛門

…

いかにやとおもひくらへて雲のあたりにたゝし

霞の衣宿かすしらくたつ梅の白雲はかりにをりしけや

雪よふりて述懐のこゝろをよめる

皇太后宮大夫俊成

松山や梢をおもふ雲とはに君まちえぬあをきさ竹の我なくしか

佛名のあしたよみ侍りける花によめる

崇徳院御製

時ありて霰のふりし花ちりてさらにむかしにかへるとそきけ

花山院おはしましける人の年頃侍りけるに

侍りけれは

前大納言公任

かくしつゝ思ひのほかにちりてその世をしのふ花の色

返し

御形宣旨

たえす君かはる世をそむかむといはむ物をひとしれぬ花のなき

題しらす

皇太后宮大夫俊成

花ねとも人をしのはむ年に涙のあはれをしる

慈覚大師

おほかたは木の間の月にあかすなりし我身まてそ惜のあはれなる

新古今和歌集巻第十七

雑哥中

朱鳥五年九月紀伊国行幸時　河嶋皇子

白浪乃浜松か枝のたむけくさ幾世まてにか年のへぬらん

題しらす　式部卿宇合

山城のいはたのをのゝはゝそ原見つゝや君か山路こゆらん

在原業平朝臣

あし乃屋のなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけり

はるゝ夜の星か河への蛍かもわかすむかたのあまのたく火か

読人しらす

志かの海のしほやくけふり風をいたみたちはのほらて山にたなひく

貫之

難波女の衣ほすとてかりてたく芦火の煙たゝぬ日そなき

なからの橋をよみ侍ける　忠岑

年ふれはくちこそまされ橋柱むかしなからの名たにかはらて

恵慶法師

春の日のなからの浜に舟とめていつれか橋ととへとこたへぬ

後徳大寺左大臣

くちにけるなからの橋を来てみれは芦の枯葉に秋風そ吹

題しらす　権中納言定頼

おきつ風夜はにふくらし難波潟暁かけて浪そよすなる

春深ミの戸まは渡りてゆかん

藤原孝善

しかまの浦におきつるわたしはいかにせよとて霞よそになすあまの釣舟

天暦御時屏風哥　壬生忠見

秋風の関吹こゆるたひことにこゑうちそふるすまの浦浪

五十首哥よみてたてまつりしに

前大僧正慈円

すまの関夢をとほさぬ浪の音を思ひもよらて宿をかりける

和哥所の哥合に関路秋風といふ事を

摂政太政大臣

人すまぬ不破の関屋の板ひさしあれにしのちはたゝ秋の風

明石の浦をよめる　俊頼朝臣

あまを舟とまふきかへす浦風にひとりあかしの月をこそみれ

眺望の心をよめる　寂蓮法師

和哥の浦を松の葉ことになかむれは梢によするあまの釣舟

千五百番哥合に　正三位季能

水の江のよしのゝ宮は神さひてよはひたけたる浦の松風

海辺の心を　藤原秀能

伊勢ふもとみしをてもいそきぬる塩屋のけふりのたつ

しまとの舟にのりてくもり帰て大あられ

うらみさせ給ひて　女御徽子女王

おほよとの浦にたつ浪かへらすは松のかはらぬ色を見ましや

大弐三位里に侍りけるをきこしめして

後冷泉院御哥

待人は心ゆくともすみよしの里にとのみは思はさらなん

はるし

大弐三位

住吉の松はまつともおもひえて君か千世にはあらたまる哉

教長名所哥よませ侍ける

祝部成仲

うらゝかす浪の音して立よる吹上の浜の秋の浜風

百首奉りし時海辺の心を

越前

かよふ風吹しほやさゝ浦の海士のとまやにたへぬ波かな

海辺霞といふ心をよみ侍し

家隆朝臣

見わたせは霞のうちもかすみけり煙たなひく塩かまの浦

太神宮にたてまつりし百首哥の中に

わか出侍ことよめる

皇太后宮大夫俊成

ふるさとやいそのゆふしもしん伊勢嶋や一志の浦の海士のとま

伊勢にまかりける時よめる

西行法師

鈴鹿山うき世をよそにふりすてゝいかになり行わか身なるらん

題しらす

前大僧正慈円

世中を心たかくもいとふかな富士の煙を身のおもひにて

西行法師

風になひく富士の煙の空にきえて行衛もしらぬわか思ひかな

東のほりけるに浅間の山に煙のたつを

みてよみ侍ける

業平朝臣

河せなき山ハ柳の緑ハ川となりそらのこほりつゝ雪の降らん

題しらず　在原元方

春来ぬと人ハいへとも山里ハもとし人やおそくしるらん

五十首歌奉りし時　前大僧正慈円

花ちらて月ハくもらぬ世なりせハ物を思ハぬ我身ならまし

題しらず　西行法師

よし野山やよひそらにおもふなく花ちりかゝる人やまつらん

藤原家衡朝臣

わけいりてしはしみるへき世(しおり)をもちら吉野のおくの花の雲

五百首歌合に　右衛門督通具

一よさのなかはハ花そ枕のうへにふくらん風のおとハ

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

閑居聞納涼の心を　有家朝臣

谷のとにかよひこしかたの松の上にまたみる月の影も風そふ

鳥羽にて歌合し侍しに山家嵐といふ心を　宜秋門院丹後

山里ハ世のうきよりも住わひぬことたえはてぬ峯の嵐に

百首歌奉りし　家隆朝臣

岩の苔松のあらしにおきいてゝうらみはかなき人の袖かな

題しらす　寂蓮法師

おくしきあらしの袂にふる露ハ法の色にも霧のたえま

中将高光横川にのほりてかしらおろし侍りにけるをきゝてつかはしける　権大納言師氏

おく山のこけの衣にくらへみよいつれか露のおきはまさると

返し　　　　　　　　　　　　　　如覚

白露のあしたゆふべにおく山の苔の衣は風もさはらず

能宣朝臣大原野にまうでて侍りけるに宮の下部
あやまちしたりとてかへりぬなからん人の宿
ぬけてうこけ里よりもしたがひて侍りければ

　　　　　　　　　よみ人しらず

世中をそむきにとてはこしかども猶うき事は大原の里

返し　　　　　　　　　　　　　　能宣朝臣

かばかりの山とおもひていりければゆく人のいさめ

此歌は山すみ侍りける比ひし者許に為編り
うらきりふぐりのあひらてけ侍りけるを

是ハ端にて書たる歟

　　　　　　　　　　　　　　　　恵慶法師

さびのかかりて青はまでて君がけて増深山の道の露さ
しかれ住まんとて也

わきもてて風けりける苔の庵に我はかくして露ならし

題しらず　　　　　　　　　　　　西行法師

山ふかくさこそ心はかよふともすまで哀をしらんものかは

やまざとにうき世いとはむ友もがなくやしく昔かたらん

山家送年といへる心をよみ侍りける

　　　　　　　　　　　　　　　　寂蓮法師

たちいでてつま木おりこし片岡のふかき山路と成にけるかな

住吉歌合に　　　　　　　　　　　太上天皇

おく山のおどろがしたを分てみちある世ぞと人にしらせん

百首歌の時　　　　　　二條院讃岐

おのづから恋しくなれ見えこそも山人はなれとせで年を経ぬらむ

山家松といふことを　　皇太后宮大夫俊成

今はとて爪木こるべき宿の松千代をば君となほ祈る哉

春日歌合に松風といふ事を　　有家朝臣

我ながら思ふか物をとばかりに袖にしぐるる庭の松風

山寺に侍りけるころ　　道命法師

世をそむく所とかきく奥山は物思ひにぞ入るべかりける

少将井尼大原よりいでたりと聞きてつかはしける　　和泉式部

世をそむく方はいづくもありぬべし大原山はすみよかりきや

返し　　少将井尼

思ふことおほ原山のすみがまはいとど歎きの数をこそつめ

題しらず　　西行法師

誰すみて哀しるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空

しをりせで猶山ふかく分いらんうき事きかぬ所ありやと

殷富門院大輔

かくしつつ嵐を山のともとして哀とぞおもふ松の門

法輪寺にまうで侍るに人のまうできて暮ぬとていそぎ侍りければ　　道命法師

住ばとなきこゑて嵐の山に暮ぬとも人のいそぐなるらん

後白河院栖霞寺におはしましけるに駒ひきのひきわけの使にて参りけるに　　定家朝臣

清瀧の山に世のうきみちはなとせし又露もらぬかのは月のかけ

歌事侍りける　知足院入道前関白太政大臣

ゆかし川のおなしなかれをたつねきて赤染かもとにて尋ねしや

冬のよの大ねをかさねて歌事侍りけるに

右大臣しりて参り侍りける

東三條入道前攝政太政大臣

ちる紅葉しらなみ代々に宇治川のあしろに歌あらは

同融院御詞

しらまそにせよ何乃とかなかれしらすと何かせん

題しらす　人丸

ものゝふのやそうち川のあしろきにいさよふ浪の行ゑしらすも

布引の滝にまかりて　中納言行平

我世をはけふかあすかとまつかひの涙の滝といつれたかけん

京極前太政大臣布引の滝見にまかりて侍りける

御供し　二條関白内大臣

水上のそらにみゆるは白雲のたつにまかへる布引の滝

最勝四天王院障子に布引の滝かける

所　有家朝臣

久かたのあまつをとめか夏衣雲井にさらす布引の滝

天の河をよませて　攝政太政大臣

しるしらぬ川を読て詠めとなしにしそ

題しらす　實方朝臣

天川かよふうきゝに事とはん紅葉の橋はちるやちらすや

堀河院御時百首ニたてまつりける

前中納言匡房

枝の梅にほひそめしより盛なる花の世へ(?)なれてしられ(?)

天暦御時屏風に

しはすのつこもり　　中務

ゆくとしのをしくもあるかなますかゝみみるかけさへにくれぬとおもへは

題しらす　　前大僧正慈円

山里にひとりなかめておもふかな世にすむ人の心つよさを

西行法師

やまかつのすむ世にこそみなかみもゆくへ有(?)

山さとは人こそとはぬとおもふにもとひくる事もうとくなりぬる(?)

前大僧正慈円

草の庵いとひてもまたいかならんつゆのいのちのきえんとき(?)

起き出てみれはしくれもよなよなは(?)あきのよの

とも(?)…

ましてなかなか人のとはぬ(?)…

さらに(?)…けん人の…

は(?)…

安法法師

ましてこ山の南の杉せまにきゝつゝも…

西行法師　百首歌よみ(?)…

住なれし苔の袂にさらぬ山路の月のかけ(?)

家隆朝臣

百首歌よみけるに山家のこゝろを

式子内親王

とはれぬ身の…松の戸に…

小侍従

摂政太政大臣

捨かねし山路の露にゆきまよふ暁おきの袖深のうへて

ひとり寝の人ハふとはぬ山路にて宵ハまよひかねけり

五十首歌中

雅経

新やとし露乃こほり成ける草にやとりて物の思ひ

俊恵法師身にかはりて後よとし

あらき宿の木末にかゝる身の詩はなけれとも

賀茂重保

捨もせてやくへからき身の此頃のおもき誰か出ん

老後花の園おもふ山寺にまかりこもりけるに

寂蓮法師にて物かたりけるの僧

住あらして窓まかくしのさへからぬ後そかたく

て行べきは

西行法師

やまかはおもしくあとはて住あらし

山家哥あまたよみ侍りし

前大僧正慈円

山里にかよふのしくさはしきにはひたちのやまのはれ

後白川院かくれさせ給て後百首哥に

式子内親王

そのえのくらしもしけるはをかれとありしにあはれ

述懐百首哥よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

いかさ人磯の菌生にもおくれの行ぞかへらん世の中は

[illegible]

祝部成仲

[illegible]

題しらす　　前大僧正慈円

[illegible]

西行法師

ふるはたのそはのたつ木にゐる鳩の友よふ声のすこき夕暮

山かつの片岡かけてしむる野のさかひにたてる玉の小柳

[illegible]

[illegible]

三井寺焼て後住侍ける坊を思ひやりて

大僧正覚円

住なれし我古郷はこの比や浅茅か原にうつらなくらん

百首哥読侍けるに　　摂政太政大臣

ふる里は浅ちか末になりはてゝ月にのこれる人の面影

西行法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

貫之

[illegible]

西院遊[illegible]

[illegible]

[illegible]

能因法師

[illegible]

わしみにて高代　恵慶法師

ふしみをはいやしてそ忘れける菅原の苔はおき

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに閑居

の心を　定家朝臣

わくらはにとはれし人もむかしにてそれより庭の跡ハたえにき

物へまかりけるみちに山人のわらひおひてあるを

見て　赤染衛門

おもき荷を身にかへてもよそにみる道うき世中にすみわふる人

題しらす　人丸

秋されはうつろへこし新田山そらにしられてよそに見しそれ

天智天皇御哥

あさくらや木のまろとのにわかをれは名のりをしつゝゆくハたか子そ

新古今和歌集巻第十八

雑哥下

山　菅贈太政大臣

足曳のこなたかなたに道ハあれと都へいさといふ人そなき

日

あまの原あかねさしいつる光にハいつれの沼かさえのこるへき

月

月ことになかるとおもひしますかゝみ西の浦にもとまらさりけり

雲

山わかれとひゆく雲のかへりくる影みる時ハなをたのまれぬ

霧

霧たちて照日のもとハみえすとも身ハまとはれしよるへありやと

雪

花とちり玉とみえつゝあさむけは雪ふる里そ夢にみえける

松

君ならてたれにかみせむ植そめし我宿の松のみとりしきをは

野

はるの野の若菜つむとてゆく人ハ[illegible]

道

ふる[illegible]やの関守ハ人にゆるさぬ道のまくら

海

海はらに月てらす水のそこまても[illegible]まきのハ月そ照らん

河[illegible]

さゝ浪の[illegible]

波

あられふる白波や[illegible]

題しらす　　読人不知

はるの山せの浦[illegible]袖にかゝる

よそにのみ[illegible]

千五百番歌合に　　摂政太政大臣

あまのはら波の下[illegible]

題しらす　　前中納言定房

ちとせ[illegible]

増撰上人

[illegible]

人丸

あしかもの行く入江の水の江の世にすみかたき我身なりけり

能宣朝臣

河鴨の羽色よりしく浮草定なき我はなりけん

あふさきの松といふ事をしりけんな

順

もなかにうき身の松のふるみちは己かれ(?)をよそにやみる

山水をむしといふくしりん侍ける

能因法師

足引の山下水の影みまくかはゆかしき我身にかけ

わすれなる程に思ふへはうらみくは侍らと

とて

清蔵寺入道前摂政太政大臣

あはれなく花の袂にたちよりて其の夜にそのそてに侍

きくたにそゝろ絶いにしへ冷泉院の御さい

の宮のはじめいとこそくちをしくて

なお家のうらみもとてまつらせとて

東三條院

その方の玉かつらうらみてはうらみなむとたのまし

冷泉院太皇太后宮

行末しせぬ君の子にまさしうおもひそめこし神の

上東門院御家のうちにこそ松のこやすそくと

うちへのこゝろ人のこゝろへくゝ梅の

根よ待あてそをてまちもしれきれ

枇杷皇太后宮

かつくしも我の袖はちかにや露やらぬそをしくまゝりん

返し　　　上東門院

まつらん夜のまにさへおもひやるかなしきことのおもひしられて

題しらす　　　和泉式部

あかつきのふしみのうらにあけぬれは我身のうさもいひしらぬかな

屏風の絵にあかつきのうらかきて侍りける　　　一條院御製

いふしのうみやゆきとふりねん人をまつとあかつきの浦

少将高光横川にのほりてかしらおろし侍りけるときゝ給ひてつかはしける　　　天暦御製

都より雲の八重たつおく山のよかはの水はすみよかるらん

御返し　　　如覚

もゝしきのうちのみ常に恋しくて雲の八重たつ山はすみうし

世をそむきて小野といふところにすみ侍りけるころ業平朝臣の雪のいとたかうふりたるをかきわけてまうてきて夢かとそおもふとおもひきやとよみ侍りけるに

　　　惟喬親王

夢かともなにかおもはむうき世をはそむかさりけんほとそくやしき

都のほかにすみ侍りけるころ内の御さしの事蓮宮かさ
よりけるに給はりける　　　女御徽子女王

雲ゐるとふ尾上の松の葉にそへていつきのみやの名はふりにけり

亭子院おりゐ給ひてしはしありて秋のころ　　　伊勢

白露ハをきてかはれと百敷のうつろふ秋ハ物そかなしき

殿上をはなれて侍りける

藤原清正

あまつ風ふけゐの浦にゐるたつのなとか雲井にかへらさるへき

二條女院菩提樹院におはしましてのち

むかしをおもひいてゝ大納言経信かまいりて侍

りける又の日女房のもとにつかはしける

返し　人しらす

よそのなまて雲のかよひちふみや霞にて君やたつねん

最勝四天王院障子に大淀かきたる所

定家朝臣

おほよとの浦にかりほすみるめたに霞にたえてかへるかりかね

家隆法師千載えらひてたてまつりける時

織よ書ともかきそへつかはすとてかき

あはれなるこのことのはをおもひきやかきとめて侍

けり　返し

後白河院御哥

濱千鳥ふみをくあとのつもりなはかひあるうらにあはさらめやは

上東門院高陽院におはしましけるに行幸侍て

せき入られたる瀧を御覧して

後朱雀院御哥

瀧つ瀬の人の心をみる事ハむかしに今もかはらさりけり

権中納言通俊後拾遺えらひ侍りけるころ

まかりゆかしくおもひて侍りしかはおかせて

しるしてまゐらせよとてつかはしける

給ハらて返しけれハよみて

周防内侍

わかぬるハそこなる夢相何をしへ入しおもふ孫子ねさ
祈筆と作られたる道ハ忠峯かしく成あり
かくそてもらけり男りきはれあん

壬生忠見

その葉の中をなく鳥か道ハ昔の人よあいこつうか
遊女の名を續ぐ給ハりて　藤原為忠
むかしねてこうひのぬ相とはやおもハるかへそれこなし
石峯周りして頂上ゆり降りて草ゆうきま
りよかりて祢しきつとこて

赤染衛門

草むそてさらのうち神のうち神代ほ後と露の露を背て
秋のころまてハまかおこらて咲とくと
ゆきひあるへきまじら　伊勢大輔
うれさハげにもやはしら恵草ものうらばら秋のゆふれし

返し

大納言経信

萩せの盛せさらせハ白露のわのこのてよう露まや立
あるすまてハ給ハれと朝光大将へかへしてよ
からとる返答して返て又の日

左大将済時

恵草いまる露か花咲らんらるハ秋ふかみなりり

返し

左大将朝光

おきちふと露さらせハ恵草ありハあさきみも露と云ふや

よそにのみ人のうへとや侍りける
見えしらに

かくて年を思はぬ露の身のいとゞはかなき事をこそ思へ
くて

小馬命婦

露の身の消えん我こそ哀なれ森の下草

和泉式部

題しらす

命にもあはれとおもふ身のはてと思ふ人のなきぞかなしき

またいかなる事侍りける時にか露けさま
のたまはせ侍りけるに申て侍りける

大僧正行尊

何をかはしるしにせまし消えん我身をも恨みんとぞ思ふ

五十首歌よみ侍りし時

前大僧正慈円

世中はかりの宿とおもへどもうきにはなれぬ我身なりけり

まといかなる事侍りける時にか侍りける

あさましき我身の行へのこの世には何をかたのみ思ひ捨てけん

題しらす

大僧正行尊

くりかへし我身のとがをもとむれば君もなき世にめぐるなりけり

清原元輔

あはれいかにうき世にふるにしのぶ草今そ老せぬ身をなげくらん

読人不知

をしむとも命のかはりにはなげくとも猶なぐさまぬ身にこそありけれ

延喜御時女蔵人内匠白馬節会見けるに車より
紅の衣いだしたりけるを検非違使の
とがめければいひつかはしける

女蔵人内匠

おほかたは昨日の冬をいそぎてしわかれのしもにぬれし袖かな
くもりなきたびにたどるなりけり

周防内侍

まちわびてうれしきはよそにつけてもそへく
見えけむ

こしかたの空をなかむせは裏さえて涙のこほりしらず

題しらず

前大僧正慈円

思ひ知る世をこそ人のそむきけれ我や我をもすてぬなりけん

西行法師

惜しからぬ身をいかにせんかはらぬ人のすまひなりけり
あはれなる身のこゝろにもまかせてはのちの世まてのおもひなりけり
年月をいかで我身に送りけん昨日の人も今日はなき世に
うけがたき人の姿に浮かび出でてこりずや誰もまた沈むべき

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

寂蓮法師

そむきてもなほうきものは世なりけり身をはなれたる心ならねば

述懐のこゝろをよみ侍りける

身のうさを思ひしらずはいかゞせんいとひながらもなほすぐる哉

前大僧正慈円

何事を思ふ人ぞと人とはゞこたへぬさきに袖ぞぬるべき
いつまでか事やなきの捨人とけふはみるらん身の憂さを
こちらぬ世を身にかへてみん

和哥所にて述懐の心を

山里にちぎりしいほやあれぬらんまたれんとだにおもはざりしを

右衛門督通具

神よもき露かいかなるこ恵みてゆく月やなかきらん

定家朝臣

君か代にあはすハ何を玉の緒のなかくとまてハおしまれし身を

家隆朝臣

おほかたの秋の寝覚の長き夜も君をそいのる身を思ふとて

和哥の浦や沖つ塩あひにうかひ出るあはれ我身のよるへしらせよ

その山と契らぬ月と秋をてらさむ神よ露不行

雅経

君か代にあはすは何をたのみてか身をなほ世に住むさくら色

皇太后宮大夫俊成女

おしなへて海の月にてらされてなみの神かき秋ふかしけれは見えて

五百番歌合に　　摂政太政大臣

うきしつみこし世はさもあらはあれさてもまつこそ人の袖なれ

題不知

我かくて八十のなからへこそすれ世をのかれてこそ我

五十首哥よみ侍りけるに述懐の心を

守覚法親王

なからへて世にすむかひはなかりけりうきにかへたる命ならねは

権中納言兼宗

よ我なからなにおもひしかとたのみしもみをいとはしと思ひけれ

述懐の心をよみ侍りける

左近中将公衡

待やらぬ我身そはかなきことを思ふにかへる道そゆかしき

題しらず　　よみ人しらず

うきなからあれはある世にふるさとの夢をうつゝにさましかねつゝ

源師光

暮るまておしみし命あるならはこの世とてなとかなしかるらん

賀茂重保

ゆめとしも歎しことの行末て[illegible]世を[illegible]らん

[illegible]長延

いとくとてやかれぬ世中と思ふ我身そうかりける

入道前関白家百首哥よませ侍けるに

刑部卿頼輔

川舟ののほりわつらふ綱手縄くるしくてのみ世をわたるかな

題しらず

大僧都覚弁

老らくの月日はいとゝ早瀬川かへらぬ波にぬるゝ袖かな

よみ侍る百首哥を源家長か許へつかはすとて

[illegible]

藤原行能

いかにせん[illegible]山川の水

身の[illegible]思ひ[illegible]

[illegible]

鴨長明

題しらず

[illegible]

源季景

[illegible]

西行法師

侍従の母くだりて後はつくしにまかりて[illegible]
月の行山のはを選りてやまのはの[illegible]
前大僧正慈圓
五十首哥中に
おりふしもかゝるべしとはおもはねど[illegible]
いふしていまさらに世は立鳴の[illegible]
西行法師山里に住侍りけるに出家し[illegible]
その月はふかくて[illegible]
うき世をば月[illegible]
前僧正全真西國へまかりける[illegible]
けるに
葉仁親王
人[illegible]
前大僧正慈圓[illegible]

[illegible]
前右大将頼朝
みちのくに[illegible]
帯の[illegible]
大江[illegible]言
題しらず
清慎公
道芝の[illegible]
皇嘉門院
あふ[illegible]やく[illegible]
権中納言資實
し[illegible]方[illegible]
杉の木[illegible]

性宣上人

みなせ河松かふるき世中にはふしもしるしてたえぬ我代

題しらす　俊頼朝臣

ねるとてもよに代の代の代の代にしてかはらぬものはかけなりけり

皇太后宮大夫俊成

うきなから久しくよにもふるものはやまさる松のあらしなりけり

春日社哥合に松風といふ事を　家隆朝臣

春日山谷のむもれ木くちぬとも君につけこせ峰の松風

宜秋門院丹後

おふしたつくまは渡れる神のやしろの松は君か世にしか(?)ふ年かはりてみるか

女御徽子女王

えらひかへしあかりてわか世中に神代の御ちのはなとしめせん

臨時祭舞人にて侍りけるを後祭日よみ侍りける　實方朝臣

衣手の山井の水にかけ見えしなほそのかみの春そこひしき

道信朝臣

いにしへの山ゐの衣なかりせはわすらるる身となりやしなまし

後冷泉院御時大嘗會にひかけのかつらを
資業朝臣のもとにつかはしける　先帝

しもけの思ひしとくやみつかしなれ

加賀左衛門

さらぬたにそれかあらぬかみえぬ夜の[illegible]

秋の夜すからとこにいふ題をよみて
よませられけるうたにあはせなむ
その中にいれられて　天暦御時

秋の夜の暁かたのしくれとは人しれすこそ袖はぬれけれ
時雨を　中務卿具平親王

なかめつゝ我身よにふる事はいくらかはれのゆくのなかそへに
哥しらす　小野小町

木枯の風にみたれて人しれぬ心のうちのいはすの此神
述懐百首哥よみ侍ける時紅葉を
皇太后宮大夫俊成

嵐ふく峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我涙かな

題しらす　崇徳院御哥
うたて猶萩の上風身にしみてひとりそ秋のゆふへかなしき

竹の葉に風ふきよはる夕暮のものゝあはれは秋としもなし
式子内親王

夕暮は雲のけしきをみるからになかめしと思ふ心こそつけ
和泉式部

暮ぬなりいくかをかくてすきぬらん入相の鐘のつくつくとして
暁のこゝろをよませ侍ける
皇太后宮大夫俊成

暁とつけの枕をそはたてゝきくもかなしき鐘の音かな
百首哥に　式子内親王

あかつきのゆふつけ鳥そあはれなるなかきねふりを思ふ枕に
わすられしとおもひそもらるを人のとふら

つかはしける　　和泉式部

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月

題不知　　大僧正行尊

さくらねのいほりかむかしを思ひ出てとふ人もなき
終野へはいりて大峯へ修行してとふ人
あはれそ終りゆくものとおもふ許にはかりなき

哀とてとふみなとはいふ人ハ世捨にしきえおもてなし

百首哥よみ侍りける　　左近中将内大臣

花山のみやまの花ハ世捨かさはちりにおとつかふ

百首哥よみ侍りける述懐哥　　皇太后宮大夫俊成

しつかなる暁ことに見わたせはまたふかき夜の夢そかなしき

述懐百首哥よみ侍りける　　俊頼朝臣

ゆふひさすくろきおく山の雲のいろもとほしのふこともつれなし

かくのこすはてのあさひに哀とちかひて常よ

僧正遍昭

蜘蛛の糸のかゝるをみても香の世の人

題しらす　　西宮前太政大臣

玉の緒をつなきし露の命にてやそちの秋そあはれなりける

赤染衛門

あさく咲せハ夕かほの花のいろのつゆもてこそ

[illegible]

和泉式部

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

前大僧正慈円

[illegible]

入道前関白太政大臣

[illegible]

大僧正行尊

ありし世をおもひいづる人はわれのみかいつをそれともしらぬ世なれば

題しらず

ねがはくはしのびにつけてくらすとも見し人ありとよそにきこえん

百首歌中に　前大僧正慈円

いつかわれ深山の里のさびしきにあるじとなりて人にとはれん

題しらず　俊頼朝臣

ますらをは山田のいほにおくれゐて世はいざしらず根にかへるらん

この歌あはれなることを捨てゝこの事おもひてよめる

ゆめおやふとおもてかりてはやさとく思ふらん

陸奥よりきたる法師　山田法師

たれのそのわかるゝくまにおもひけりたれも枕にわかれゆくかや

題しらず　寂蓮法師

数ならぬ身はなき物になしはてつたがためにかは世をもうらみん

法橋行遍

すゑの世もこのなさけのみかはらずと見し夢なくはよそにきかまし

守覚法親王五十首歌に

源師光

おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思ひは

題しらず　八条院高倉

うき世には住うつ月日ふるにいつか八月の入をしむらん

西行法師

かずならぬわが身を思ふ心こそかくてうき世にすまゐなりけれ

藤原清輔朝臣

ながらへて又このごろやしのばれんうしとみし世ぞいまはこひしき

寂蓮入道人〻すゝめて百首歌よませ侍りけるにいなひ侍りて熊野へまうてける道にて夢に何事もおとろへゆけとこの道こそ世のすゑにかはらぬ物はあれなほこの歌よむへきよし別当湛快三位俊成に申すと見侍りておとろきなから此歌をいそきよみ出してつかはしける奥に書付侍る

西行法師

すゑの世もこのなさけのみかはらすと見し夢なくはよそにきかまし

千載集えらひ侍りける時ふるき人〻の歌を見て

皇太后宮大夫俊成

行末ハ我をもしのふ人やあらんむかしを思ふ心ならひに

崇徳院に百首歌たてまつりける無常歌

世の中を思ひつらねてなかむれはむなしき空にきゆる白雲

百首歌に

式子内親王

くるゝ間もまつへき世かはあたし野の末葉の露に嵐たつ也

桜津園におはしてけの葦根見えしさもいく

花山院御歌

津乃国のなからふへくもあらぬかなみしかき蘆のよにこそありけれ

中務卿具平親王

色こやし萩乃葉しふく露のなれなきそのはかなさ

題しらす

蝉丸

秋風になひく浅茅の末ことにおく白露のあはれ世中

世中ハとてもかくても同し事宮もわらやもはてしなけれは

新古今和歌集巻第十八

神祇歌

ちはやふるかの日に松おもしろくさ種は
この歌は日吉社司社頭より日の山に瑞
てる日に給ふれは人は尊きの入道てゐるかとみへ
なかけみかれ人たちも我宿のかれ見はやさし梅の立枝を
此歌は寛文二年の冬の夕方に露のまつれるか
とおもひて安楽寺は梅ともって給ふへきの尊さよみて
ゆきたるとみへ
ゆくらくし南の岸よりいとしさみそ人小の我かな
此歌は興福寺の南円堂しか給ひける時
春日のりの御神のみ詠給ひけるとみへ
やはらくる御やかたのいたのもゆる露を
住吉御歌とかし
住かよう年は多くなりぬ松を二つといはれけるかなく
このうらはかたへ住吉にまうでゝ人かはとかく
かはたる人のえにまつは二つといはれけるとを
てなそてまつりきて御とかむいつ
しつかしと君は浪こえの名て我代のいはれて
伊勢物語に住吉に行幸の御事の御さし神の御
給ふとかや
人ならはやくとらやかの神さへあらて見せて
此歌は待賢門院の堀川は…熊野へ
まうでしける春日は…

また後にまいりし時にいてさかりきまよろ
とこ給ひける御託宣ありしといひつたへける
ころ御禮せけるにあてかなひかはいおさきよ我を見た
此寺塔奥にあ見給へるの熊野の三年後にして
むしろ取ありてはしめ給ひ給ひ修りしける
うかれいではしいひいはいまとき出て以前にし
伏しらひ給ふ夜の夢に見えたまひけるとなん
やよいの事あまり給ひておはしましの出しけるとなん
此寺は弟の子孫なるあつまりて後
うらしもかはいちまつ人熊野の御前に通夜
しける給ひける夢に見えてよみける
まれにもいふかはそは又あはせての給ひける地

賀茂御手洗にてよみ侍りける

絶すしてなかれてたえし水のおもかはかはらぬ代々のあとをむすひて
見又賀茂にまうでて侍りける人の夢に見えてよみけるといへり
ありきつる我身見捨てまかりぬる人の後朝ぞかや

石清水にまうでて

みな人の海まて白浪の立ちゐに何をくよくよこの世
此寺は稱徳天皇の時和気清丸を勅使
にてまいりける時託宣ありけるとなん
延長六年日本紀竟宴日神日本磐余彦天皇

大江千古

天の原わかれゆく雲やあまの川にあらはれけん

猿田彦

紀淑望

久堅のあめの八重雲ふりわけてくたりし君をわれそむかへし

玉依姫　　　　三統理平

いまそわかれし岩舟にねてそ秋津嶋には宮はしわかつ

賀茂社の午日うたひ侍るなる歌

やまとかも海のあらしのにしふかはいつれの浦にみふねつなかん

神楽を見侍りて　貫之

かく霜に冬もかはらぬ榊葉の色やは人のこゝろなりけん

臨時祭をよめる

天人のまねふ宮にはふりはへて賀茂の河浪にかけん

大ねに侍るとき勅使にて大神宮に侍て

てよみ侍りける　　摂政太政大臣

神風やみもすそ川のそのかみに契し事の末をたかふな

あまの宮にてよみ侍ける

藤原定家朝臣

契ありて今日宮川のゆふかつら長き世まてもかけてたのまん

公継卿勅使にて太神宮に侍ての

ほりけるに斎宮の女房中より遣ける

よみ人しらす

うれしさは袖にまかせて神の御前にいくたひか袖をかけまし

返し　　春宮大夫公継

神風やいとゝ何にか祈るらんとしつてよ君か代をもちひ

太神宮奉歌中に　　太上天皇

なかめはや神路の山に雲消て夕の空を出む月影

神風やとよみてくらになひくしてかけてあふくといふもかしこし

題しらす　　西行法師

宮はしらしたつ岩根にしきたてゝ露もくもらぬ日の御影かな

神路山月さやかなるちかひありて天の下をはてらすなりけり

伊勢の月よみの社にまいりて月を見て
よめる

さやかなる鷲の高嶺の雲井より影やはらくる月よみの森

神祇哥とてよみ侍ける

　　前大僧正慈円

やはらくる光にあまる影なれやいすゝ川原の秋の夜の月

公継卿勅使にてまかりけるにいちしのむまやにてよみ侍ける

　　中院入道右大臣

さらにくむ見まくのほしきは見てもそれ川の瀬の白

入道前関白家百首哥よみ侍けるに

　　皇太后宮大夫俊成

神風やいすゝの河の宮柱幾千世すめとたてそめけん

　　俊恵法師

神風や玉くしの葉をとりかさし内外の宮に君をこそ祈れ

五十首哥奉し時

　　越前

神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日そなき

社頭納涼といふ心を

　　大中臣明親

いすゝ川空やまたしき秋の声したつ岩根の松の夕風

香椎宮の杉をよみ侍ける

　　よみ人しらす

ちはやふるかしゐの宮のあや杉は神のみそきにたてるなりけり

八幡宮の権官にて年ひさしかりける事をうらみて御神
楽の夜まいりて榊にむすひつけ侍りける

法印成清

榊葉にそのいふかひはなけれとも神に心をかけぬまそなき

賀茂にまうてゝ

周防内侍

年をへてうきかけをのみみたらしのかはる世もなき身をいかにせん

文治六年女御入内の屏風に臨時の祭
かける所をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらし川に影見えて氷にすれる山藍の袖

社頭雪といふ心をよみ侍りける

按察使公通

ゆふしての風にみたるゝ音さえて庭しろたへに雪そつもれる

十首歌合の中に神祇をよめる

前大僧正慈円

君を祈るこゝろの色を人とはゝたゝすの宮のあけの玉垣

見あれにまいりて侍りけるにさきのくるまに
とゝまりよめりける

賀茂重保

誰かまた年へぬる身は何によせかけてあふひ

社司ともきさまいりて葵かけ給けるに
よみ侍ける

賀茂季平

おほかたの人のねかひをかなへてそ神もこゝろに何の

鴨社歌合とて人々よみ侍けるに月を

鴨長明

みしやそも白河の流れ絶えし月もかはらすすまねくれなと

弁に侍りける時春日のまつりにくたりて周防内侍につかはしける　中納言資仲

万代とわたるこゝろはさき春日の山のみねのかよひち

文治六年女御入内屏風に春日祭

入道前関白太政大臣

ふまつる神のみやゐはひさしくかはらぬいにしへのまつり

家に百首歌よみ侍りける時神祇の心を

わかみしまみそき山の影をてらし方おさきまよはぬ道や

皇太后宮大夫俊成

春日野のおとろの道のむもれ水すゑたに神のしるしあらはせ

大宰権帥の条にて周防内侍につかはしける

藤原伊家

よ世をへてかけし紅葉をとさそかれ山おろしの風

最勝四天王院障子に小塩山かきたる所

前大僧正慈円

をしほ山神のしるしを松の葉に契りしことはかはらさりけり

日吉社に奉りける歌の中に二文字を

やはらくる影そふもとにくもりなき本の光は峯にすめとも

述懐のこゝろを

わかたのむ七の社のゆふたすきかけても六の道にかへすな

おもひ見て日よしの神にかゝる身をやすき心にまかせよの神

とかへりのいのるまことのこゝろこそうつしゝ神のめくみなる

小野の宮をしみてそまつる

ちかひをはいはにかけてねきかくかけてのいまゝての岩

熊野へまうで給ひける時花のさかりなりけるを
御覧じて　白川院御製

咲にほふ花のけしきをみるからに神の心ぞそらにしらるゝ

熊野にまいりてよませ給ひける

太上天皇

岩にむす苔ふみならすみくまのゝ山のかひある行すゑもがな

新宮にまうづとて熊野川にて

熊野川くだす早瀬のみなれざほさすがみなれぬ浪のかよひぢ

白川院熊野にまうで給へりけるに御供
の人々しほやの王子にて歌よみ侍りけるに

後徳大寺左大臣

たちのぼる塩屋の煙浦風になびくを神の心ともがな

熊野へまうでて侍りしに石代の王子に人々の名
かきつけさせてしばし侍りしに拝殿のなげしにかきつけて侍り
ける歌　よみ人しらず

いはしろの神はしるらんしるべせよたのむうき世の夢の行すゑ

このうたはかの御社にまうでてしらせ給ひける撰集に入べきよし
まいらく

太上天皇

奥ある道はかはらじ末のよもわれにあはせよ神代の昔

加賀守にて侍りける時しら山にまうでたりけるを
おもひいでて日吉の客人の宮にてよみ侍りける

左京大夫顕輔

年ふともこしのしら山わすれずはかしらの雪をあはれとも見よ

絵に
一品聡子内親王もとよりしはすにてくたしてくるよ
今給ひろまよまち　藤原道経
もみぢ葉は濱松にしも風吹は浪のそこにてちりもまさりき
かしこの屏風に絵に三月神まつる家のまへ
に馬ひき出たる人の所を
能宣朝臣
ゆふ森の宮のかくしら(れ)たるものとしらぬ身は秋の壁
延長御時屏風に夏神楽のこゝろをよみ侍
りける　貫之
河社しのにおりはへほす衣いかにほせばか七日ひざらん

新古今和歌集巻第二十

釈教哥

なほたのめしめぢが原のさせも草我世の中にあらむかぎりは
なにか思ふ何か歎かむ世の中はたゞあさがほの花の上の露
このふたうたは清水寺観音御哥となむいひつた
へたり　知縁上人伯耆の大山にまうでゝいでなむと
しける暁夢に見えてける哥
山ふかくとしふる我もあるものをいづちか月の出でゝいるらん
難波のみ寺にまうでゝ北しのたくとやうく
行基菩薩
おしなべて不浪の浪しは流れてもうき世にすめるかなけるかな
比叡山中堂建立の時

傳教大師
阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせ給へ

入唐時　智證大師
法の舟さしてゆく身そもろもろの神も仏も我をみそなせ

菩提寺の講堂の柱に虫のくひたりける哥
しるへある時にたにゆけ極楽のみちにまとへる世の中の人

みたけの笙の岩屋にこもりて　日蔵上人
寂莫の苔の岩戸のしつけきに涙の雨のふらぬ日そなき

臨終正念ならん事を思ひてよめる　法円上人
南無阿弥陀仏の御手にかくる糸のおはりみたれぬ心ともかな

題しらす　僧都源心
我たにもまつ極楽にうまれなはしるもしらぬもみなむかへてん

天王寺のかめ井の水を御らんして　上東門院
にこりなき亀井の水をむすひあけて心の塵をすゝきつるかな

法華經二十八品の哥人々によませ侍りけるに提婆品の心を　法成寺入道前摂政太政大臣
わたつ海のそこより来つる程もなく此身なからに身をそきはめし

勧持品の心を　大納言斉信
かくなる命ハなにかおしからん法とく[illegible]

出月いつしに雲林院の菩提講にまうてゝ
詠りける　肥後

しらゆきの雲の林と見えしは法のむしろの花咲にけり

涅槃經に見え給ふ阿耨達池のことを
[illegible]
[illegible]

皆人の[illegible]月の影よし

述懐　前大僧正慈圓

ねがはくはしばしやみぢにやすらひてかゝげやせまし法のともし火

[illegible]の白露[illegible]

極樂へまだ我心ゆきつかずひつじのあゆみしばしとゞまれ

觀心如月輪若在輕霧中の心を

権僧正公胤

我こゝろなほはれやらぬ秋霧にほのかにみゆる有明の月

家に百首哥よみ侍りける時十界の心をよませ侍りける
縁覺の心を

摂政太政大臣

おく山にひとりうき世はさとりにきつねなき色を風にながめて

暁鐘の聲をきゝて

小侍従

冬と[illegible]暁の鐘の音にぞしる[illegible]

摂政太政大臣家百首哥に十樂の心をよみ侍けるに
聖衆來迎樂　寂蓮法師

むらさきの雲路にさそふ琴の音にうき世をはらふ峰の松風

蓮花初開樂

これやこのうき世のほかの春ならむ花のとぼそのあけぼのの空

快樂不退樂

春秋はさきてはちる花さへも露はをれは紅に今やおもふ

刹桜結縁楽

ちとせふる我ぬをさめて綱を結ぶき恵まされしくから

法華経二十八品の中あんたに方便品

唯有一乗法の外　前大僧正慈忠

いかにせむ我法の為のやかてと色の世にもとてふ

化城喩品　化作大城郭

かりそめのうき世中をおもひすてて雁はおとて有明なり

分別功徳品　或住不退地

鷲の山のまことの法のちかひにてふみなれぬくる力あり

普門品　心念不空過

たのもしなひとつの世をも頼めとも思ひはあはれなれはこそ

水清常不満に心を

景道院法印

さしのほる東の山の月かけを空に照らす道のみちしるへ

先照高山

朝日さす高根の峰にうつくしき雲なひく若葉のまさり

家に百首の歌よみ侍りし時の歌

薪采智　入道前関白太政大臣

そこきよく心の水をたもちなはうつるも月はさらにさやけき

勧持品　正三位経家

法をもとめ身をもすてしとやいはまへ命をも思ひはてし

法師不加刀杖瓦石　念佛故應忍の心を

寂蓮法師

ゆふ暮の夜の窓うつ雨の音きけはうき世をわすのこゝろなりけり

此首第五帖 内秘菩薩行の心を

前大僧正慈圓

住む人の乗るへき舟のおもひの月はくもりなりけり

くもとめし法文百首の奥に結縁二首

但空寂如空火　寂蓮法師

ちりはての葉をみとをしてひとりそ住つゝ人やまの色

菩薩清涼月　遊於畢竟空

雲はれし月きよくもとらぬうき世をそむく月の

栴檀香風　悦可衆心

梅か香は花もちら思ふも身にしみて吹かよふ庭のかぜ

作是教已　復至他國

やまかけのいりあひのかねの声ことにけふもくれぬときくそかなしき

是日已過　命即衰滅

ふるさとの今はとかはりしなへ入りしみ情の花そかなしき

悲鳴嗚咽　痛戀本群　素覚法師

草枕よかりそらしい鶏ときこえて友まよふ声の床そかなしき

寂想入無為　寂然法師

そむくとは住つる世にかはりてあはれとおもひとはる人もなし

合會有別離　源季廣

あはるとも嶺にかゝる白雲のへたつる世のならひなりけり

聞名欲往生　寂然法師

ききなくも光ありいつかいきの松かえに人まちかねて

懐恋慕渇仰於佛

別れにし其の面影の恋しきに夢にも見えよ山の端の月

十戒并に見え給ふ序に不殺生戒

わたつ海のふかきにしづむいさりせでたもつかひある法をもとめよ

不偸盗戒

うき草のひとはなりともいそがくれおもひなかけそおきつ白浪

不邪婬戒

さらぬだにおもきがうへのさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ

不酤酒戒

花のもと露のなさけはほどもあらじゑひなすゝめそ春の山かぜ

入道前関白家に十如是并に詠ませ給ひけるに

如是報　二條院讃岐

うきもなほむかしのゆゑと思はずばいかにこの世をうらみはてまし

待賢門院中納言人々にすゝめて二十八品并に詠ませられけるに廣度諸衆生其数無有量の心を　皇太后宮大夫俊成

わたすべき数もかぎらぬ橋柱いかにたてける誓ひなるらん

美福門院に極楽六時讃の絵にかゝるべき歌奉るべき由侍りけるによみ侍りける

時に大衆法を聞きて弥歓喜瞻仰せん

今ぞこれ入日を見ても思ひこし弥陀の御国の夕暮の空

暁到りて浪の声金の岸によする程

百首歌の中に毎日晨朝入諸定の心を

式子内親王

しれはかゝる暁よにとへとてはまことにかくそなき

発心和歌集の普門品種々諸悪趣

選子内親王

あふ事をいつくにとてかちきるへきうき身のゆかん方をしらねは

五百弟子品の心を　僧都源信

玉かけし衣のうらをかへしてそおろかなりける心をはしる

維摩経十喩中此身如水泡といふ心を

赤染衛門

夏や夏かや夏とわかねはいかなる世にか内にとゝめん

二月十五日の暮つかたに伊勢大輔の許に遣はしける

相模

常よりも今日の煙のたよりにや西をはるかに思ひやるらん

かへし　伊勢大輔

けふはいとゝ涙にくれぬ西の山おもひ入日の影をなかめて

西行法師

やみはれて心のそらにすむ月は西の山へや近くなるらん

待賢門院堀河

西へ行しるへと思ふ月かけのそらたのめこそかひなかりけれ

かへし　西行法師

たちいらて雲まをわけし月かけはまたぬけしきやそらに見えけん

人の身まかりにける後結縁経供養しけるに即往安楽世界の心をよみ侍りける

瞻西上人

昔見し月の光をしるへにてこよひや君か西へ行し

観心のこゝろをよミ侍ける

西行法師

やミ晴て心乃そらにすむ月ハ西の山辺やちかくなるらん

[illegible]

[illegible]